DISTANCE BETWEEN OBJECTS VOL.5

EL ZINE

D-TAKT OI RÅPUNK

WARVICTIMS

ALLIANCE

THE FIGHT

LIMP WRIST, LENGUA ARMADA etc
MARTIN SORRONDEGUY
as photographer

RUIDOSA INMUNDICIA

YOU a.k.a. Senpai
FORWARD & BUZZY大和町BAND

MoSTROS

GASMASK TERROR



Contents vol.5



welcome to LOGICS →



RUIDOSA INMUNDICIA

**チリ出身の女性ヴォーカル、Caroがフロントに立ち、現在はオーストリアを拠点に活動を続けているバンド、RUIDOSA INMUNDICIA。
シングルにドイツのSOLID DECLINEとのスプリットLP、そしてデモ音源のアナログ化と、ここ日本でも熱心なハードコア・リスナーからの支持は厚い、ような気がする。根拠は名古屋のANSWER/中村さんがADVERSE誌で音源紹介をしていたのと、誰か忘れたけどバンドの人が「最近はRUIDOSA INMUNDICIAが好きだ」と言っていた、というだけなので、もしかしたら日本国内の支持者は10人くらいかもしれないですが、そもそも数の問題ではないのです。
自分が好きか否か、表紙にしたいか否か、だけが重要であって、マジョリティ/マイノリティなんて今更気にしても仕方がない。
というわけで、RUIDOSA　INMUNDICIAのインタヴューです。小細工無用のキャッチー&ファストなラティーノ・ハードコア・パンク、これを聴いて燃えなければ、嘘だ。**

■まず最初に、メンバーのうち2人はチリからオーストリアに移住して来たんだよね?どうして?

Caro「そうよ、2003年にオーストリアへ渡ったの。チリに住んでいるオーストリア人も何人か知っていたし、オーストリア人の友達もいたからね。しばらく考えてオーストリアへ移ることを決めたのよ。私の兄弟も同じ理由で、私が引っ越した一ヶ月後にオーストリアにやって来たんだけど、でも彼は全然バンドとかやっていなかったから、すぐチリに帰っちゃった」

Georg「彼女たちがオーストリアに来てくれて良かったよ。来なかったら、こんなに素晴らしいバンドは組めなかったからね(笑)」

■RUIDOSA INMUNDICIAの結成について聞かせて。

Georg「Seitiと俺とで2003年の冬に遊びのサイド・プロジェクトとして始めたんだ。俺たちは以前に"パワー・ヴァイオレンス"や"グラインドコア"のバンドをいくつかやっていたんだけど、ハードコア/パンクもやりたくなってね。それでシンプルなハードコアの曲を少し書いていた。作っててかなり楽しかったね。自分たちでバンドを結成して、曲を作って、自分たちの音楽的なスタイルを生み出すのって本当に楽しいことなんだ。それから俺たちはヴォーカルとベーシストを探した。最初に2、3人のヴォーカルを試してみたんだけど、どいつもこいつもダメでさ。何ヶ月か経ってから、チリから来たばかりのCaroとライヴで知り合ったんだ。話してみたら、チリで彼女はいくつかのパンク・バンドで歌ったり演奏したことがあるって言うんだ。それで、俺たちのバンドで歌ってみないかと彼女に聞いてみた。
彼女は次の練習にやってきて、俺たちの曲を歌ったんだけど、本当に気に入ったよ。完全に俺たちのスタイルにフィットしていた。Caroも俺たちの音楽が好きになってくれたみたいで、それで彼女がバンドに加入したんだよ。俺たちと一緒に暮らしていたMundi(俺とSeitiとMundiは田舎の一軒家で一緒に暮らしていたんだ)とはそれまで何回かジャムったりしていたから、彼が正式メンバーとしてベースでバンドに加わった。その後、Caroの兄弟であるMiguelがセカンド・ギターとして加入したんだけど、Caroがさっ

きも言ったように、彼はチリに帰ってしまったから、ギターは一人だけになったんだ。だからRUIDOSA INMUNDICIAはCaroがヴォーカル、MiguelとSeitiがギター、Mundiがベース、俺がドラムだった。今はMiguelがいないけど、それ以外は同じラインアップだよ」

■RUIDOSA INMUNDICIA以前のバンド活動、音楽的なキャリアについてもお願い。

Georg「Mundiと一緒にやってた"パワー・ヴァイオレンス"バンドでも、俺はドラムを叩いていた。Seitiもこのバンドにいたけど、振り返ってみるとこのバンドはクソだったな(笑)。そのバンドの前にもいくつかやっていたけど、練習をちょろっとやっていただけで、特別なことは何もしていないよ。あと俺はRUIDOSA INMUNDICIAをやりながら、SOTATILAっていうフィンランド・スタイルのハードコア・パンク・バンドでもドラムを叩いている」

Caro「私はチリでCLEARっていうメロディック・パンク・バンドで歌っていたの。それとジャム・バンドでベースとギターを弾いたりね。今はMARADONAというハードコア・バンドでギターを弾いている。それと新しいパンク・ロック・バンド、DEMENZIA KOLEKTIVAではギターとヴォーカルも担当しているわ」

Mundi「Seitiと僕はグラインドコアを以前はやっていたよ。最近では、SOTATILAとCOLD WORLDでベースをプレイしている」

■RUIDOSA INMUNDICIAって英語で"Noisy Filthiness"(薄汚い騒音)になる?どうしてこのバンド名にしたのかな?君たちのサウンドにマッチしている名前だね!

Georg「そうだよ、RUIDOSA INMUNDICIAの意味は"Noisy Filthiness"か"Dirty Noise"になるかな。Miguelがこの名前のアイデアを持って来たんだけど、俺たちに合っていると思ったからこの名前にしたんだ。あとCaroはスペイン語で歌っているから、スペイン語の名前にもしたかったんだよな」



Mundi「多分、僕たちのバンド名はノイズ・パンク・バンドの方がもっとフィットするよね。僕らは音楽スタイルを、CONFUSEみたいなノイズ・パンクに変えたほうがいいのかな(笑)」

■時折レヴューでLOS CRUDOSと比較されていると思うんだけど、それについてはどう思う?彼らからの影響はあるのかな?

Georg「俺たち全員LOS CRUDOSは好きだけど、影響はあまりないかな。Crudosスタイルのバンドをやろうってスタートしたわけじゃないし。確かにスペイン語で歌ったり、俺たちには共通項がいくつかあるよ。ファストなスペイン語で歌うハードコア・パンクだからね。それで多分、似たように聴こえるんだと思う。バンドを始めるにあたっての影響を受けたバンドは、アメリカやヨーロッパの80'sハードコアが大きいよ。RUIDOSA INMUNDICIAのスタートにとって、KOROの存在はデカイね」

Mundi「沢山のバンドから影響は受けているし、もちろんLOS CRUDOSも僕たちに影響を与えたよ。けど、もっと多くのバンドからも影響は受けているしね。僕らはいつもLOS CRUDOSと比較されているけど、それってラティーノ/スパニッシュ・スタイルで最も知られているのが彼らで、サウンドがちょっと僕らと似ているからだろうね」

■SOLID DECLINEとのスプリットLPは素晴らしかったね。どうして彼らとスプリットをリリースしたの?Thought Crime(レーベル)の要望で?

Georg「Thought CrimeのオーナーでSOLID DECLINEのベーシストであるThomasとは古くからの友人なんだ。SOLID DECLINEとは2、3回一緒にライヴもやったし、Thomasがスプリットのアイデアを提案してきたんだ。それで、俺たちもそのアイデアを気に入ったからスプリットLPを作るのに賛成したんだよ。Thomasは、俺たちの1st EP"de una vez"もリリースしてくれたしね」

■あの作品はアートワークも凄かったよね。スクリーン・プリントのジャケットは誰のアイデアだったのかな?あと、盤のラベルにあったスイカと肉の写真ってなんの意味だったの?

Georg「うん、アートワークは本当に素晴らしいよね。Thomasの良い友人にスクリーン・プリントをプロでやっているやつがいてね、クールなスクリーン・プリントのアートワークが出来たってわけさ。格好良いジャケットだよね!ThomasとKilly(CWILLでヴァイオリンをプレイしている)がグラフィックと





レイアウトを担当したんだけど、盤のラベルにあるスイカと肉とビールの写真はThomasのアイデアでさ、それらはSOLID DECLINEがツアー中にふざけながら撮ったものなんだ。俺が思うに、そんなに大した意味をこの写真には込めちゃいないと思うよ」

■スペインのハードコア・バンド、ANTI/DOGMATIKSSのカヴァーもしているよね。これはどうして?彼らからの影響は大きいのかな?

Georg「Caroと俺はANTI/DOGMATIKSSの大ファンなんだよ。それでカヴァーしたかったんだよね。カヴァーする曲を"fuego en la moncloa"に決めたのはそれが最高のハードコア・ソングだからさ。けどANTI/DOGMATIKSSからの大きい影響ってのはないな。俺たちが彼らのことを知ったのは、1st EPをリリースしてからだったしね。何人かは俺たちのサウンドが彼らに似ているって言うからチェックしてみたんだよ。そしたらスゲー気に入ったんだ。けどそんなには似ているとは思わないよ。多分、速い曲だからっていうので、俺たちの音と似たように感じるんじゃないかな」

■それと歌詞についても聞きたいんだけど、"gritos(screams)"は児童虐待に関する曲?

Caro「そうよ、"gritos"の歌詞は児童虐待を扱っている。世界中で起こっているし、本当に嫌気がさすことだから、怒りに駆られるわね。それで私はこの曲を書いたのよ」

■ドイツのHeartfirstから新しい7"EPをリリースするよね。どんな仕上がりになりそうなのかな?

Georg「うん、俺たちの良い友人であるFloが新しいEPをリリースしてくれるんだ。7月か8月にレコーディングするつもりだよ。そのEPは俺たちのデモの時のような速くて短い曲と、LPと前のEPの時のようなキャッチーでメロディックな曲が合わさったような感じになるかな。まぁ、俺たちはRUIDOSA INMUNDICIAのサウンド/スタイルをそんなには変えていないから、いつもと同じような感じ、速くてキャッチーなハードコアだよ。ただ音質に関しては、もっとラフで汚い音、デモとEPの間くらいにしたいと、少なくとも俺は思っている。スタジオに入ってみてからどうなるか分かることだろうけど、良い仕上がりになるだろうね」

Mundi「新曲は古い曲よりもずっと良くなるよ。新しい7"は僕らにとってベストなものになるはずだ」

■スペイン語で歌うことは君らにとって重要なことだよね?もし英語で歌ったとしたら、全く違うサウンドになっているとも思うよ。

Caro「母国語だから、スペイン語で歌うのが好きなの。歌詞もずっと書きやすいしね。ドイツ語よりもスペイン語の方が自分を表現しやすいし、もちろん私たちの音楽にとってもこれは大切なスタイルだと思っているわ。ドイツ語や英語でもし歌ったら、やっぱり違って聴こえるでしょうしね。ラティーノ/スパニッシュ・ハードコア・バンドじゃなくなっちゃうわ」

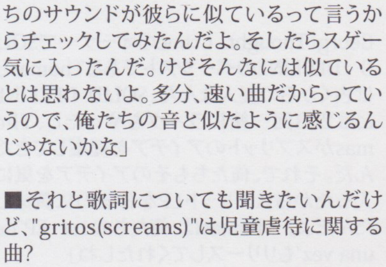
Georg「スペイン語のヴォーカルっていうのは、予定してはいなかったんだ。Caroとの最初の練習の時、彼女がスペイン語で歌って、それを俺たちも気に入ったんだよね。曲とも凄く合っていたし、多分、他の言語よりもずっと良いよ」

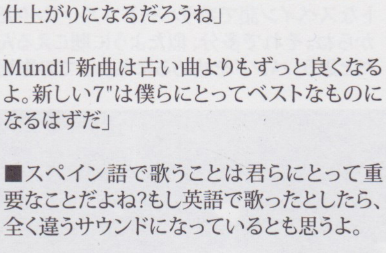
■チリのバンドにインタヴューした時(DEMONA/Vol.3参照)、そのバンドの女性ヴォーカルは、"チリはメタルに関しては女性不在の国","(女性がチリでバンドをやるのは)間違いなく厳しい"と言っていたんだ。うん、これはメタルの話しだから、パンク/ハードコアとはまた違っているんだろうけど、君はチリにいる時、そこでのパンク/ハードコア・シーンをどう感じていた?

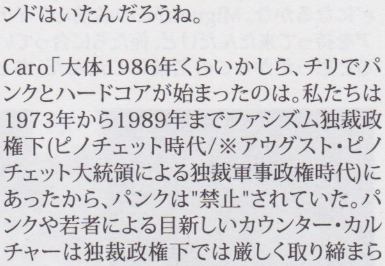
Caro「正直に言うと、私はもう8年間もオーストリアに住んでいるからチリのパンク/ハードコア・シーンについてはあまり語ることが出来ないの。確かに、あそこにはそれほどハードコア/パンク・バンドをやっている女性は多くないわね。ハードコア/パンク・シーンはまだ男性によって支配されている。チリのパンク・シーンで活動している女性がいないってことではないわよ。私はバンドに限らず、もっともっと女性がパンクと関わっていくのが普通になると思うな。けど、パンク・シーン全体は男性に支配されているのかしら?これってもう昔の話し?ここヨーロッパでは、女性がパンクであることも、パンク・バンドでプレイすることも何ら問題はないわ」

■あと、チリのハードコア・バンドって君にとってはどうなのかな?80年代のバンドとかあまり知らないんだけど、でも格好良いバンドはいたんだろうね。

Caro「大体1986年くらいかしら、チリでパンクとハードコアが始まったのは。私たちは1973年から1989年までファシズム独裁政権下(ピノチェット時代/※アウグスト・ピノチェット大統領による独裁軍事政権時代)にあったから、パンクは"禁止"されていた。パンクや若者による目新しいカウンター・カルチャーは独裁政権下では厳しく取り締まられていたし、人々は恐怖の中で生活していた。パンクであることは、刑務所に入れられる恐怖でもあったのよ。殆どの人たちは、危険を冒したくはないものよね。けど、そう







いった状況にも関わらず、パンク・バンドを始めた人たちがいた。彼らは地下室での違法ライヴでプレイしたり、隠れて練習していた。レコードとかを作るのも難しかったわ。PINOCHET BOYSはチリ初のパンク・バンドの一つ。デモ・テープを1986年に発表している。FISKALES AD HOKもその頃のバンドで、今も活動中よ。それから1989年くらいになると、ANARKIA、CAOS、OCHO BOLAS、KK URBANA、POLITICOS MUERTOSが出て来たわね。当時のデモや音源なんかは、コンピレーションCDとしてまだ聴くことが出来るわよ。1990年に独裁政権が終わりを迎えて、パンク・シーンは拡大していったの」

■君らはMyspaceを使っていないよね。フランスのLA FRACTIONみたいにMyspaceをボイコットしているバンドもいるけど、どういう考えを持っているの?

Georg「俺はあんまり興味がないんだよね。ちょっと非現実的なものに感じるし、もし君が1000人の友達が欲しいと思っても、君が本当に分かり合える相手というのは100人くらいじゃないかな。Myspaceってやつが始まった時に、俺が思ったことはこんなことだね。まぁ、俺には関係のないものだよ。みんなが使っているのは理解しているし、別に問題もないとは思うけど、それにしても奇妙なものには感じる。CaroとMundiは別のバンド、SOTATILAとしてMyspaceを使っている。俺たちには自分たちのホームページがあるから、Myspaceを使わなくても十分だよ。Myspaceはバンドがツアーやライヴを企画したりする助けにもなっているし、君もバンドをやっている人ともっと沢山知り合うことが出来るだろう。けど、君はこれを使わなくても出来るよね」

Caro「私はMyspaceのアカウントを一つ持っていたんだけど、削除しちゃった。私はFacebookだけ使っている。こっちの方がいいわ。簡単だし、家族や友達へ連絡するのに凄く役立っているから」

Mundi「僕はMyspaceは好きだよ。バンドを説明するのにはとても良いと思うし、使い方もシンプルだし。RUIDOSA INMUNDICIAのMyspaceも作りたいんだけど、他のメンバーが望んでいないからね」

■チリとオーストリアの大きな違いは感じている?音楽シーンや日常生活、政治とかも。

Caro「えぇ、確かに大きな違い、文化的な差異があるわね。けど、私がチリを去ってから8年も経っているし答えるのは難しいかな。ここでの暮らしや音楽とかについては、今ではよく分かっているんだけどね。オーストリア/ヨーロッパにいても、家族や古くからの友達には連絡しているわよ。みんなチリで何が起こっているか教えてくれるし。私はチリの海や食べ物、気候を失っているわね…。音楽シーンや一般的なサブカルチャーはどんどん大きくなっていると私は聞いているわ。沢山バンドも出てきて、スクワットも、ライヴをする場所もね。以前よりはライヴを企画するのは簡単になったんじゃないかな。キッズもより意識的になって、自分たちで動こうとしているし、これは良いことよね。今年チリに行く予定なんだけど、シーンにいる人たちに会って、自分自身を振り返ってみるつもりよ!」

■日本のバンドや文化についてはどう?PRANK RECORDSのKenが君らのEPをMRRで、"COMESスタイルの素晴らしい女性ヴォーカル"ってレヴューしていたね。COMESは80年代の日本のハードコア・パンク・バンドなんだけど知ってる?

Georg「もちろん日本のハードコア/パンク・バンドは沢山知っているし好きだよ、けどCOMESは知らなかったな。このインタヴューを受けてすぐに調べてみた。俺はもう彼らの「No Side」LPを注文済みだぜ(笑)。凄く格好良いバンドだね、大好きだよ。パンクなリフも素晴らしい。他に古くからのバンドで好きなのは、GAUZE、SYSTEMATIC DEATH(もうすぐここヴィエナで共演するよ)、NIGHTMARE、S.O.B.。それともう少し新しいバンドで好きなのはCRUDE、ETAE、LIBERATE、KRIEGSHÖG、SHIKABANE(初期が好きだね)、FRAMTIDかな。…Mundiはもっとバンド名を挙げるだろうな(笑)。日本の文化はよく知らないんだけど、色々調べてみるよ」

Mundi「僕は日本のパンクに本当、夢中なんだ。SYSTEMATIC DEATH、WARHEAD、FORWARD、D-CLONE、SYSTEM FUCKER、D.S.B.、JABARA、SLANG、MUSTANG、BASTARD、JUDGEMENT、A.I.、DERIDE、CONFUSE、PAINTBOX、DISCLOSE、ASSAULT、ASSFORT、BLOWBACK、DESSERT、EXECUTE、GASTUNK、THE STALIN、ORGANISM、ROSEROSE、それにもっともっとね。LIP CREAMが再結成するのも知っているよ」

■RUIDOSA INMUNDICIAにとって最も重要な信念って何かな?

Georg「俺にとってのRUIDOSA INMUNDICIAは、楽しんで、友達と会って、自分の好きな音楽をやって、世界中のナイスな人たちとも会うってことが一番大事だよ。楽しみ、良い時間を過ごし、旅して廻るってのが俺の信条だ」

■今後の予定なんかは?

Georg「夏の終わりまでには新しいEPの作業を終えられたらと思っているよ。あと、日本をツアーしてみたいし北/南アメリカも。RUIDOSA INMUNDICIAとして時間のある限り世界を見て廻りたいんだよ」

■最後に読者にメッセージをお願い。ありがとう!

Georg「インタヴュー、そして興味を持ってくれてありがとう!日本で会えることを願っている!だからツアーを企画してくれ(笑)!」

Caro「Arigato!」

Mundi「ありがとう、そしてもし僕たちがツアーでいつか日本を訪れることが出来たら、火炎放射器には気をつけるよ(笑)」





MOSTROS

移住バンド特集第二弾(…なにそれ)はアルゼンチン出身、現在はスペインのマヨルカ島を拠点にしているMOSTROS!!
KILLER PUNK ROCKERSの自称に偽りなしのハイスピード・ロックンロール・パンクで、頭を空っぽにして楽しめる爽快感と直情性が最高です。目下の最新作"en las fabulosas aventuras de vacillatio et revolvo"LPでは、再生紙にスクリーン・プリントを自分たちで施し、しかもそのスリーヴの組み立ても手作業という(だからちょっと形がいびつだったりする)、驚異の完全ハンドメイド。無味無臭のデータ形式とは何万光年もかけ離れた、アナログ作品にしか出せない味わいが溢れています。
そのサウンドから、パンク・ロック～ガレージ・パンク・シーンに関わっているのかと想像していましたが、当地のクラスト勢やCRIMINAL DAMAGE、WARCRYとも対バンしていたりと、ハードコアともガンガン繋がっていて非常に興味深い存在です。ヴォーカルのMackyが、これまた物凄く丁寧に回答を寄せてくれました。

■君たちってアルゼンチンからスペインに引っ越してきたの?どうしてスペインに?理由を聞かせて。

「Alejoと私、Mackyで2000年に旅行をしていたの。Larryはその1年前から旅に出ていたのよね。この3人は全員違う友達を訪ねて行って、スペインにしばらく滞在していた。何か満たされない気分だったのよ。実際、私たちはもっと色んな世界が見たかった。だからかな」

■アルゼンチンとスペインの違いは感じる?文化でもパンク/ハードコアのシーンでも。

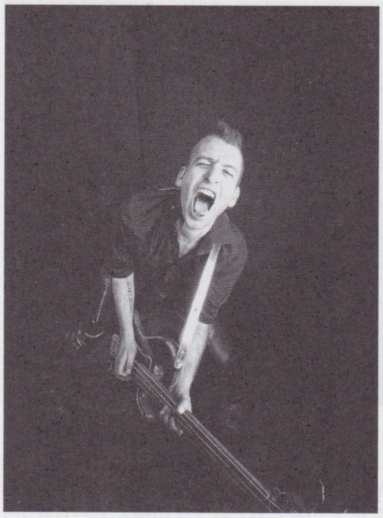
「私たちは今、州都パルマがあるマヨルカ島に住んでいるの。パルマは小さな町でね、シーン自体もどんな小さな町よりも小規模よ。こう言うと分かりやすいかしら、パルマの人口は70万人、マドリッドはちょうど400万人くらいかな。そしてアルゼンチンの首都、ブエノスアイレスの人口は1600万人!だから私たちはこれと言って個性のなかった生活から、小さな町の活気溢れる生活へと移行した。今の生活には結構満足しているかな!私たちはゆったりとしたリズムの生活が好きだしね。けど、私たちの音楽は違うわよ!それと、海の近くで暮らすのも大好きなの。島に暮らしていて不便なのは、船か飛行機じゃないとここから出られないってこと!だからスペイン本土やヨーロッパをツアーするのが大変なのよ。けどあなたはもう既に知っているわよね。あなた自身、島(日本)に暮らしているんだから!
他に違うことと言ったら、スペインでならあなたは沢山のバンドを、どんなに小さな町でも見かけられるでしょうね。アルゼンチンのパンク・シーンは凄くブエノスアイレスに集中しているの。そこには数えきれないほどのバンドがいるわ。もちろん、あそこでバンドをやるってことはかなり大変よ。輸入品の楽器なんて贅沢品だし、あの国の失業率も酷い。中産階級なんて一握りしかいないからね、レコードを売るのも簡単じゃない。多くの素晴らしいバンドがいて、最高のロックをやっているっていうのにね」

■MOSTROSの結成はどんな感じだったのかな?メンバーそれぞれの音楽的なキャリアとかも詳しく聞かせて。

「1999年の3月に結成した。MISFITSとJANE'S ADDICTIONをカヴァーしたりして練習してたわ。もう楽しむためだけにね。ラインアップは全然違ってて、私だけが唯一の、この狂った時期からの生き残りよ。MOSTROSは私の初めてのバンドでもあったの。何ヶ月か経ってからAlejoがベースとして加入したわ。彼はNIRVANAでプレイしていた(ジョークじゃないわよ。世界的に有名なNIRVANAとは違うけど)。それと、LA VERDULERAっていうバンドでもね。Larryは彼の地元、マル・デル・プラタではよく知られていたMAL DE PARKINSONで長いことプレイしていた。Juanmiはスペインのカルトなパンク・バンド、CEREBROS EXPRIMIDOSでギターとソング・ライターを担当していた。それとG.L.O.W、REDNECK ZOMBIES、LOS TURKOS、SINDROME DE ESTOKOLMO、CANNIBALESといったバンドでもプレイしていたわ」

■君らのLPは最高のロックンロール・パンクだったよ。ロックンロールやパンクを色々と聴いているんだろうけど、素晴らしいオリジナリティもあるよね。曲を作る時にはどんなことを意識している?

「私たちはあらゆる音楽を愛している。古典的な音楽はパンクでもパンクじゃなくても好きじゃないわ。あらゆる最高のロックンロールを、私たちは強く信奉している。そして私たちはいつも、荒々しい、偽りのないロックンロールの真実に突き動かされているの!ええ、確かに私たちは異なった色々なバンドを聴いているわ。分かりやすいSTOOGESやMC5からFLYING BURRITO BROTHERS、TOWNES VAN ZANDT。NEW BOMB TURKSやB-MOVIE RATSからJESUS AND MARY CHAINにLEGIAO URBANA。LOS VIO



LADORESからCADAVERES。THE ROLLING STONESにGERMSにBAD BRAINS。NEIL YOUNGからNICK CAVEまでね!
曲を作る時は、普段はリハーサル・ルームにいるわ。Juanmiのギター・リフから始まって、Alejoが格好良いベース・パートを思いつくまで、Larryがドラムを叩き続ける。それから私が呟き始めるか、もしくは叫び出すわね!
それからちょっとずつ、どうにか具体的な形になっていく。そして全てがカチッと収まる魔法の瞬間が訪れ、突然、化学反応のように曲が出来上がるのよ!だから私たちは、それを感じるまでノンストップでひたすら演奏を繰り返す。お互いのパートをふざけながらほんの少しだけ修正して、シンプルなアレンジも加えて、曲が100%までMOSTROSになるまでね。そしてお腹の底から笑い合うの。あと、私には事前に、曲が出来る前に歌詞を用意しておくってことが無理なのよ。みんなが演奏していて、それが私の気分をのせてくれる。そしたらすぐに私は歌い出す。もしくは、何か思い浮かぶまで頭の中で曲を鳴らしているわね」

■君のヴォーカルはパワフルで格好良いね!好きなヴォーカリストはいる?



「ありがとう!クラストやスクリーモみたいなのでなければ、私は歌うのが本当に大好きなの。メロディーのあるヴォーカルは聴くのも楽しいしね!好きなヴォーカリストは沢山。多くはソウル・ミュージックだったりするかな。永遠のナンバー1は、Tina Turner。Ikeとの昔のがお気に入りね。あとはBELLRAYSのLisa Kekaulaも大好き。それにPJ Harveyも。男性のヴォーカルも色々と好きで、ちょっとそういったのを私のスタイルとミックスさせようとしているかな。Luca Prodanていうイタリア人男性は、SUMOっていう凄く面白いバンドを結成したの。彼がアルゼンチンに移った80年代にね。彼はパワフルでいてスウィートな素晴らしい声を持っているわ!BAD BRAINSみたいなノドも好きね。例えば、頭を揺らしながら叫んで、そこから愛らしいレゲエ/ダブのパートを違和感なく歌ってみたり…。もちろんDEAD KENNEDYSでの泣いているような甲高い声のJello Biafraも、古き良き時代を感じさせるJoey Ramoneのロックな声もね…。それにNeil Youngの震える繊細な声。Danzigも大好きよ!ソロも含めて、殆どが好きかな。色んなのが好きだし、それぞれ全然スタイルも違うわね。けど彼らのフィーリングって他にはないものよ」

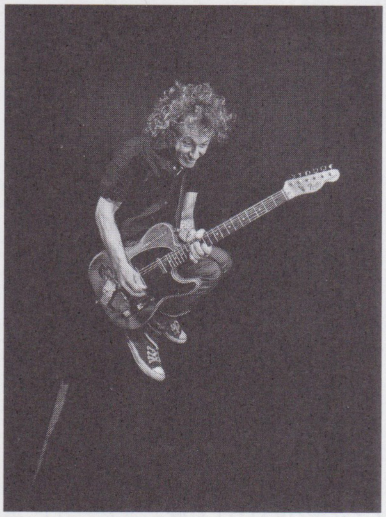
■ところでLPのタイトルの"en las fabulosas aventuras de vacillatio et revolvo"ってどういう意味なの?

「そう、"Vacillatio et Revolvo"は下品なラテン語で"Rock and Roll"。なんて素敵な言葉なのかしら?!私たちはラテン語の単語をいじくり回して、全然意味のない言葉にしてしまうの。それで、"今の何?"って言ったりしてね。私は単語(VacillatioとRevolvo)を2つのキャラクターにしてみて、そして彼らは2人のスーパー・ヒーローだって想像した。でも彼らはちょっと弱虫みたいだったの…。けど私たちは彼らが好きだった。それで、タイトルを訳すとこうなるわ。"the fabulous adventures of Rock and Roll"(※RockとRollを擬人化しているので、"ロックくんとロールくんの素晴らしい冒険"みたいな感じだと思う)。Vacillatioともう一人のRevolvoは、お互いにレコードの片面ずつを担っていて…、Revolvoのサイドはもっと"roll"で、Vacillatioのサイドはより"rock"でパンクなの」

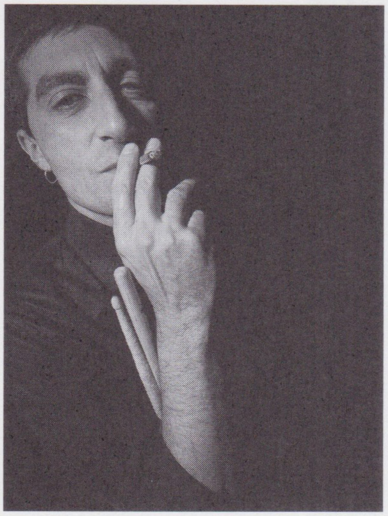
■"Puke On My Shoes"を歌っている男性ヴォーカルって誰なの?これだけかなりハードコアな曲だよね。

「それはギタリストのJuanmiよ。私がきちんとした歌のメロディーを思いつけなくて、なんだか気合いも入らなかったから、唯一その曲だけ歌いたくなかったの(でもコーラスはやったわよ)。Juanmiが歌うと荒々しくて良い感じだったわ。それで、みんなでこの曲は彼が歌うべきだって決めた。彼は物凄くハードコアを聴いているし、私たち全員もそうだけど、彼は特にね」

■歌詞についてなんだけど"Fourteen"の曲にある、"Karate Punk"ってどういう意味?あと、"Moho"って曲はカビのこと?



「それって個人的なジョークなのよ!"La Roca Karate Punks"って、バルセロナの近くにある小さな村、La Rocaのパンクスたちのことで、彼らは素晴らしいライヴ会場を持っていた。ヨーロッパをツアーするバンドはみんな、そのLa Nau de La Rocaに立ち寄ってプレイしていたのよ。今、彼らは別の会場を持っていてEstraperlo Club del Ritmeっていうんだけど、バルセロナのすぐ近くよ。ライヴをするには素晴らしいところ。それでこの曲、"Fourteen"は主に私たちが行った、初めてのスペイン・ショート・ツアーについて歌っているわ。メンバーの他に10人もついて来た。だから"Fourteen"なのよ(※メンバー4人+10人で14人)。La Rocaはいつも私たちがライヴをしていた場所の一つで、"Karate Punk"は私たちのファミリーみたいなものかな。"Moho"はそうよ、スペイン語でカビのこと。正解よ、勉強してきたわね!うまく私には言えないんだけど、…それをスペイン語で発音すると"moh-oh"みたいになるのよ。これはあらゆるところに侵入してくるカビの歌…。変に加工された食品を食べれば、それはあなたの体の中にまで広がる。だからこれは食べ物と関係したストレー



ト・エッジ・ソングなの」

■歌詞全体からはロックンロールな感覚を強く受けるね。

「ロックンロールな感覚って、私は好きな言葉だな!Juanmiにとってそれは真実ね。前にも言ったように、どんな音楽に私がインスパイアされるかってことよね。"Mahara Baby"はパンク・ロックな要素が強い楽曲だけど、必要なのは"ロックンロールが最高"っていう素質よ!」

■スペイン語じゃなくて英語で歌っているのはどうして?

「多少の例外もあるけど、ロックンロール・サウンドにはスペイン語より英語の方が適しているって私は気づいたの。オリジナルなことをやるにはって意味よ。また一方で、英語はファストなパンク・ロック・ソングを書く時にとても役立つということにも気がついた。英語には単音節の単語が膨大にある…。そして、ファストで短い曲、その短いセンテンスの中に沢山のアイデアを詰め込もうとする時、信じられないほど英語は有効ね!比較してみて。
"you once loved the mad girl"
(全て一音節の単語でしょ)
"alguna vez tú quisiste a la chica loca"
(スペイン語で同じことを言っているんだけど、…こんなに長くなるのよ。単純に言葉数の節約ね!)」

■LPの"Gracias list"(サンクス・リスト)にTOTALICKERSの名前があることに気がついたんだけど、ハードコアやクラスト・バンドとも一緒にライヴをやっているの?

「もちろん!私たちはパンク/ハードコア/クラスト・バンドの作品も大好きよ。私たちのサウンドはもっとロックンロールだけど、DIYの原則を通して確実に繋がっている。一緒にプレイするハードコアやクラスト・バンドの友達が沢山いるわ。TOTALICKERSでしょ、それにもちろん、COP DE FONA、ERANTZUN、AFGANISTAN YEYES、BAD TASTE、DESGUACE、ANTIPLAYAX、VERVAL DIARREA、BOMBENALARM、CRIMINAL DAMAGE、WARCRY、SEVERED HEAD OF STATE、INSOMNIO、CRIITS、NET WEIGHT、DISEASE、DERROTAとかね」





■完全にハンドメイドのアートワークも素晴らしかった。スクリーン・プリント、紙質、手書きの歌詞、どこにもデジタルなグラフィックはなかったね。どうしてこの方法をとったの?本当に素晴らしいよ。

「Kenjiありがとう!あなたが好きでいてくれて嬉しいわ。写真をコピーしてコラージュするのが大好きなのよ。私たちのウェブサイトで実際に見られるわ。
http://www.mostros.info/posters.html
私たちのショーのポスターが全て見られる。そしてコピー&コラージュ・スタイルでいかに多くのポスターが作られているか分かるでしょ!デジタル・グラフィックは人工的で冷たい感じがするから、私たちはやりたくないの。ジャケットの紙は100%再生紙。私たちは実際に、大きな新聞紙工場のコンテナの中で、物凄く大きくて古い紙の束の中に埋もれていたわよ。そして段ボールを再利用することにした。それから一つずつカットしていって、私たちが秘密裏に配合した塗料を手作業でスクリーン・プリントしていった。更にスリーヴの形になるよう接着していった…。その行程はここで、写真でチェック出来るわよ」
http://www.fotolog.com/mostros_/46838161
http://www.fotolog.com/mostros_/39471984

■FlyingPeluca Recordsは自主レーベル?どうしてレーベルも始めたのかな?リリース作品も紹介して。

「私たちは動き続けていたいからレーベルを始めたの。それにプロモーションやプロデュースにしろ、誰かに私たちを見つけてもらうまでジッと座って待っているタイプじゃないからね。あっちから声がかかるなんて私たちに起こるはずがないもの。1st CDはPunkaway Recordsから出して、嬉しかったし光栄だったわ。でも、今、私たちはその行程も含めてもっと自分たちでコントロールしたいのよ。流通や販売のやり方にしてもね。それから次の音源を出したくなって、「Feed the rockin' soul」CDがそれね。再びPunkawayや多くの小さなレーベルに協力してもらったんだけど、それが小さな自主レーベル、FlyingPeluca Recordsを立ち上げるための明白なステップになったわ。"FlyingPeluca"は"flying wig"を意味していて、何か良いことが起こるとカツラが飛んでっちゃうっていう、アルゼンチンだとよく使われる表現なの。例えば、英語でいうところの、"脳みそが吹っ飛ぶ"みたいな感じかな。FlyingPelucaは自分たちのレコードを出すために生まれたけど、友達のレコードも出している。今までのリリースはこんな感じね」

Mostros "Feed the rockin' soul" CD 2005 - SOLD OUT
Mostrocross
(7" split Mostros vs Motocross) 2008
Mostros "las fabulosas aventuras de Vacillatio et Revolvo" 12" 2008
(限定625枚。ジャケットはスクリーン・プリントで再生紙を使った手作りのスリーヴ)
Phogo "hora de buscar lucero" CD 2005
Night of the Covers Dead – Misfits tribute (参加バンド:Torazinas、Mostros、No Picky、Afganistan yeye's、La Crypta、Rock-a-Hulas、Baby Horror、他) 10" - SOLD OUT
Doctor Martin Clavo "el día en que salvamos la Tierra" CD
Cerebellum/Cerebros Exprimidos tribute
(マヨルカ島のバンドを収録) CD
新作!! Cop de Fona、Estafats I Traïts
(素晴らしいマヨルカ島のクラスト・ハードコア)7" 2010

■では、DIYという考え方についてはどう思っている?

「DIYって人それぞれによって違うわよね…。けど、それが物事をもっと面白くしてくれる。DIYなやり方や自分たちのツアーを自身で企画することによって、スペイン、アルゼンチン、ヨーロッパのバンドとの素晴らしいネットワークを見つけることが出来た。それがどんどん育っていくといいな。
色々と旅して廻った経験から、自宅やスクワットに泊めてくれたり、ちゃんとした料理でもてなしてくれたり、ショーを企画してくれるフレンドリーな人々と出会えた。それってお金では得られないことよね。異なる文化に暮らす人同士が繋がることの出来る経験ってね。ショーに出て欲しいと連絡をしてくれるのは、実際に私たちの音楽を愛してくれているからだと思うの。ずる賢いプロ

デューサーが、ラジオやインターネットかなんかで曲を流して、一儲けしようと(しかもバンドのポケットからお金を頂こうなんて)しているわけじゃないからね。(DIYは)とても正しいやり方ね」

■政治や社会問題についてはどうなのかな?そういったバンドではないと思うけど。

「私たちの歌詞は明らかにポリティカルじゃないわ。でも私たちは個々に強い関心を持っていて、様々な運動にも個人的に参加している。政治にもかなり関わっているわ(アルゼンチンからやって来てスペインで暮らしているけど、腐敗した政治家が人々から略奪しているという事実から目をそらすことは出来ない。それに個人の自由というのは、実に脆くてはかないものよ)。少しだけちょっぴり政治的な歌詞もあるけど、人々が反抗したり歌ったり踊ったりして生きている、その事実を祝福するために、私たちはパンク・ロックをプレイしているからね。目の前にいるあなたが音楽によって突き動かされたり踊ったりするのは、とても本能的、衝動的なことだし、楽しい瞬間よね。パワフルですらある」

■ところで、君たちはどんな子供だった?パンクやロックンロールとの最初の出会いはどうだったのかな?

「えーと、脚色した答えかもしれないけど、Larryは海沿いの町、マル・デル・プラタで彼の両親がかけていたタンゴやアルゼンチンの民族音楽を聴きながら幼少期を過ごしたのかな。彼の心に衝撃を与えた最初のバンドはTHE CLASHね。
Alejoはブエノスアイレスで育てられた。PARCHISやVILLAGE PEOPLEを聴きながら育って、それからカセット・テープを通してRAMONESにTHE CLASH、DEAD KENNEDYS、P.I.L.といったパンクを発見したわ。誰かに指摘されるまで、彼はそのテープが45回転で間違って録音されたものだと考えていたみたい。
Juanmiはパルマで生まれた。週末にはビーチに行って、お姉さんの持っていたイエイイエイ言ってばかりいるバンドのレコードを聴いて成長していった。パンク・ロック、RAMONESの、"It's alive"を発見するまでは一時期、ヘヴィ・メタルにはまっていたけどね。そしてCEREBROS EXPRIMIDOSを1984年のクリスマスに結成した。
私はブエノスアイレス生まれ。私の両親が沢山のタンゴを聴かせてくれたのを覚えているわ。だけど、私はQUEENのシングル"Another bites the dust"を買ってとせがんでいたかな。レコードが聴けるようになると、両親が隠し持っていたBEATLESとLITTLE RICHARDのアナログ盤を見つけたの。BEATLESの"Dizzy Miss Lizzy"を聴いた時は、本当にショックを受けたわ。詩の間で叫んでいるんだもの!私は7歳だったかな、衝撃的だったわ」

■じゃあ、今のお気に入りのバンドは?

Alejo「THE CUREとTHE CLASH」
Larry「THE CLASHだな」
Juanmi「ANNIHILATION TIME」
Macky「私は過去に生きているの。NEIL YOUNG、NEW BOMB TURKS、JESUS AND MARY CHAIN、THE ROLLING STONESかな」

■MOSTROSをやってて一番嬉しかった思い出と最悪の思い出は?

「最高だったのは、多分、あらゆるツアーがそうよ。一つを挙げるなら"fourteen"で、あとはMOTOCROSSと一緒に廻った2009年の初のヨーロッパ・ツアーかな。最悪?ライヴ会場でバーテンダーがビールや水も出してくれなかった時かしら」

■日本についてはどう?何か知っている?

「TEENGENERATEとGUITAR WOLF、それにTHEE MICHELLE GUN ELEPHANTが大好きよ。日本には素晴らしいハードコア/クラストのシーンがあることも知っているし、そこで新たな音楽が誕生していることもね。折り紙の文化も好きだな。私とJuanmiはお寿司とお弁当箱も好き。いつもお気に入りの本もあって、吉本ばななの"キッチン"、清少納言の"枕草子"も敬愛している。三島由紀夫と大江健三郎と石黒一雄(※日本生まれだが国籍はイギリスの作家)もね。日本のホラー映画も最高よ!Juanmiはグレコのギターを持ってて、それを誇りに思っているわ。日本のギターのファンなのよ」

■今後の抱負や予定はどんな感じ?

「そうね、明日から短いスペイン・ツアーに行くわ。イースターの祝日の4日間だけね。次のアルバムもレコーディングしたいと思っていて、それは多分、2010年の終わり頃になるかしら。2011年には大きなツアーも計画していて、ヨーロッパと、あと出来れば日本も行きたいな」

■最後に、日本の読者にメッセージを。どうもありがとう!

「親愛なる日本の読者へ。読んでくれてありがとう。私たちの音楽をみんながチェックしてくれたらいいな!新しい友達が出来ると嬉しいわ。ねぇ、みんな、MOSTROSのジャパン・ツアーって良いアイデアだと思わない?ちょっとしたツアーでもいいから、力を貸してくれない?Kenji、ありがとね。インタヴューは楽しかったわ。良い質問だったし、あなたのサポートに感謝するわ!!!どこかで会えたらいいな!パンクを貫いて!!サヨナラ!MOSTROS、killerpunkrockersより」

www.mostros.info
http://www.myspace.com/thisismostros





ALLIANCE

ALLIANCEの1st LP「RESONANT AGITATE」がHG Factよりリリースされ、あっという間にソールド・アウトとなった事実は、皆さんの記憶にも新しいと思います。
昨年ライヴハウスでメンバーのオサムさんに会った際、「今度出るのは凄いのが出来たよ」と聞いていただけに急いで購入し、期待しながら針を落としたわけだが…、こちらの期待値を軽く上回る、壮大且つ"大作"と呼ぶに相応しい素晴らしい作品だった。僕の周りで聴いた人も、「あれは凄い」と口を揃えている。こんなことは滅多にない。
音楽的なことはもちろん、こだわりまくったアートワークも含め、根掘り葉掘りガッツリ2時間以上、東京・高円寺で話しを聞いてきた。インタヴューに応じてくれたのは、トオルセン(ヴォーカル)、オサムさん(ギター)、ハジさん(ベース)の3人。
尚、「RESONANT AGITATE」はCD盤もリリースされる予定だ。 [PHOTO:松島　幹 http://mikimatsushima.com]

■とりあえず結成の話しから。

オサム(以下O)「えーとね、トオルセンと一緒にやろうと言ったのは2007年だね。2007年の結構頭の頃だったと思う」

■言い出しっぺは?

O「言い出しっぺは俺。その前にケンタロウと考えていたんだよね。カオルがいなくなって、これからどうすっかって。ASSAULTを続けるのもなんだしなって。"とりあえず新しいバンドを始めない?トオルセンで考えているんだけど、どう思う?"って。そしたら、"いいよ〜"って」
トオルセン(以下T)「気のない感じで?(笑)」
O「それで(トオルセンを)呑みに誘って、"ベースにはハジを誘おうかと思っているんだけど"って。トオルセンは"いいね、ハジと是非やりたい"って」

■じゃあ、それですぐにやろうと。

O「それからハジに話しを振って。ハジはどうだったっけ?久しぶりに(初台)WALLで会ったんだよね」
ハジ(以下H)「そうだったね」
O「それで(LIFEの)アベちゃんにも相談したんだよね。"オサムくんとなら合うよ"って言われて、それで連絡先とか教えてもらったりして」
H「その頃はASBESTOSもやっていたからね」
O「そうそう、同時進行で始めて。まだALLIANCEという名前もなくて。この名付けはハジだから」
H「(1stアルバムのタイトルの)"RESONANT AGITATE"もバンド名の候補だったんだけど、相談の結果、ALLIANCEに」

■ALLIANCEって"同盟"みたいな感じの意味ですよね。

H「そうですね、仲間とか、そんな意味合いでつけたんです。日本だとビジネス用語で使うことが多いようですけど、海外だと、デモ関係でも使う言葉だったり。そんなに意味深ではないですけどね」
O「同盟っていうと堅苦しいから、仲良くねっていう」
H「でも最近、バンド名はなんて読むんですか?って何人かに言われて」
O「読めないかな。"オーリアンセ"とか言われたことあるけど」

■(笑)。こういう音でいこう、というのはあったんですか?

O「SEDITIONとかね、それは共通した趣味があって、この3人はね。ケンちゃんは違ったけど。SEDITIONは近いのかね。まぁ、各々の経過があるしね」

■皆さん長いキャリアもありますし。

O「それでうまいこと、はまってきたからね」
T「個人個人のセンスで、スタジオで合わせたらこうなったと。そんなにSEDITIONっぽくもないと思うけど」
O「ベースも俺が、"ややこしくして"とか言ったわけじゃないから。どんどん勝手にブリブリのっけてくるから、面白かったね」
H「1曲につき(完成まで)半年くらいはかかっているような」
O「ライヴで演奏可能なのは8曲か9曲しかないよね」

■曲自体凝っているし、尺も長いですもんね。

O「ハードコア界隈の中じゃ長い方だよね」
H「4分とか5分とか」
T「それはオサムくん曲を一番作ってきてくれるから、最初はオサムくんの作る曲長いなって思った」
O「そう、作るとね、長くなっちゃうの。ちょっと色々やってみてえな、とか。そういうのを1曲の中に詰め込むんじゃなくて、(複数の)曲が合体して大きな流れが出来るような感じもいいなと思っているんだけど、今までのクセというか、1曲の中で起承転結を入れちゃうような傾向があって。そんなのがあってもいいんだけど、パターン化しているように思う時があるから、たまにはあっさりしたシンプルなのも作りたいけどね。曲を長くしようと思っているわけじゃないし。クリーン・トーンでアルペジオを弾いてみたりとか、そういうのもやりたいことの中の一つだから、そうすると4、5分に今のところはなっているね。CONFLICTの「The Ungovernable Force」みたいなさ、あれは1曲じゃないけど、繋がって繋がって、っていう曲が移り変わって凄いことになってるじゃん。ああいうのに触発されているかもしれない」
T「ドラマチックな感じ」

■アルバムも壮大な感じですよね。

O「ですよねって言われて、本人達がそうだねとは答えられないけど(笑)」



H「ジャケが、ですか?」

■全て含めて。7曲とは思えないほど濃密で。

T「そう言ってもらえると本当に嬉しいね」

■レコーディングは去年の4月から6月まで?

T「そう、飛び飛びで」

■いきなりLPってのは?

O「それは考えてた。(HG Factの)佐藤さんと話している時から、LPが作りたいって言ってたんだよね。LPっていうか、12インチの45回転を作りたいなって」

■あれ、今回は33回転ですよね?

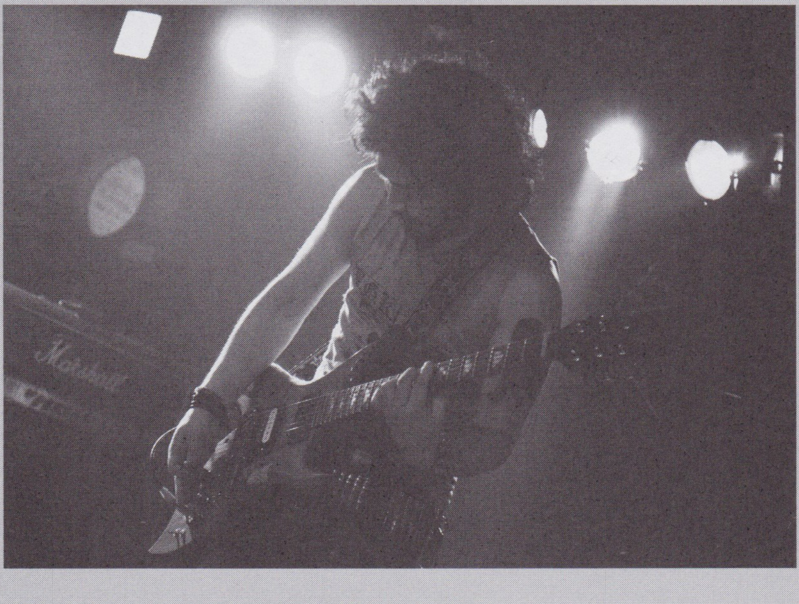
O「結果33回転になったんだけどね(笑)。プレス屋の関係で33回転になっちゃった。録っている時は、12インチの45回転のつもりだったんだけど。そのつもりで曲順も考えていたんだよね、片面15分以内で、とか。最初はアメリカ・プレスの予定だったんだけど、事情が変わってイギリス・プレスになって。そこが33回転じゃないとダメっつうか、その方が音が良い!て言ってきたもんで、そんならしょうがねぇやって」
H「それで重量盤の黒盤だけ、になって。売価も12インチの予定の値段だったんですけど、LPになったから高くなるのかと思ったんだけど、そのままの値段で佐藤さんがやってくれたんで」

■ジャケも三つ折りのポスタージャケで。

O「構想はあったんだけど、やり出したら本当に大変でもう。最初はPCで作業しようと思っていたんだよね。知り合いとかに頼んで。でもやっぱり第三者がやることで意思の疎通が難しかったのと、素材を集めるのがWEB上だけでは大変だったりで」

■図書館で本をコピーしたとか、言ってませんでしたっけ?

O「自分でやるしかないか、となって、近所の図書館をいっぱい廻って、本を片っ端から開いて、"これが良いな"と思ったらコピーして家に持ち帰って。更にコピーをとった中から拡大とか縮小とかして、素材を300枚くらい揃えたんだよね。それを家の襖の扉にA1の紙を縦に二枚貼って、その上に切り貼りしていく。って作業をしばらくやってて。やっとコラージュは出来上がったけど、今度は背景で煮詰まって」
T「最初は俺がなんとかするわって言ったんだけど、BLOOD、MONEY、OILをイメージでコラージュ考えてたんだけどまとまらなくて」
O「やるってなると難しいね。アーティストでもないわけだし、こういう作業も初めての試みだったから、終始試行錯誤でやってたね。出来上がったけど、今度はこれをどうすればいいのか分からないから、人に聞いて、





印刷屋に行ってスキャニングしたり」

■(オリジナルは)もっと大きかったんですよね?

O「ジャケの倍だよね。約60cm x 170cmとか。大きく作っちゃったから、持ち運ぶのも大変で。背景は真っ黒にしようかとも思ったけど、ここまで来たからなぁ、って絵の具でやってみたら雰囲気が出てきたから、それもスキャンしてデータにして。最終的には佐藤さんの家に行って、パソコンで(画像データを)合体させて、ロゴをのっけたりして。それでやっと出来た」

■タイトルは"資本主義の木"でしたか。

O「地面から下が、赤と黄色と茶色になっているんだけど、赤がBLOODで、黄色のところがMONEYで茶色がOILなんだけど、OIL(の文字)が沈んで、殆ど見えないんだよね」

■え、OILの文字はどこですか?(持ってきたジャケを広げる)

O「ここ」

■あ、本当だ!(ジャケの最下部にうっすら見える)

H「今わかった(笑)!」
O「血とお金と油を吸い上げる資本主義の木っていうことなんだよね、この作品は。だから枝葉のところにビルが建っていたり原子炉があったりという感じで。資本主義というか、消費社会というか、庶民が吸い上げられてばっかりじゃねぇかっていう」

■トオルセンも資本主義に対してどうこうはありますか?

T「そのへんは共通のメッセージかな、格差社会がこれ以上進むのは良いとは思えないし」
O「あんまり固くはなりたくないんだけどね、日々生活していれば納得いかねぇ話しは多いわけで。税金をいっぱい取られてみたり、しかも取ったお金でろくな事してないわけだし。資本主義の木ってつけているけど、別に共産主義者じゃないよ」
一同「(笑)」
O「昔、COLORED RICEMENが言ってたけど、原始共産制っていうか、国家じゃなくて村社会の助け合いの精神とか、そういうのは考えるけどね」

■このジャケの内側のデザインは?

T「これは友達の家で本を見ていて、これ良いなと、熊本県にある千金甲第１号墳だったかな」

■これ日本なんですか?!

T「古代のスピーカーだ!ってインスピレーションを得て。装飾古墳なんだけど」
O「古代のスピーカーっていうイメージも面白いしね」

■ケルティックなものかと思っていました。

T「古代の遺跡とか見るの好きですから。もちろんケルトも好きですけど。九州地方に遺跡が多いらしくて。昔の日本の、石の文化も想像すると素晴らしいね」

■盤のラベル面は、猿?

T「エスキモーの仮面だったかな。たしか仮面を被る人の特徴が掘り出されているらしい(笑)」

■(レコードについてきた)ステッカーは何のデザインですか?

O「これはね、買ってもらった人によーく見てもらうと分かるんだけど、ジャケットの一部なんだよね。この折れているあたり、ここ」

■あ、確かにありますね(ジャケの折り目の左側)。内袋が黒っていうのは?

O「佐藤さんと話しながら、"ここまでやるからには黒い袋がいい"って言ったら、"じゃあ分かった"と。そんなやり取りばっかりだったけどね、ああしたい、こうしたい、とか。コストとかあまり考えてなかったからね。お金は相当かかっているんだと思います。佐藤さんは本当協力的によくやってくれたから、この作品には満足しています」
H「HG Factだから作ってくれたと思うし。レコーディング、フライヤー、制作、ディストロも全部含めて、HG Factで良かったと思ってます」

■レコーディングはすんなりいきましたか?

T「録りは大体一発だったよね。あとは被せて。ちょこっと録り直したところもあったけど、部分的に」
H「スタジオを使ったトータルは45時間くらいなんですよ。1日、2日目は12時間ずつ使って録音して、あとは録りの残りと録り直し、SEやコーラスと、ミックスで12時間使っ



たんですけど。でも朝から晩までででグデングデンになっちゃったから、ちょっとずつやりましょうと。それで日数をあけて、ミックスのやり直しは2時間ずつ、4回くらい?」
O「ダブル・ベースとかあったじゃん。ダブル・ベースについて説明して下さい。ヴーンッ!ってやつ」
H「ベースを2本使って、1本目はラインで普通に録って、2本目は後で録ったのが3つある。ギターの感覚で、ベースが2本あってもいいかなと」
O「聴いてみたら分かったけど、ベースを2本入れると言っていたから何をやるつもりなんだろう、そんなの聞いたことねぇよって。でもハジは細かかったね〜。そして凄くよく聴いてて、間違ったところとか、トオルセンとか俺とかが全然気がつかなかったところまで。結果良かったね」
H「ベースは修正したいところが11カ所くらいあって、半分は演奏ミスで弾けていないとかで。それは弾き直したり、修正したんですけど、残りの半分はライヴ的な、微妙なところだったのでみんなに、"直したほうがいい?"と聞いて、そしたら"これでいいよ"と。それでそのまま入ってます」
O「大丈夫、大丈夫って」
H「CD盤がこれから出るんですけど、比べると違うと思うんですよ。音質的に」
O「ちょっとトータルでこもったんだよね、LPになって。一瞬、ん!?思ったけど、これはこれでレコードの良さが出てるから。CDだともっとソリッドな感じかな。ハジがいたから音の面は色々良かったよね。もっと俺らだったら簡単に終わらせていた」
T「ハジだけでなくオサムくんも細かいところまで、ちゃんと聴いてるから助かりましたよ」
H「一回のレコーディングで、普通は一つの音質なんですよ。最初に全パートのバランスを決めて、その設定のままミックスしがちなんですけど、今回は1曲ずつミックスしたので、全曲が微妙に各パートのバランスが違います。ドラムだと1曲目が大きめだったら、2曲目が抑えめだったり。あとフェードイン、アウトもやりました。アナログだと分かりにくいかもしれないですけど、CDだとその違いがよく分かると思います。聴き込んでもらえれば」
O「はたして誰が気づくんだろう」
一同「(笑)」
O「ハジとトオルセンがいい方向に持っていってくれたと思ってる。俺とケンタロウはASSAULTで、曲は俺が作ってきても、全然ASSAULTみたいな感じじゃないし、ハジとトオルセンの個性もあってALLIANCEとして別物が出来ているから。成功したなって」

■ヴォーカル録りは?

T「性格上あっさりと、俺は、まぁそんな感じで(笑)。2曲ぐらいは部分的に直したりしたけど」

■"大海"の最後に、なんか声が入ってますよね。

T「聴こえました(笑)。あれは、偶然に俺が発した言葉なんだけど、自分でなんて言ったか俺も覚えていない(笑)。聴きとれないよね」
O「誰も覚えていないんだよね」
T「面白いから入れちゃおっかって」

■何を言っているんだろうって、何回も聴いたんです(笑)。

H「ミックスをやっている時に、曲は終わっているんですけど、ジョゴジョゴって音が入っていたんですよ。"なんだこれ?"って再生してみたら、トオルセンの声で。これはどっかに入れようってなって、タイミングの良いところに。声のレベルも上げて(笑)」
O「あれを、なんて言っているんだろう?って、何回も聴いてくれた人には申し訳ないね(笑)」
T「そういう遊び心も入れたかったんだよね」

■歌詞はトオルセンが?

T「いやいや、オサムくん。殆どがオサムくんで、俺が少し」
O「半々くらいじゃないの?この曲は誰で、とかじゃなくて、どっかのワン・フレーズが俺だったり。それに付け足して広げて、トオルセンが仕上げてるっていう作り方」
T「いつかメンバーで言葉のコラージュで歌詞書きたいと思ってて、今回は偶然それができた」

■"ガラリア湖"って、キリストが奇跡を起こした場所のことですか?

T「いや、それは小説のタイトルなんだよね、ガラリア湖の豆。みんな飢えているのにキリストが食べた実をガラリア湖に捨てちゃって。その実を植えて実を育てれば、みんな飢えずにすんだのに、っていう。そういうキリストを皮肉った話しなんだけどそれから取った」

■"CRY EARTH"の出だしって、…"EARTH CRY"って言ってないですか?

T「(笑)。どっちがいいかなと思って、ライヴだと"CRY EARTH"。この時はまだ逆だった。感覚的な問題です、どっちが響きが良いかね」

■中ジャケにある手書きの歌詞は"HOPE TO LIVE(intro)"で歌ってますよね。なんでこの部分だけ手書きだったんですか?

T「ハジが英語の部分は歌っているんですけど、ハジが歌いやすいように(歌詞を)手直しして、その直した紙をそのまま使ったんです」
O「その日本語(訳)は携帯のホームページ(http://pksp.jp/alliance-axe/)の、"thought"ってところに載っけてます」
T「その日本語の部分はライヴで歌えるようにスタジオで練習中です。結構難しいんですよ歌詞が詰まっていて、歌詞が詰まってるからカッコイイんだけど。またここで引っ掛かった、とか(笑)」

■今度出るCD盤には、1曲追加されるんですよね?

H「12インチの予定で録ったじゃないですか。だから(CDに追加される曲は)収録予定じゃなかったんですけど、最初からアナログを作った後にCDを出すっていうのは決まっていたから、CD用として録っておこうと」

■どんな感じの曲ですか?

O「わりとスラッシーかな」
H「制作順で言うと2曲目」
O「最初の頃に作った曲だね」
T「"大海"の流れに近いかな」
O「その時期ごとに雰囲気があって、今作っている曲だと全く違っているんだけど、明るい感じで。色んなのをやってもハジとトオルセンがうまくやってくれるから、多分大丈夫。その辺は昔に比べて、やりやすくなっているんだよね」



H「ASSAULTが終わって、そのギタリストとドラムのバンドに加わるって感じだったんですけど、やり出してみると自分が持っていたイメージとはオサムくんもトオルセンも違って。頭で考えて1曲の最終的な出来上がりをイメージするわけじゃなくて、来るもの拒まず、自分のベースのフレーズもいくつかやってみたり。こういう曲をやろう、とかは考えていなくて。全体で合わせてみて、出来上がったのがこういう音、ALLIANCEの音で」
T「全体で合わせて、練習を重ねていくと、どんどん変わっていきますからね。アレンジアレンジで。結果オーライというか」
O「3人の組み合わせはいいと思うんだよね。ああしてこうして、じゃなくて各々のアイデアで仕上がってるから。バランスはいいと思います」

■あ、すみません、(OVERTHROWの)モーリーから電話がかかってきました(笑)。

T「無視無視(笑)」
O「ただ、ドラムが安定してなくて。ケンちゃんが辞めたあと、ユウキさん(ex COLORED RICEMEN/現PIGMEN)にヘルプを頼んで、それから去年末に正式メンバーになったんだけど、音の志向が違ったってことで今はまたヘルプになって、ゆくゆくは辞めていくような感じになっている。だからドラマーをなんとかしないといけなくて。それがずっとつっかえているというか。レコードも出したし、今がやり時なんだろうけど、こういう状態だから。最近いくつか断ったライヴもあって、ちょっと申し訳ないです。もどかしい思いもあるけど。ムズいね、バンドは」
T「だから今回のインタヴューにドラム募集中って載せてもらうかも」

■ALLIANCEを通して最も伝えたいこととかは?

O「楽曲と歌詞とそれぞれに、目指しているのは当然オリジナリティなんだけど。"こんなの聴いたことがない"というのをやりたい。色んなものを聴いてきた中で、"こんなのがあったらいいなぁ"をやっているだけというか。簡単に言っちゃえばね。伝えたいことは、矛盾する世の中とか、活動家とかみたいに捉えて欲しくはないけど、社会に反発したいし、疑問も矛盾も感じるし。色んな不満がわんさかあるわけで、それに対して、思っていることは言い続けたいよね」

■以前に、マグロの話しをしてましたよね。

O「外国人の牛肉喰いすぎみたいな感じで、日本人はマグロ喰いすぎでしょ、っていう」
T「大西洋、地中海(で獲れるマグロ)のシェア、日本が8割(笑)。獲りすぎだろって」
O「煽動するメディアも悪いし、それに乗っかる奴も、もうちょっと考えてよって感じだけど。マグロに限らず、何でも、ほどほどにね。あんなの儲かるからやっているわけじゃん。利潤追求の世の中がさ、人との素朴な関係を壊しているから。損得で生きるような人がゴマンといるわけだし。最初に言った原始共産制じゃないけど、助け合って、うまいことバランスをとって生きていきたいけど。こんだけ巨大化した社会の中じゃそんなことも言ってらんない部分もあるけどさ。なんだかね、全部が全部競争して、お金のあるなしで淘汰されて、そんなのばっかりだと虚しいから。人の良心みたいなさ、そういうのには訴えたいけどね」

■そういう意味も含めて、共鳴・煽動("RESONANT AGITATE")?

O「共鳴して、煽動。そんな偉そうなことも言えないけど。日々楽しく過ごしたいだけなんだけどね(笑)」

■ちなみにオサムさんがPAINTBOXに加入されて、お2人はどうでしたか?

T「それがオサムくんにとって良い経験になるなら、いいじゃんやりなよって」
H「パートは違うけど、もし自分が誘われてやりたかったら、やると思うし」
O「大きな挑戦だったね、こんなチャレンジはもうないかも。やりがいがありすぎたけど、やって良かったよ。(PAINTBOXのギター)フレーズがちょっと俺の中に染み入ってきて、ALLIANCEに、あんなチュラララッてギターが入っちゃ、これはこれで困ったなと(笑)。前まで弾けなかったのが、弾けるようになって。弾けるとやりたくなるもんだから」
T「人との繋がりも広がったしね」
H「半年以上前から聞いていた事だったから、うちらは少しだけ休みって感じで」
O「間があると良くないんだよね。ツアーで1、2週間ずっとやっていると、確実にバンドのレベルは上がるからね」
T「わりと難しい感じだもんね、やっていることが」

■さっきも出ましたが、これまでのハードコアにないものっていうのは強く意識していますか?進化させようと。

O「それは意識している、昔から変わらないですね。なんかねぇかな、って考えることがあって、そういう気持ちでいつも作っている」
T「俺なんかは意識していないんだよね。結果として出たものが、俺がやってきたものとは違うから、それを受け入れるようにしている。けど、求めているわけじゃないけど。出来たものがよければいいと思う」
O「みんなが俺と一緒だとややこしいことになるから、それぞれがそれぞれの想いでやってくれれば」
T「やりすぎると奇をてらう感じになっちゃうしね」

■あんまり"新しいものを"って、それだけだと、多分、ハードコアじゃなくなりますもんね。

O「そうね、自分の根っこは変わらないから。80年代のハードコアとかスラッシュとか、それを上回るものがないから。一番最初に雷が落ちたもの以上ってないからね。それをベースに作っている」
H「感覚的にはアナログなんだよね。自分たちの中では、新しいものを求めているけど、感覚的にはアナログの世界の延長に、もっともっと可能性がいっぱいあると。うまく言えないですけど、ライヴハウスでやっているバンドは、自分たちも含めてそのアナログ感覚があるというか」

■ちなみに最近はどんなの聴いてますか?

O「目新しいのは聴いてないね、レコード屋とか行ってないしね」
一同「(笑)」
O「最近聴いたものってなんだっけな。2006年くらいのKILLING JOKEとかは聴いてたり」
H「あれは凄いね、再結成後のKILLING JOKEは。DISCHARGEみたいな衝撃が。タイトルが長くて思い出せないけど」
O「あとは、トオルセンに借りたNO SECURITYとか」

■スウェーデンの?

O「そう、俺は実は知らなかったんだけど、格好良かったです。でも、結局昔のなんだけどね(笑)」
H「俺はなんでも聴きますよ、最近はEL BANDAとGUNSLINGER、TRAGEDY、DISFEAR、DOOMRIDERS、MIDNIGHT、CIVIL DISSID ENT、JOYCE MCRINNEY EXPERIENCEとか。そういえば、うちらの音はどこにも入らないのかな、と。日本のハードコアになるのかな」

■ハードコアの中のサブジャンルじゃなくて。

H「うちらってクラストでもないし」
T「若い頃はこだわってたけど、そういうことはどうでもよくなるよね」
H「出来上がったのが、自分たちの音っていうのが理想ですが。昔ほど好きなバンドのこととか意識していなくて。自分たちの可能性を大事にしたい。そういう自由さに重点を置きたいですね」

■ALLIANCEを聴いたことない人に、"どんな音ですか?"って聞かれたらなんて言います?

O「そうなるとバンド名を出すしかないよね。俺ならSACRILEGEとかANTI SECTとかAMEBIXとか。でも、曲の端々に影響を受けた片鱗はあるけど、そういう音でもないし」
T「分かりやすく言うなら、SACRILEGEとかSEDITIONとか言っちゃうかもしれないね、でも聞かれたことないよな(笑)」
H「UKとか北欧のサウンドが好きなのはあるよね。アメリカとかよりも、あっちの湿った音とか」

■しかし今回のアルバム、あっという間になくなりましたね。

T「予想外だね、嬉しい限り」

O「ここまでとは思っていなかったからね。驚いている。マジで?スゲーなーって」
H「ライヴの物販で売る用にはちょっと残してありますので。あと今、バッヂをBASEとBOYで5種類売っていただいてるんですけど、また違うデザインをFUUDOBRAINで作ります。Tシャツ、ステッカーも、ライヴの時に販売してます」
O「手売り分はなくなるかなぁ」
H「でもレア盤になるのはイヤで。あんまり高くなるのは好きじゃない。それは狙っていないと書いて下さい(笑)」
O「予想外の展開なんですよ、今回は」
H「音源を聴いてもらってから、ライヴに来た方が楽しいだろうし。もう、20回くらいライヴはやったよね。初ライヴはD.S.B.が誘ってくれました」

■では、今後のライヴ予定は?

O「5月15日にWALLでGRIND SHAFT企画、バンドはSEASICKって海外のバンドに、札幌のREALIZEDとか色々ね。7月2日は四日市でACROSTIX、CONTRAST ATTITUDE、FRAMTID。3日が名古屋でREALITY CRISIS、悪意、ORIGIN OF [M]、九狼吽。10日が大阪でFEROCIOUS X、LIFE、NERVSとかも入ってたと思うんだけど、…かなぁ。話しは来てても、ドラマーの事情で返事をまだしていなかったりだね」

■どんな人が理想ですか?

O「それも難しいよね。こういう奴じゃねぇと、というのもないし。個性があって、あんまりお酒を呑んで暴れたりしない人かね」
一同「(笑)」
H「アドリブがきいたり、あとはフレンドリーな人なら。実際のところは感覚が合えば。うちらはみんな変なので。…自分も変らしいので」
一同「(笑)」
O「"変じゃないよー"とか言うんだよ(笑)。変な人は自分を変だと思わないからね」
H「ベースのフレーズを考えながら、一生懸命生きているんだけど(笑)」

■(笑)。…みなさん、キャラは立ってますよね。

O「この年までやっているんだからね、多少、アンバランスだよね。しょうがないっしょ。どこかが特化してくるんですよ。人格者にはなれない。なるべくいい人でいたいけど(笑)」

■最後に、これは言っておきたかったとかあれば。

O「一言二言じゃ言いきれないけど、これまでの話しで伝わるかな。あ、HOPE TO LIVEだね。希望は持ちたいから。暗い曲もあるし、悲観的な言葉もあるけど、結果ポジティヴに生きたいなと思うけどね」
T「痛みを感じても、ポジティヴに。ただポジティヴじゃ馬鹿だから」

■ハジさんは大丈夫ですか?

H「あー、…HOPE TO LIVEですね」
O「なんでそこで無口なんだよ(笑)」
H「自由に平和に楽しく。現実は違うけど、それは分かっているけど、そういう気持ちを持ちつつ」
O「そういう人が増えるといいな」
H「正しいものって形があるようでないようなものですよね。自由に、みんなの創造性がバンドの音に現れればいいのかなって思います。仕事をしてても思うんだけど、決まり事とか、"これは本当は正しくないんじゃないか"と思うこともある。だから、個人の意見が通らない、というのは、バンドには持ってきたくないなと。みんなでフレキシブルに、積み木を重ねるように。ここは〜?って疑問が出た時は、"どういう風にする?"って聞く姿勢、聞くことが大事じゃないかな」
O「たいていのルールなんて、都合よくまとめようとしているだけだからね、理に適っているものは別にある」





フレンチ・スカンジD-Beat!!どういう経緯で、"フランス=オシャレ"という図式が日本人の頭の中に刷り込まれたのか?というのは置いといて、フランスのハードコア・パンク・バンド、GASMASK TERRÖRへのインタヴューです。
曲展開にSKITKIDSとの共通項や、そのリフにジャパニーズ・ハードコア的な要素も感じられて、スタイルこそオーソドックスですが、ひと味違うセンスを放っているバンドだと思います。そして八代亜紀とKRIEGSHÖGが好き、というセンスも最高です。あまり取り上げられることのない、フランスのシーン事情も含め色々と聞いてみました!

■まず、GASMASK TERRÖRはいつ、どうやって始まったのか教えて下さい。

Fabro「やぁKenji、(日本語で)元気?GASMASK TERRÖRは2003年の9月にスタートしたんだ。俺たちの目標は、昔の素晴らしいスカンジナビアのバンドや、DISCHARGE、TOTÄLITARみたいなD-Beatハードコアをプレイすることだったよ」

Luc「Fabro(ベース)と俺(ドラム)で2003年の後半にバンドを始めた。その頃はTOTÄLITARに滅茶苦茶ハマっていてね、スウェディッシュ・ハードコアみたいなのをプレイしたかったんだ。ShiranがDISCHARGEを大好きなのは知っていたから、彼にリフを弾いてくれと頼んだ。Olivier(ヴォーカル)が加わったのは、彼がボルドーに引っ越してきてすぐだったな。Michellはセカンド・ギターとして2008年に入ったよ」

■GASMASK TERRÖR以前にも、バンドをやっていましたか?音楽的な経歴も詳しく教えて下さい。

Olivier「こんにちは、Kenji!GASMASK TERRÖRの前にも沢山のバンドに関わってきたよ。けど殆どが全然知られていないバンドだね。少しだけ名前を挙げるなら、HOLY FUCKIN' SHIT!、POLICE CHARGED、INDIGESTION COLLECTIVEかな。これらのバンドはもう終わったもので過去でしかないから、今の話しをしよう。現在関わっているバンドはCHAMBRE FROIDE、PROCESSION FUNEBRE、それにRAVENSDÖMといったブラック・メタル・バンド。それとWARNING/WARNING(ジャパニーズ・ノイズ・パンク)にKALTELÜST(ポスト・パンク/コールド・ウェイヴ)もやっているよ。ShiranとMichellも多少は知られているバンド、GEORGE BITCH JR、MONARCH、RAINBOW OF DEATH、YEAR OF NO LIGHT、それにBERRI BELTZAKといったバンドで長い歴史があるね」

Luc「俺は音楽をプレイし始めたのが凄く遅くてね、25歳くらいの時だったかな。初めてのバンドはFACE UP TO IT!(ファスト・ハードコア)と、DAYMARE(メロディック・アナーコ/クラスト)だったね。OlivierやFabroと一緒にPOLICE CHARGEDもやっていたよ。FACE UP TO IT!は10年以上まだ続いている。時々、初期USハードコアのカヴァー・バンドでもプレイしているんだ」

Fabro「以前のことだと、DAYMAREをLucと一緒にやってて、あとはHOLY FUCKIN' SHIT!とPOLICE CHARGEDだね。今はGASMASK TERRÖRとWARNING/WARNINGだけやっているよ」

■パンク/ハードコアとの最初の出会いは、フランスのバンドでしたか?それともDISCHARGEみたいなUKハードコア?

Olivier「荒れ狂った反抗的な音楽との最初の遭遇は、NAPALM DEATHだったよ。14歳の時だね。有名なフランスのパンク・バンドは既に聴いていたけど、それらがろくでもないことはすぐに分かったよ(今でもそう思っている)」

Fabro「SICK OF IT ALLのライヴCDがパンク/ハードコアとの最初の出会いだったね。そう、若かった時はメタリックなNYハードコアに夢中でさ、フランスの音楽は全て拒絶していた。フランスのテレビやラジオで流れる音楽の80パーセントはフランスのものでさ、その反動としてフランスの音楽はパンクも含めて大嫌いになったんだ。時が経つにつれ、今ではその良さというのも感じてはいるけどね」

Luc「俺はバンドの中では最年長で、1986年頃にパンクとメタルにハマっていった。多くの人たちと同様、最初はメイン・ストリームのパンク・バンド、THE CLASHやSEX PISTOLSだったね。でももっと"興味深い"UKパンク・シーン(GBHにCHAOS UK、最初の「Punk & Disorderly」コンピ、CRASSとか)を見つけ出すのに時間はそうかからなかった。俺が育ったところだと、ESKORBUTOやKORTATUといったバスク/スパニッシュ・パンクはとても人気があったんだよ。最も人気がある重要なフランスのパンク・バンド、

BERURIER NOIR(初期のレコードだけだね)と同じくらいにね。SLAYER、EXODUS、METALLICA、CELTIC FROSTといったメタルにも夢中になってて、アンダーグラウンドなカセット・テープのトレーディング・シーンを通じて、REPULSION、MASTER、NAPALM DEATH、NIHILIST、DEATHなんかも知るようになったんだ」

■主に英語で歌っているのはどうしてですか?フランス語で歌うのは難しいから?

Olivier「音楽により合っているから、GASMASK TERRÖRでは英語で歌っているんだ。センテンスが短いし、直接的だしね。他のバンドではフランス語で歌ったことがあるから、フランス語でも問題はないけど、GASMASK TERRÖRだと英語だね。次のLPでは2曲ほどフランス語で歌うつもりだよ。いつも歌詞を書く時は最初は英語なんだけど、時々それをフランス語に訳そうとしている。もしそれで良い感じなら、フランス語で歌うのも問題ないからね」

■たまに他の言語も使って歌っていますよね。凄く興味深いです!日本語訳による歌詞もつけていたので、驚かされました。

Olivier「様々な国のハードコア/パンクへのトリビュートとして、異なった言語で歌っているんだ。世界中のあらゆるバンドに夢中だからさ、俺たち全員ね。たまにハードコア/パンクはアメリカの一部に限られたものだと思われることもあるけど、それっておかしいしね。歌詞はスペイン語やドイツ語と同じように、日本語にも訳したよ。 俺たちの言っていることを多くの人に理解してもらうためにね。俺が歌っていることに君は賛同しないかもしれないけど、少なくとも相互理解への試みではあるよね」

■スウェディッシュD-Beatからの大きな影響はあるだろうけど、日本のハードコアとかからの影響も感じます。日本のハードコアは好きですか?

Olivier「G.I.S.M.とDISCLOSEは、GASMASK TERRÖRのメンバー全員が共通して好きな数少ないバンドだね」

Fabro「意図してはいないけど、俺たちが君の国のハードコア・パンクを大好きだから(この点に関してOlivierだけは違うけどね)、日本のハードコアの影響を君が感じたってのも道理だと思う。俺とLucは日本のハードコア・パンクに最も熱中しているからさ。演歌みたいな日本の音楽も楽しんでいるよ。梶芽衣子に八代亜紀とかさ。あとJポップだとGO!GO!7188にピンク・レディー、aikoだね」

Luc「昔のから今のまで、メチャクチャ日本のハードコアのファンだよ。GASMASK TERRÖRは何年もGAUZE、DISCLOSE、BASTARDのカヴァーをライヴでやっているんだ!俺が初めて聴いた日本のレコードはS.O.B.の1st 7"EPで1987年だった。その時は衝撃的だったな。SEPTIC DEATHやSIEGEみたいに聴こえたけど、もっと速かった!それから"P.E.A.C.E."でG.I.S.M.を聴いたし、THE EXECUTEは"Anglican Scrape Attic"ソノシート・コンピで聴いてさ。フランスのレーベル、Jungle Hopからリリースされた"Attack"っていう4バンドのサンプラー7"でDEADLESS MUSSやSO WHATを知ったり。そういったのが、80年代後半における日本のハードコアとの最初の遭遇だった。俺のお気に入りのバンドは、LIP CREAM、GAUZE、G.I.S.M.、THE COMES、G-ZET、THE EXECUTE、THE CLAY、ANTI-SEPTIC、THE SEXUAL、CONFUSE、NIGHTMARE、POISON、BASTARD、WARHEAD、DEATH SIDE、JUDGEMENT、PAINTBOX、CRUDE、ROCKY & THE SWEDEN、もっともっとあるけどね。それにDISCLOSEの大ファンでもある。日本のクラスト・バンドも大好きで、CROW、S.D.S.、FRAMTID、GLOOM、HAKUCHIとかね。去年の夏、初めて日本に行ったんだ。そして素晴らしいバンドのライヴを見たよ。PAINTBOX、NIGHTMARE、悪意、BLOW BACK、ORGANISMとかね。素晴らしいレコード屋さんも訪れて、愛すべきパンクスとも出会った。出来るだけ早くまた行きたいな。 そしてGASMASK TERRÖRのショート・ツアーも近々出来ればと思っているよ」

■曲を作る時に最も重視していることは何ですか?

Olivier「2つあるね。リフとD-Beat。それ以外は重要じゃないぜ」

■新しいLPをリリースしますよね。どんな作品になりそうですか?

Luc「"Black Sun/Fake Gold"っていう11曲入りの新しいLPをレコーディングしたよ。もうすぐSolar Funeral(USA)とI Feel Good(France)からリリースされるだろうね。今作もファストでロウ、激しいリフとD-Beatによるドライビング・ハードコア・パンクに、



Photo by David Pujol

Photo by David Pujol



ちょっとブラック・メタルっぽいヴォーカルもあるかな、多分ね。ディスコグラフィーCDもマレーシアのCactus Recordsから計画中だよ」

■フランスの最近のシーンはどうですか？すみません、僕は全然フランスのバンドは知らないのですが、LA FRACTIONは好きです。フランスのオーディエンスと他国では違いがありますか？

Olivier「フランスのシーンは小さいけど、良いと思うよ。限られてはいるけど、献身的な奴らと一緒にやっている。"みんながみんなを知っている"シーンみたいなものでね、言っていることが伝わるかな。他のヨーロッパの国と比べると、フランスにはステレオタイプなシーンは少ないね。そんなにサブジャンル(クラストとかエモとかね)で分かれてもいないし。例えば、GASMASK TERRÖRは時折エモやグラインド、オールドスクール・ハードコアのバンドともやるしね。DIYの精神がここにある限り、誰が音楽の種類なんてのを気にするんだい？総合的なフランスのバンドのレポートは伝えられないけど、君がチェックすべきバンドの名前を少しだけ挙げておこう。ABJECT OBJECT、LEXOMYL、PASSION ARMÉE、MONARCH、RAINBOW OF DEATH、STATE POISON、12XU、HELLO SUNSHINE、KISS THE BOTTLE、DESECRATOR、STRONG AS TEN、THE AUSTRASIAN GOAT、MICHEL PLATINIUM」

■フランスにも、大きなスクワット・カルチャーはあるのですか？どんなところでライヴをしていますか？

Olivier「うん、フランスには沢山のスクワットがあるよ。ドイツやオランダよりは少ないけどね。それでも十分多いね。俺たちは普段、スクワットかバーかアナーキスト・センターでプレイしてて、用心棒がいて高い飲み物を出すような大きいロック・クラブでやるのは避けているね」

■現在のお気に入りのバンドを教えて下さい。

Olivier「DEATH IN JUNE、DARKTHRONE、MONARCH」

Fabro「LEBENDEN TOTEN、KRIEGSHÖG、悪意、THE BUDOS BAND、ZOMBI、PADLOCK、DRÖMDEAD、LEXOMYL、PERDITION」

Luc「最近は色々と聴いているね。HERÄTYS、BATTLE RUINS、STENGTE DØRER、FLIEHENDE STÜRME、MORNE、CROSS STITCHED EYES、RIKK AGNEW、THE SPITS、LEXOMYL、KNUSTE RUTER、WARCRY、SKITKIDS、MASSHYSTERI、DEZERTER、DESKONOCIDOS、DARKTHRONE、CHRISTIAN MISTRESS、LOUD PIPES。いつでも好きなのはDISCHARGEにBLACK SABBATH、AMEBIX。あと古いメタル(NWOBHMやSpeed/Thrash/Death…)も沢山聴いていて、他の音楽ジャンルだと13TH FLOOR ELEVATORSにTHIN LIZZY、初期のSWANSにHAWKWIND、G-ANX」

■どうしてリリース作品を自分たちのウェブサイト上で、無料ダウンロードで配布しているのですか？レコードを作るのには結構なお金もかかるでしょうし。どうして無料で？

Olivier「俺たちのレコードの大部分はもう完売しているから、レコードのジャケット画像と一緒に高音質のMP3を提供するのは良いことだと思っているよ。俺たちはこれで金を儲けようとはしていないし、俺たちの出した費用とレーベルが出した費用は補われているから、金銭的な障害なく、俺たちの音楽とアイデアを沢山の人々に触れてもらうための論理的方法さ」

Fabro「レコードが完売していないとしても、P2Pやブログを通じて共有するのには賛成だよ。パンクやアンダーグラウンドな音楽はずっと、テープをダビングして交換するってのが一つの慣例だったよね。MP3も速くて容易になったってのを除けば同じことだよ。人々がレコードをダウンロードしたから、彼らがそれを買わなくなるっていう考えも俺にはないし。シンプルじゃないのさ。大体において、人々がレコードを買わないのは、十分なお金がないからなんだよ。余裕のある人だけが俺たちの音楽を聴けるっていうの







Photos by Chris Agitate

I don't give a fuck to "promote" my band

We ain't no fucking car or dog food

はイヤなんだ。それに時には、本当に情熱的な人ならば色んな音楽をダウンロードしても、レコードも沢山買うだろうしね」

■(ウェブサイトにある)"PUNK NIQUE MYSPACE"ってどういう意味ですか?"パンクスはMyspaceをボイコットすべきだ"という意味かと考えましたが。ポーランドのTRUJACA FALAにインタヴューした時、彼はこう言いました(Vol.4参照)。
"時には違う方法もあるっていうのに、一体全体どうして俺たちが大企業の奴らをサポートしないといけないんだ?Myspaceの代わりにバンドやレーベルがウェブサイトを作るのは難しくないだろ"
あなたはどう思いますか?

Olivier「TRUJACA FALAは最高な奴だな(笑)。俺は彼の姿勢を100%支持するよ。Myspaceはバンドを"売り込む"ための、強制的な方法に今やなろうとしている。自分たちのバンドを"売り込む"なんて俺には関係ない、俺たちはクソみたいな車やドッグ・フードじゃないんだぜ。俺たちはパンクスであって、可愛らしく演奏したりもしない。流行かぶれのヴァーチャルな1000人のお友達がなんだっていうんだ。架空のお友達が沢山いるよりも、少しであっても本当の友人がいた方がいい。大企業のサポートに関しても、俺たちがあいつらの道具を使うことを避けるということは、俺たちがあいつらの道具になっちまうのを、防ぐことにもなる」

Fabro「"PUNK NIQUE MYSPACE"は基本的に、"PUNK FUCKS MYSPACE"を意味している。俺もTRUJACA FALAには賛成する。バンドがレイジーでウェブサイトを作るのが困難で、俺みたいにコンピューターが本当に苦手なら、友達に作ってもらうよう頼むことだって出来る。どれもこれも同じように見える不快なMyspaceよりずっといい。過激な歌詞を書いているアナーコ・パンク・バンドが、このゴミみたいなもんに最初に加わっていることが信じられないよ。みんなバカな女子高生になっちまったみたいだ。架空のお友達のクールなコレクションを求めて、狂ったようにピカピカ光っている大量の広告バナーと一緒に、いかにその架空のお友達が素敵かコメントを投稿する。サタニックなブラック・メタル・バンドですら女子高生みたいになっちまった!なんてジョークだよ!」

■今月(3月)にツアーに行きましたよね。どうでしたか?

Fabro「良い友達であるLEXOMYL(80'sメロディック・フレンチ・パンク)との短いツアーをちょうど終えたところだよ。ドイツ、チェコ、ポーランドとね。凄く楽しかったけど、毎日ずっと長距離をドライヴしていたから本当に疲れたね」

Luc「かなりへとへとに疲れ果てたけど、素晴らしい時間を過ごしたよ。素晴らしいショーがあり、いくつかはダメだったけど、いつものことだね…。新しい場所に行ったり、新しい友人や古くからの友人に会って、新しいバンドを見たりする、そうして旅して廻るのはいつも興奮するよ」

■今後の予定はどうですか?

Fabro「今度出る12"のミックスとマスターは終わったから、今のところ他に予定はないんだよね。2010年の後半か2011年には多分、日本ツアーをやるよ」

■日本の読者にメッセージをお願いします。どうもありがとうございました!

Olivier「質問をありがとう!君のジンはかなりクールだね。日本に行った時に会えたらいいな。またね!DIY ist krieg(※ドイツ語で、"DIYとは戦争だ")。Satanic hails」

Fabro「(日本語で)インタビューありがとうございました。多分日本に会う」

Luc「Kenji、ありがとう。君の支持と献身に感謝するよ。Keep distorting Japan!」

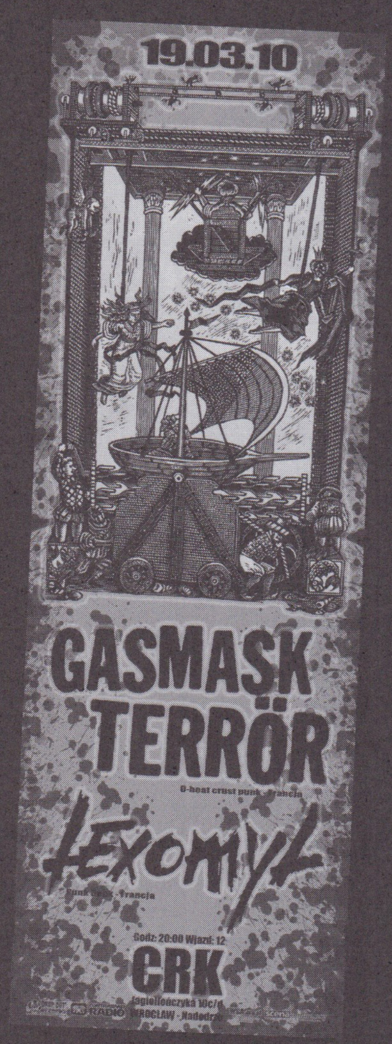




CONTACT INFO:

GASMASK TERRÖR
℅ Luc Ardilouze
B.P. 40011
33023 Bordeaux Cedex
France

Email:nightbrings@yahoo.com
Webpage:http://gasmaskterror.free.fr



D-TAKT o RÅPUNK

WARVICTIMS



フランスから本場スウェーデンに飛び、D-TAKT&RÅPUNKとWARVICTIMSのSylen(またの名をJocke、もしくはFisen。本文中に出てくるJockeは同名異人。あぁ、紛らわしい…)にインタヴューを試みてみました。
最近ではKROSSAのシングルを出して話題になりましたが、D-Beat〜クラストを中心に精力的なリリースを続けているレーベル、D-TAKT&RÅPUNK。そして一時期のBESTHÖVENを彷彿とさせる程に、音源を出しまくっているWARVICTIMS。果たしてこの背景には何があるのか?80年代、90年代と受け継がれてきたスウェディッシュ・ハードコアのドス黒い血脈を一身に担う男、その真相に迫る!

■まずD-TAKT&RÅPUNKを始めた時期と理由を教えて。最初にお手本にしたレーベルってあった？DISTORTION RECORDSとか?…嫌いだったらごめんね。

「今のようにリスペクトされるレーベルに成長するなんて期待も持たず、2006年の秋にスタートを切ったよ。同じ年のクリスマスの時期に、レーベル初の作品となる、WARVICTIMSの「When the innocent cry」をリリースした。レコードには「Skitliv! #3」ジンを無料でつけ、100枚限定だったんで、今じゃ探し出すのは非常に難しくなっちまったね。最初は俺とJockeの2人がD-TAKT&RÅPUNKを運営していくはずだったが、結局、俺1人でやっていくことになったよ。もともとはWARVICTIMSの初作品をリリースしてくれるレーベルを探そうとしたけど壁にぶちあたっちまって、自分たちで出すことに決めたのさ。リリースしたい、手を貸したいと思わせてくれる素晴らしいバンドとは、「Skitliv!」を通して連絡を取り合うようになった。インスパイアされたレーベルは、Jallo(TOTALITÄR、MEANWHILE)とFinnenが運営していたFINN RECORDS(スウェーデンの偉大なレーベル。今は存在しない)、それからDISTORTIONだね。DISTORTIONは尊敬すべき良い作品をたくさん出しているが、インチキくさい商売は嫌いだ。DIYパンク・レーベルを運営することは、利益を得ることも、シーンの人間たちを騙すこともしない良いバンドをサポートすることだからな」

■そう、「Skitliv!」ジンを発行していたよね。そのジンについて紹介してもらえる?なぜ「Skitliv!」は終わったの？

「「Skitliv!」は最初から悪ふざけみたいなもんだったよ。俺とJockeとで2005年から2009年にかけて、古臭いやり方の切り貼りでロウ・パンク・ジンを作ってきた。ベネフィットで食いつないでいく、イカれた2人のパンクス、"Challe"と"Fisen"ってキャラクターを作り出したぜ。酒とクスリに溺れて悲惨な日々を送っているキャラクターをでっちあげてね。90年代中期の「Sika Äpärä」ってスウェーデンのファンジンから強烈な影響を受けたな。「Skitliv!」は新しいレベルに下品なライフスタイルを持っていくような、馬鹿な意見と俗悪なジョークにまみれてい



たね。俺たちが「Skitliv!」で使っていた言葉は英語に訳すのはかなり難しかったよ。スラングを多用したし、典型的なスウェーデンの表現を使っていたからね。俺たちがインタヴューしたのはスウェーデンのバンドだけだった。だから母国語でジンを書くべきなのは明らかだったよ。スタートした当初から、10号出したらやめると公言していたから、そうしたのさ。俺は「Skitliv!」を楽しんでやってきたし、ジンを作るのも面白かった。だから時々寂しく思うよ。でも新しいものを作るにはまだ時間は十分じゃないな」

■君はWARVICTIMSでプレイしているよね。バンドのヒストリーについて聞かせて。WARVICTIMSは君とJocke/Challeが始めたの？

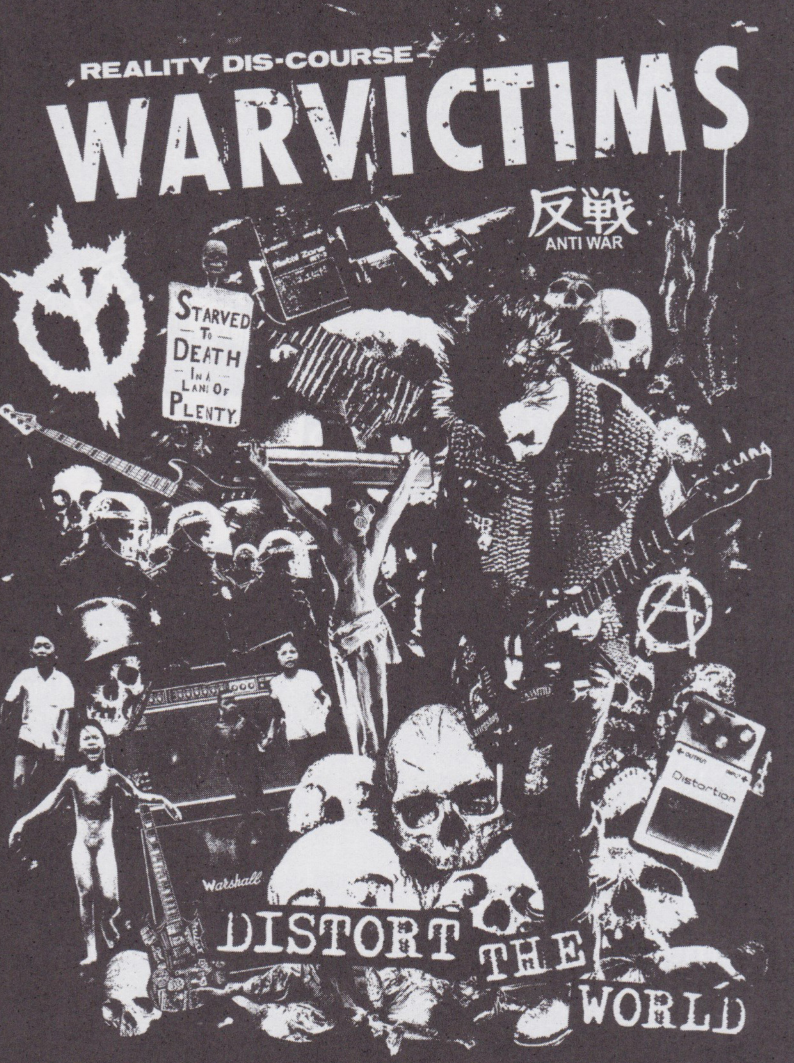
「2006年の夏に「Skitliv!」を出したんだが、"Challe"と"Fisen"がジンの中で、クラスト・バンドの"WARVICTIMS"をいつもいつも自慢しててさ。その後、WARVICTIMSについて質問してくるやつが、ちらほら出てくるようになった。音を聴いたやつもいないし、ライヴを見たやつもいない、レコードもデモも出ていない。それで俺たちはスタジオに入り、5曲録ってみたよ。それが「When the innocent cry」ってわけさ。基本的なアイデアは、スウェーデンの95年ごろのD-Beatクラストと、同じ時代を掘り起こすと出てくるアメリカやイギリスのクラスト・スタイルとを混ぜ合わせたものだった。単純で退屈なD-Beatクラストをやりたがるやつなんて、俺たちの住む街（エウテルスンド）にはいなかったから、メンバーはちょくちょく変わったよ。特にドラムはね。WARVICTIMSを作る前は、俺とJockeはあっちこっちへ行き、様々なバンドでプレイしたり、一緒にプロジェクトをやったりもしたな。いくつかあげると"OPPOSITION"や"HUMAN WASTE"とかね。WARVICTIMSの最初は俺とJockeの2人だけ、俺が全部の楽器を弾き、Jockeがヴォーカルだった。それから、時々だが、Arre"Chackas"（HUMAN WASTE）がヘルプでドラムを叩いてくれたね。2007年にPer"Fetebob"が加わり、フル・メンバーが揃ったよ。やつの最初のレコーディングは、FLYBLOWNとのスプリットで、これは最近の俺のお気に入りの1枚さ。今じゃ、始めたころより、もっと真剣にやってるぜ。ぜひMyspace（www.myspace.com/warvictims）で、今後の情報や写真、曲、それに完全なディスコグラフィーを見てくれよな」

■HUMAN WASTEもやってたよね。あと、TOTALT JÄVLA MÖRKERも。

「HUMAN WASTEを始めたころのことは思い出せないんだけど、98年あたりじゃなかったかな。何て言えばいいのか。俺たちはショーやツアーをやり、その年に７インチを何枚か出した。スカンジ・クラストにロックンロールD-Beatをぶち込んで、トラディショナルを受け継ぎつつ、突っ走り発達していったよ。メンバーそれぞれ別の街に住んでいたから、練習もショーも大変だったけどな。このバンドには8～14の未発表曲があって、デビュー12"を出す計画を立てていたんだ。でも実現しなかったけどさ。TOTALT JÄVLA MÖRKERはメタル、パンク、ハードコア、ブラックメタルの組み合わせをやってる。11年以上活動しているよ。前のヴォーカルが2006年にやめたときに、バンドから加入しないか誘われたんだ。それ以前、TOTALT JÄVLA MÖRKERのヨーロッパ・ツアーに、ヴォーカリストとして参加したこともあったし、他のショーやレコードでもゲスト・ヴォーカルをつとめたこともあったしね。1年前に４thアルバムをリリースしたよ。週末にはFredrik（別のヴォーカル）との最後のショーもやったばかりさ。今やTOTALT JÄVLA MÖRKERは新しい時代に突入した。もっとダークなね…」

■ところで、NEW NOISE RECORDSも運営しているんだっけ？

「この5年間はNEW NOISE RECORDSから何も出していないんだ。膨大なディストロもあるし、レーベルが勢力的だった8年間の間に29枚もレコードをリリースしてきたしね。ほとんどの作品は、HUMAN WASTE、A*TEEM、UNCLE CHARLES、DÖDSDÖMDのような地元のバンドだね。パンクはもちろんだが、ヒップホップやポップ、カントリー、ロックなんかのレコードも出しているよ。D-TAKT&RÅPUNKはNEW NOISE RECORDSの延長だと言えるな。でもD-TAKT&RÅPUNKのほうは主にD-Beatロウ・パンク・





バンドに焦点をあてているし、地元だけに限らずワールドワイドなバンドを出しているぜ」

■WARVICTIMSが短期間で大量にリリースしているから驚いているよ。D-TAKT&RÅPUNKも凄い作品をドンドン出してるね。

「いい質問だね。俺たちはただひたすら突っ走るパンクスさ(笑)。もし何か事を起こしたいなら、自分の人生をコントロールし、Do It Yourselfであることだね。自分を忙しくさせている大きな理由は、いつも何かやっているのが好きだからだな。何かやってないと落ち着かないし、退屈でたまらないぜ。ショーを企画したり、レコードを出したり、レコードのジャケットやフライヤーを作って、サポートしたり協力していると、満足感を感じるんだよな。この2年間はショーを企画していなくてもさ。たくさんの心配事を抱えることも、自分の考えを抑えないとならないこともあるが、常に新しいプロジェクトを立ち上げているぜ。俺はフルタイムの仕事もしているから、趣味と呼べるのかもしれないがね。仕事はサウンド・エンジニアをしている。WARVICTIMSの全作品を録ったスタジオだ。気を落ち着かせリラックスするときは読書にハイキング、それからスプレー缶でステンシル・ペインティングをやってるぜ」

■D-TAKT&RÅPUNKがバンドをリリースする上で、最も重要なことは?もちろん、主な作品はD-Beatロウ・パンクなのは分かっているけど。

「答えにくいな。俺たちは何か特別なものを求めちゃいないし、24~27バンドを抱えているエージェンシーでもないからな。リリースしている作品のほとんどは、自然発生的なものなんだ。音を聴いたりショーを見て良いなと思い、リリースしたくなったら、バンドの今後の予定を尋ねてみる。バンドのほうから連絡してくる場合もあるし、作品を出してくれないかと言ってくるバンドもいるよ。ほとんどは自分たちがリリースしたいバンドに、こっちから連絡しているな。Eメールやレコードを送ってもらって、本当に感謝してるぜ。ロウでひずんでて、いいバンドなら、俺たちのレーベルからリリースするチャンスはある。流行にのっかったナメきったバンドは、D-TAKT&RÅPUNKから出す気はないよ」

■今日、KROSSAの7"を買ってきたよ。彼らをリリースした理由は?彼らは東京の新しいバンドで、まだそんなに有名でないのにどうやって彼らを知ったの?

「俺にとっては、"名の知れた"バンドだとか、"○○のメンバーが"なんてあおり文句はどうでもいいんだ。音楽が全てだからな。良いバンドは良いバンド、有名か無名かは関係ないよ。まあ、とにかく、FEROCIOUS X、FRIGÖRA、ZYANOSE、FRAMTID、UNARM…などの日本のバンドをMyspaceで聴いているうちに、KROSSAのページも見つけたんだ。彼らのサウンドが気に入っちまって、メールをし、レコードやテープをトレードしたいとお願いしてみたんだよ。手に入れたデモ・テープにすっかり夢中になっちまって、これを7"としてリリースしてみないかメールを送ってみた。彼らの返事には、この作品には満足していない、新しくレコーディングして、D-TAKT&RÅPUNKからリリースできないかと書いてあった。7"を出すのにほぼ1年かかったが、待った甲斐があったよ。間違いないぜ!日本のバンドは独特な音を出すからリリースできて幸せだよ。お前らはディストーション・ペダルの使い方を知ってるな(笑)」

■WARVICTIMSはショーをやらないっていうのは本当?ショーよりもスタジオワークのほうが好き?

「ああ、それは本当だよ。ライヴはやらない。でも、それほど遠くもない将来、やりたくなったらギグやツアーをやるかもしれない。一番の難しい問題は正式なドラマーがいないことだ。スウェーデンのあちこちでライヴができなくてね。7人以上もドラムが変わっている。メンバー3人がそれぞれメンタル的な問題も抱えているから、ツアーも困難になってきているしな。俺の最大の問題は、不景気に耐えなくちゃならないこの時代だな。ツアーに出るのもライヴをやるのも大好きだよ。陰気くさいスタジオにこもっているより、ツアーに出るほうがいいぜ」

■今は様々なハードコア/パンクが存在しているよね。スラッシュ、グラインド、メロディック、ストーナー、77パンクなどはどう?そういうものも好き?

「あらゆるジャンルの音楽を聴いているよ。パンクに留まらずね。音楽はIRON MAIDENやTWISTED SISTERS、BLACK SABBATHなどをひっくるめて聴き始め、12歳になるまで聴いてたよ。その頃、学校に転校生がきたんだけど、そいつのアニキがパンク・ロッカーだったんだ。やつらとつるむようになり、何かと影響を受けたよ。最初に聴いたバンドはSEX PISTOLS、ASTA KASK、RAMONES、KSMB、EXPLOITEDだった。当時の俺はパンク・シーンや君があげたようなカテゴリーの入り口を捜し求めている最中だった。グラインドに強く惹かれたことはないが、スラッシュ、トラル・パンク、メタル、ストーナー、スラッジ/ドゥーム、77パンク、ハードロック、デス、ブラックメタル、他にもいろいろ好きで聴いているぜ」

■では、D-Beatの最大の魅力とは?D-Beatレコードのベスト10を教えて。

「難しいね。D-Beatに対してあるのは強烈な感情だな。実際、俺が次に入れるタトゥーは、伝統を受け継ぐ気持ちを表す、"D-takt"(D-beat)って言葉にするつもりなんだよ。たくさんの素晴らしいアルバムがリリースされているのに、10枚を選ぶのは相当難しいな。忘れている作品もかなりあるだろうし。順序は不同だよ」

DISCHANGE「Seeing Feeling Bleeding」
DISFEAR「A Brutal Sight Of War/Soul Scars」
DISCLOSE「全作品」
EXTREME NOISE TERROR「Phonophobia」
MOB 47「Kärnvapen Attack」
STATE OF FEAR「The Table Will Turn…」
ANTI CIMEX「Victims Of A Bombraid」
TOTALITÄR「Sin Egen Motståndare」
DISRUPT「Unrest」
HERÄTYS「S/T」

WARVICTIMS

俺の意見になるが、DISCHARGEは常に過大評価され過ぎていた

■最近のDISCHARGE（Ratがヴォーカル）は好き？

「2007年の8月にスウェーデンで開催された3日間のフェスティバルで、彼らのライヴを見たぜ。彼らのショーには何の印象もなくて、悲しいと言うしかないな。昔の輝きはない。フェスに出演したたくさんのバンドの中では、KVOTERINGENとSISTA SEKUNDENは良いステージを見せてくれたよ。正直なことを言うと、長いことDISCHARGEのことは気にしていなかった。バンドはオリジナルのほうがいいと思っているから。例えば、DISCLOSEやMEANWHILE。もちろんDISCHARGEは記憶に残る曲も名盤と言える作品も残しているが、俺の意見になるが、彼らは常に過大評価され過ぎていたんじゃないのかな」

■DISCLOSEは大好きだよね。初めて聴いた時はどうだった？Kawakamiさんは多くの人に愛されていたよ…。

「DISCLOSEはD-Beatバンドの中でも最高の一つだよ。俺の友達が96年か97年ごろに「Tragedy」をかけてくれたんだけど、俺はそういうものをそれまで聴いたことがなかった。最初の印象は、見せかけじゃない本物だと思ったね。洗練さのかけらもないロウなサウンドで、強烈な感情が渦巻いているとね。その日以来、猛烈なファンになったよ。Kawakamiがこの世を去ってしまったのは本当に悲しい。彼の霊よ安らかなれ。本物のD-Beatは決して滅びない」

■現在のスウェディッシュ・ハードコア・シーンはどう？80年代よりもクールに感じてる？クラストからメタルパンク、キャッチーなパンク・ロックまで、好きなバンドがたくさんいるけど。これは奇妙な比較だけど、SHITLICKERSとDISFEARだとどっちが好き？

「俺は昔ながらのサウンドが好きでね。SHITLICKERS、MODERAT LIKVIDATION、DISARM、SVART PARADのようなバンドは最高だぜ。でもDISFEARの最新アルバム「Live the storm」は気に入ってる。その日によって、俺の気分もあるんだけどな。今はサウンドを耳障りのいいものにしようとするし、曲を完璧に仕上げるために技術も駆使する。あまりにもやり過ぎて、感情が消されちまう。当時はもっとありのままだったよな。コンピューターで切ったりつなげたりも少なかったし、もっと本物のパワーが漲っていた」

■パソコン/インターネットとハードコアの関係性についての議論がたまにあるけど、双方の関係はどう思っている？例えば、Myspaceの使用を拒むパンクスもいる。Myspaceは巨大企業であり、非現実的な面もあるから。同時にMyspaceを好むパンクスもいる。世界中のバンドとコンタクトをとるのには便利だからね。君の意見は？

「Myspaceは２つの理由から素晴らしいと思うよ。新しいバンドをチェックしたり、連絡をとりあえる。それに世界中の友達と交流も持てるしね。そういう意味では素晴らしいコミュニティだ。かたやMyspaceはかなり不自由だと思う。商業的なくだらねぇものに惹きつけられ、クソバンドは閲覧者をもっと増やそうとあらんかぎりの努力をする。新しい本物の良いバンドなんて実際にはめったに見つからないさ。今日スタートしたようなバンドが、まだライヴの経験もなく、デモも作っていないくせに、Myspaceにプロフィールを載せて誤ったスタートを切る。その一方じゃ、今やMyspaceがなかったら、WARVICTIMSもD-TAKT&RÅPUNKもやっていけないだろうよ」

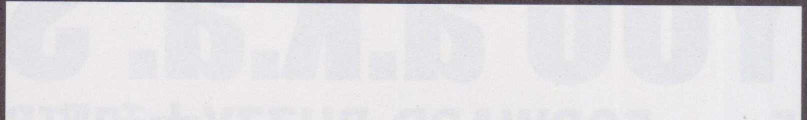
■今後の予定は？新作も楽しみにしているよ！

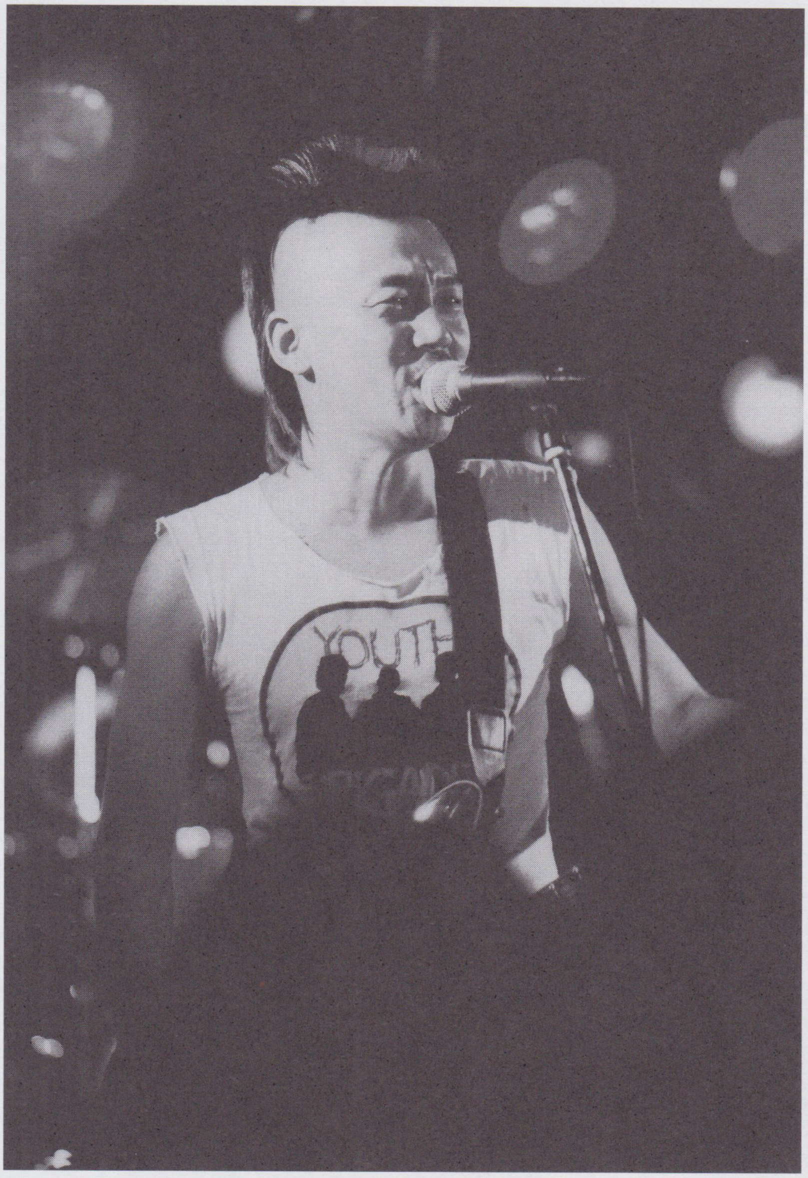
「プレス工場にDISARMのディスコグラフィーを送ったら、４ヵ月も経って郵便物が戻ってきてさ、ヴォーカルのHonsaのところに転送されてきちまった。制作が100％確実になるまでは明らかにしたくなかったんだけどな。ゲートフォールドのジャケットの2枚組12"と、8ページのブックレットをつけたCDとの2種でリリースするつもりでいるよ。はっきりしているのはこれくらいだけど、この作品を手にする日が待ちきれないぜ。その次は、SISTA KRIGET（オーストラリア/スウェーデン）の7"を考えている。オールドスクールなロウ・パンク/ハードコア・スタイルの素晴らしいバンドだよ。リリースさせてもらえて嬉しいね。FEAR OF TOMORROW（カナダ）とも次回作の7"のリリースについて話をしているところなんだ。DISABLEのJeremyに教えてもらうまで、このバンドは聴いたことがなかった。STATE OF FEAR、CONSUME、WARCRYのようなアメリカン・スタイル風の音に完全に打ちのめされちまったね。あとはスプリット7"ボックスを考えているぜ。3枚組スプリット7"をリリースする計画を立てていて、MAKABERT FYND/TORTYR、BOMBSTRIKE/ANATOMI-71からはマスターを受け取っている。一緒にヴィニールに収まってくれる2バンドがまだ未定なんだよな。先日、KVOTERINGENのLarre Thrash（ドラム）からメールをもらったんで、今後の作品をうちから出すのに興味はないか尋ねてみている。他にもプランはあるが、差し迫ったものもあるから、楽しみに待っていてよ」

■日本の読者にメッセージをお願い。本当にありがとう！

「馬鹿丸出しにならないように、母国語ではない言葉で表現するのは本当に難しいね。でも俺のお粗末な文章を理解してもらえることを願っている。D-TAKT&RÅPUNKや俺たちがリリースしているバンドについて知りたいと思ってくれたら、ブログ（dbeatrawpunk.blogspot.com）か、Myspace（www.myspace.com/dbeatrawpunk）をチェックしてほしい。今後について質問があればメール（dbeatrawpunk@gmail.com）してくれよ。Kenji、俺たちに興味を持ってくれてありがとう。地元のシーンをサポートしてくれ。Up The Punx!

～Jocke D-takt aka Sylen aka Fisen」





「あそこの一。そうそう(笑)。あれが実家」

■で、小中学校と横浜で過ごした訳ですね。

「小中は横浜で、高校は東京の学校に、蒲田の学校なんだけど、工業高校だった」

■バンドを最初に始めた時ってのは何歳位の時?

「えーと、バンドを始めたのは小学校6年の時かな」

■小学校6年?バンドを始めたのが?

「そう、バンド。コピー・バンドなんだけど」

■その時の楽器もベース?

「ベースだね。11、12歳の時だったかな。そんで丁度その頃からバンドやってたね」

■そのバンドはどんな感じのバンドだったの?

「甲斐バンドのコピーをやってたんだけど。ちょうど小6(笑)。初めて観に行ったライヴが甲斐バンドで、近所の兄ちゃんに連れて行って貰ったのがきっかけ」

■因みに他のメンバーは同級生?

「そう、同級生ばっかり」

■それ俺、知らなかったな(笑)。

「そうそう。それでそのバンド名が"イカバンド"つって、ただ単に甲斐の逆なんだけどさ(笑)。イカバンドつってさ(大笑)」

■じゃ、そっからパンク・バンドなんかやり始めたのはいつ位?

「中学校1年かな。そう中1」

YOU a.k.a. Senpai

From FORWARD, BUZZY大和町BAND INTERVIEW

80年代後半よりSYSTEMATIC DEATH、DEATH SIDEのベーシストとして活躍し、90年代後半よりFORWARD、00年代よりBUZZY大和町BANDにて活動を続ける名ベーシストである石渡雄次氏にインタヴューを試みた。ジャンル関係なく、全国のハードコア・パンクスに絶大なる支持を受ける氏の半生に多大な影響を受けた者も少なくない。既に完全復活を果たしていた氏だが、今回のインタヴューにて公にパンク、ハードコアに対する自身の半生、また未来への熱い思いを語って貰った。よーし!

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■先ずは自己紹介を宜しくお願いします!

「えー、FORWARD、BUZZY大和町でベースやってるYOUです!」

■生まれは東京?

「生まれは東京の蒲田。で、育ちが横浜の鶴見区。2才の時に横浜に引っ越したからね」

■FORWARDの"WHILE YOU ALIVE"のCDの一番後ろに入っているトラックで言ってるのと同じ住所?

■その時はどんなバンドを聴いてたの?

「その時はアナーキーとかモッズ、ルースターズとかかな、で、アナーキーとモッズのコピー・バンドを中1ん時にやってたな。その頃とか格好とかもう既にパンクになって

たね。何となくね。やっぱ激しい音が、あのね元々好きだったみたい」

■で、ハードコアに。

「最終的にね。その始まりっつうか。この頃はまだヤンキーだったから同時進行でね」

■そういう時代だったもんね。族もやってたんでしょ？

「まあ、かじってたくらいだけど、バンドもやりつつね」

■単車とかは？

「その時はまだ単車には乗せて貰えなかったけど、族の集会にはよく出てたね。ケツにはよく乗っかってたけどね(笑)」

■族もやりつつパンク・バンドもやっていたと。

「その時は"エクセス"っていうバンドをやってたんだけど、オリジナルの曲を演奏するのはこのバンドが初めてだったね」

■この時に一緒にやってた人達の中で今のパンク、ハードコア・シーンに残っている人はいる？

「誰もいないねー」

■雄君だけ？

「そうそう、因みにこのバンドは中3まで」

■それから蒲田の工業高校に進学して、その時には何かバンドは？

「同じクラスにもう1人パンクの奴がいて、でまた新しいバンドやることになったんだけど、そのバンドがSICKっていうバンドで」

■SICではない。



「違うねー。ウチ等はSICKのほうだったから。で、このSICKってバンドからサウンドがハードコア・パンクになったんだ。でライヴとかを横浜のジンジニーっていうライヴハウスでやってたよ。その時に、パイプカットギグっていう企画に出たり」

■ああシステマの企画の。

「そうそう、それによく出して貰ってた。この時は18歳くらいだったかな、高校3年の時。それから程なくしてシステマの初代のベーシストが辞めちゃったもんで、システマに入らないかと誘われたんだ。で、SICKを辞めてSYSTEMATIC DEATHに入ったという」

■システマの音源っていうのは雄君はどこから参加してるの？

「２作目からかな。1作目がソノシートでそれ以降、辞める迄はずっとやってたね」

■VA."THRASH 'TIL DEATH"にも雄君で載ってたもんね。それでシステマには何年位いたの？

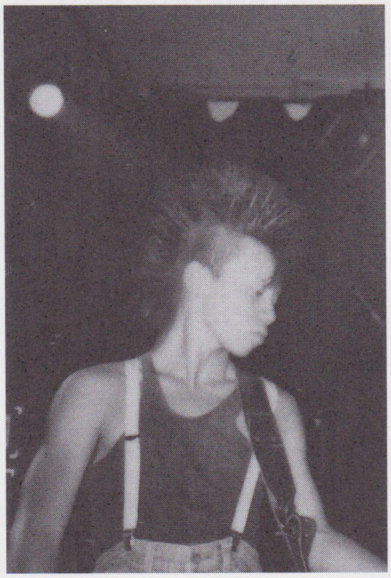
「システマは3年位いたと思うんだよね。21歳まで。この頃はよく東京でやってたりしてたね。鹿鳴館とかでGAUZEとかともやってたりしてたな」

■そしてシステマ辞めた後にDEATH SIDEに入る事に？

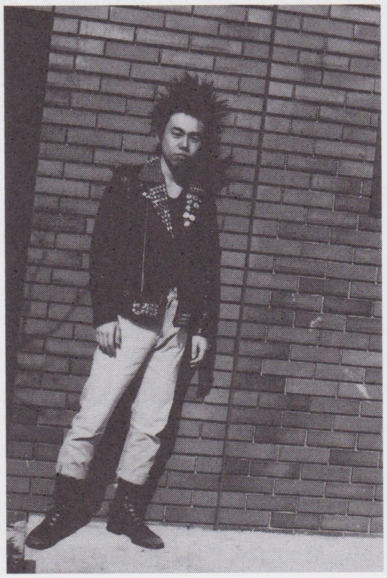
「そうDEATH SIDEに。あのー、なんかねー、システマのギターがいなくなって、その時にちょっとギターにヘルプでチェルシーを借りたのね。それで、ていう事で、DEATH SIDEのファースト・シングルを録音するって時にもベースが居なくて、先に一回チェルシー借りてるから、じゃあ今度YOUを貸してくれみたいな感じになって。で、そのファースト・シングルのレコーディングではベースを弾いてるけど、その時はまだヘルプだったのね。その時はまだシステマやってたから」

■なるほど、じゃあその時はヘルプし合ってたんだ。

「なんだけどさ、気がついたらDEATH SIDEの正式メンバーになっちゃっていたという



SYSTEMATIC DEATH





DEATH SIDE





(笑)。うんうん、これはねー、あのねー、そういうふうにする彼等の作戦だったらしいんだけどね。それは後から聞いたけどね(笑)。まあね、でも俺もねー、実際にね、そのファースト・シングルの曲を録音している時に、「あっこのバンド良いなー」って思ったから、だから、まあ正式メンバーになるのには全然抵抗はなくてさ。でも今度はさ、DEATH SIDEは東京のバンドになるからさ、だからバンドに入った事で取り敢えず最初の1、2年は東京の手前の川崎に住んでたけど」

■そっから東京での生活が始まる訳ね。

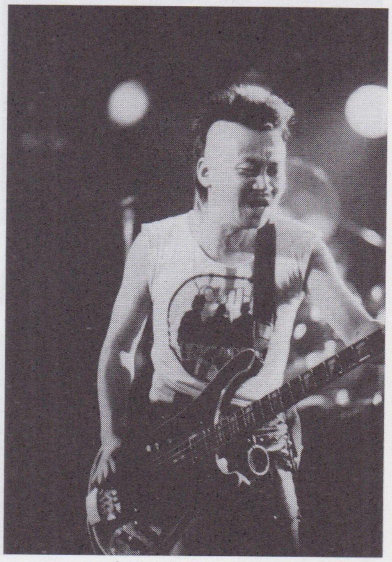
「結局、22歳の時にDEATH SIDE入ったのかな」

■その時見つけた仕事は?

「なぐり(イベント大工)だね。そん時はミノル君とかジャジャとかと同じ職場だったよ」

■その後、ライヴも精力的にこなし、ツアーにも頻繁に出る様になったと。

「この頃のツアーはねー。あっBLOODY SUMMERか。で、LIP CREAMとツアー回っててさ。でその時に全国ツアーってものをLIPと一緒に回る事で、色々メンバーから自分等も教わったりね。元々、BLOODY SUMMERてのはLIP CREAMがやってた企画だから。それでずっと色々サポートさせてもらったりさ」



FORWARD

■それからBURNING SPIRITSに繋がっていくという。まあその当時のツアーは。

「そうね。その頃はねー。もう、あれだけど、時効の話だから(笑)。落書きだらけの車で。滅茶苦茶やってたね」

■ものすごいライヴこなしてたもんね。

「しかもワン・ステージ、18曲位やったりとか(笑)」

■そしてシングルを出し、95年のBURNING SPIRITS TOURの後、DEATH SIDEは解散する事に。

「そうだね、それでFORWARDに。いや、その間にRAVINGSっていうバンドをやってた」

■そのバンドではドラムだもんね。当時のメンバーは?

「Vo.アンサイ(DEATH SIDE CREW)、Bass.アキラ(シシリアンブラッド)とGuitar.タイポン(RANGE & THE 耳涙泥)かな。あとでBassにハリー(CRUCK)が入ったね。このバンドは一年くらいやっててホント、DEATH SIDEとFORWARDの間くらいにやってた。音源はカセットをリリースした位だけど」

■それで28歳でFORWARDを始めたと。

「そう。それでその後、BUZZY大和町BANDを結成したんだ」

■因みにBUZZYはどのような経緯で始めたの?

「BUZZYはねー。もともと飯沢(BUZZY大和町BAND、RANGE & THE DIRTY HOSPITAL、鉄アレイ、BASTARD、SMASH DETOX)が最初に他のメンバーとやってたんだけど、やっぱりなんか、なーんかしっくりつうか、満足いかないみたくぼやいてて、まあしばらくやってたんだけどね。ある日飯沢が「先輩ちょっとベースやってみてくんねえ?」って。曲が難しいからね。で俺は「手伝いみたいなのだったら良いよ」てな感じで初めはヘルプでやってたんだよね。それから程なくして正式メンバーになったのかな」

■で、その後メンバーが総入れ替えになりMUKA-CHIN(SLIP HEAD BUTT、JUDGEMENT、BUZZY大和町BAND、愚鈍、SMASH DETOX)が加入して現在のラインナップになったという。

「そうそう、やっぱりそういう事になるね(笑)」

■因に音源はHG-FACTからの単独7"epとCD?またニュー・リリースの予定は?

「あとVIDEOかな?今んとこリリースの予定はないねー。曲は色々作ってるけど」

■ライヴの頻度は?

「1ヶ月、2ヶ月に1回くらいかな。あまり決めてないけどね。しかし、なんかこう、他にはないバンドだよね。アバンギャルドなねー」

■ちょっと手伝ってた時もそれはプンプンしてた(笑)。では雄君のバンド遍歴としては、IKA BAND→EXCESS→SICK→SYSTEMATIC DEATH→DEATH SIDE→RAVINGS→FORWARD、BUZZY大和町BAND。てとこ?

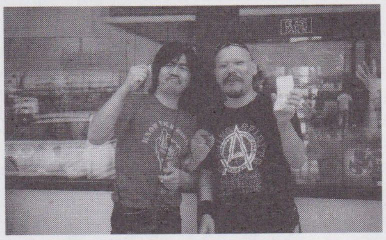
「で、現在に至ると。俺も結構やってんなー」

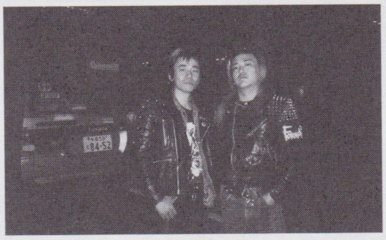
■プレイヤーとして雄君を見た時、先ず、ベーシストのイメージが皆にもあると思うけど、RAVINGSでドラムやった時以外は全てベースだよね。

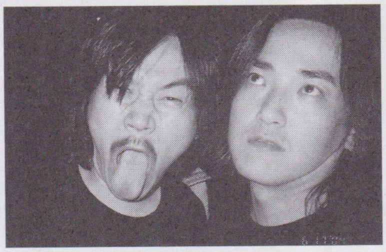
「やっぱベースだね。ずーっとベース」

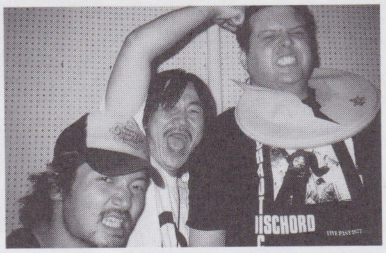
■なんでまたベースをやろうと?

「なんかねえ、まあ今もだけど、「目立たない」っていうのが好きだったんだよな。なんかこう、ギターに比べてさ、目立たないじゃんね。そういう所がなんか、元々なんか好きなんだな」









■今では確立されているベースのスタイルは徐々について来たの?

「そうだね。でもまあ本格的にベースに取り組み始めたのはDEATH SIDEの"THE WILL NEVER DIE"のレコーディングから、ちょっとこう、なんか、まあ思いっきり。音の事とかさ。色々考え始めたね」

■楽曲的にあのアルバムは完成されているもんね。

「そう、すごい。あれひとつねー。そうそう」

■レコーディングも大変だったと。

「えっとねー、"BET ON THE POSSIBILITY"が、1年かかった(笑)」

■そんぐらい突き詰めてやってたという事ね。

「そう、で、その時、"コンセプト・アルバム"ってのをね。ハードコアでコンセプト・アルバムを出すのは日本では俺達が初めてだっつー事でやってた。CONFLICTも"コンセプト・アルバム"を出してたけど、俺達が日本で初めてだみたいな感じでやってたな。その辺からベースの音っていうかそんなモンを本格的に突き詰め始めたね。それまでは、もう、なんかあまり考えずにやってたからね。チェルシーがやっぱり凄かったからさ。音的な所とかさ。練習の度に新曲を5、6曲持って来たり、もう覚えるのが大変でさ(笑)」

■そういう色々な事を経て、今のスタイルが確立されたと。

「そうだね。でさらにFORWARDをやり始めてから、更にまた、こう何か、何かが確立されたね。仕上がった(笑)」

■FORWARD初期から、かなりグルーヴがきてたもんね。実際、ベーシストの雄君ファンは沢山居て、SG使ってる時はシーンでは全国的に更にSGが流行って、Rickenbacker使うと、その後、皆も使い始めるという現象があったけど。

「Rickenbackerはかなり増えたねー。増えすぎだよ～ん(笑)。ちなみに俺はミノル君の真似してSGにしたんだよな(笑)」

■では、ズバリ好きなベーシスト、尊敬に値すると思うベーシストは誰ですか?

「一番ねえ、影響を受けたの?やっぱりミノル君かねー。今では沢山他にもいるけどね。あと外国ではJean-Jacques Burnel(the Stranglers)かな」

■ではこの業界、いわゆるジャパニーズ・ハードコアのシーンの最前線に居続ける事によっての生活の変化は?

「皆も酒をかなり飲むし、無茶苦茶な生活してるからね。身体壊している奴も多いよ。それは皆も分かってるんじゃないかな。俺も数年前にそんな生活のつけがMAXになっちゃって肝臓を悪くしてさ」

■で、入院を余儀なくされる訳ですね。

「そうそう、良くなる迄に2、3年くらいかかったね。その前から悪かったけどライヴはやり続けてたから。そのせいっていう訳じゃないんだけどね。まあ、でも滅茶苦茶やってたから(笑)。だから常にこう、いつ体調が崩れるのかなっていうのはライヴやりながらは思ってはいたけど」

■体調崩したのはFUK、WARHEAD、FORWARDのツアーの後だったからね。実際、その後、血糖値が800迄上がったっていうのは…。もちろんこれは死んじゃうレベルでしょう(笑)。

「これは確実に死んじゃうねー。肝臓の数値も1000超えちゃってさー。猪木は血糖値500台で本を書いたけど俺は800台だから(笑)。これは映画化だよーって(笑)」

■実際、長期に渡る入院、治療は辛かった?

「辛かったねー。でもさあ、そういう経験があってさホント純粋な気持ちでさ、自分に素直になれたね」

■色々な障害を経て、そして無事に前線復帰を果たした訳だけど。

「これからも全開で表現して気持ち入れてやり続けたいね!」

■では自分の今年の展望とか今年の目標を。

「目標は。そうだねえ。身体の健康に気を使ってくのは勿論だけど、またやっぱFORWARDの活動を早く再開したいよ。もうすぐだけどね(笑)。あと個人的に、なんか、こう一歩前に進みたいとは思ってる。だんだん、頭も固くなってくる年だけど、でもその気持ちはなくなんないよね。なくなっちゃったら、なんかあれだね、面白くないよね。だから新曲やるなりでもさ、常に前に進みたいね。一番こう、なんか刺激になるしね」

■では〆に今を生きる野郎共に一言お願いします。

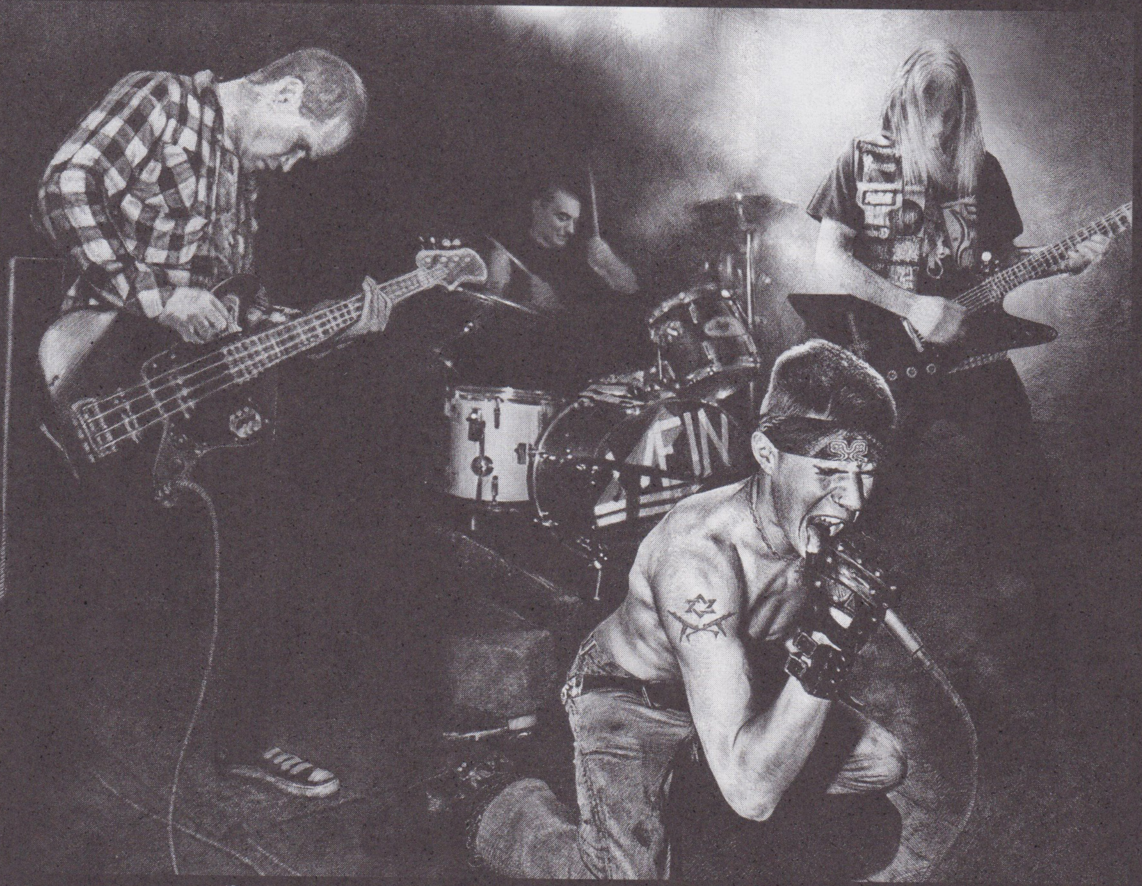
「あのねえ、身体が資本だよ～(笑)。若いうちは分かんないだろうけど身体が動いてなんぼなんだからね～。あとね、数年前に身体の調子崩しちゃった時から、メンバー、周りの友人はもとより、色々心配してくれた全国の皆にも色々応援を貰って感謝しますって事です。バンド活動出来る位まで復活してますんで!ご心配おかけしました!ていう感じです。最後に、なんだかんだ言ってもねー、ホント身体が資本だよー。何やってもあれだけど、身体が資本だからねー」



DEATH SIDE



BUZZY大和町BAND



NIGHT FEVER

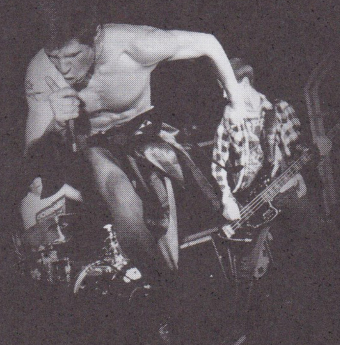
前号のSEXDROMEに続いて、こちらもex ARRIGT ANTRÆKメンバーが在籍しているデンマークK-Townハードコア・バンド、NIGHT FEVERの登場です。繰り返しK-Townバンドのインタヴューを行っていると、今回だけでも"KasperとAndreasは兄弟だったのか!"とか、"Jesperは元々SLØSERI DER SKADER OS ALLEをやっていたのか!"とか、これまで見えてこなかった相関図が徐々に浮かんできます。ただ、こんな情報を誰が欲しているのかは、分かりません(笑)。
アメリカのSxEバンドみたいなジャケットの"NEW BLOOD"LPをADULT CRASHからリリースしている彼ら。"好きなものはハードコア、ビデオ・ゲーム、コカイン"と言い切るナイスガイ、Salomonにインタヴューしてみました。 彼のハイ・トーン・ヴォーカルは凄くクールです。そして、"このインタヴューを読んだら日本のみんなはどう思うかな?"、"回答は面白かった?"と言ってきたりして、結構気づかいな人でもありました。ちなみに感想を求められたので、"黒いペニスは僕もごめんだ"と答えておきました…(そのワケは読めば分かります)。

■NIGHT FEVERのこれまでについて聞かせて。いつ、どうしてこのバンドを始めたの? ドラムのJesperはHJERTESTOPでプレイしているよね?

「NO HOPE FOR THE KIDSのKasperのアパートで、俺とAndreasが呑んでいた時にNIGHT FEVERのアイデアが生まれたんだ(KasperはAndreasの兄なんだよ)。長いこと一緒に俺たちはハードコアをやってきたよなって話しをして(ARRIGT ANTRÆKってハードコア・バンドを一緒にやってたんだけど、NIGHT FEVERを始める2年前くらいに解散した)、またバンドを始めようぜって決めたんだ。ファストなハードコアは6、7年やっていたから、今度はファストじゃないやつをね。構成は俺(Salomon)がヴォーカル、Andreasがベース。だから俺たちはギターとドラムを見つける必要があったんだ。それでSLØSERI DER SKADER OS ALLEってデンマークのバンドでドラムを叩いていたJesperに加入してくれって頼んだんだ。そしたら喜んで受けてくれたよ。ギターはある奴にやってもらっていたんだけど、そいつは大学での勉強を続けるからって、たったの3ヶ月で辞めやがった。そいつの代わりにMathiasが入ったんだけど、これは良い選択だったぜ、バッチリ合っているからね。そうそう、JesperはHJERTESTOPでもドラムを叩いているよ」

■多分、君は色々と幅広くパンク/ハードコアを聴いているよね。子供の頃から現在に至るまでどんなバンドを聴いてきた?

「俺が最初に手に入れた音源はMEGADETHの「Countdown To Extinction」で、俺が9歳の時に兄弟がプレゼントしてくれたんだ。パンクを聴き始めたのは12、13歳くらいで主に古いUSハードコアを聴いてたよ。初めてアナログ盤を買ったのは、HOLIER THAN THOU?の7インチだったかな。今でも俺の音楽の趣味は多岐に渡ってて、主立ったものだと未だにUSハードコアは新旧問わず聴いているし、あとはメタル、クラシックなロック、60年代サイケデリック、50年代ロックンロール、もっともっと聴いてるけどね」



■NIGHT FEVERのバンド・ロゴからは、CHAIN OF STRENGTHとかJUDGEみたいなアメリカのSxEバンドを連想したけど、意識してた?たまたま?

「いや、それは狙ってないよ。SxEハードコアは大好きなんだけど、俺はストレート・エッジじゃないしね。ていうか正反対だし。退屈な時にSxEソングを叫ぶのは最高だぜ(笑)」

■LPのジャケットの絵も良いね。でもどうして写真じゃなくて絵を使ったの?写真よりインパクトがあるね。

「写真を使わないってことを選んだのは、1stのジャケだから、メンバー全員で載りたかったんだよね。それとは別の理由で、うん、俺も君と同じ意見で写真よりインパクトがあるなって思ったんだ。ライヴの写真をジャケに使うハードコア・バンドは沢山いるし、それってありきたりでつまらないからね。それで俺たちのライヴ写真を元にして、Balazs Kiss(ジャケを描いてくれたアーティスト)が絵にしてくれたんだ。彼は才能のあ



る奴でさ、「Hitman 3」とか「Kane and Lynch」とか色んなコンピューター・ゲームの表紙も描いているんだぜ」

■Mathiasってメタルが大好きなんじゃないの?ファッションとかギター自体もメタリックだし。彼は別にメタル・バンドもやっているのかな?

「俺が思うに、あいつはデスメタル・バンドをやっているはずだよ。けど、練習しているだけで、ライヴはやっていないんじゃないかな。バンド名もまだないみたいだし。彼の兄弟のJakob(Adult Crash Records)もそのバンドでプレイしているんだったかな」

■君の好きなヴォーカリストを教えて。ハイ・トーンで凄くクールだね!

「ドモアリガト、ケンジ!俺のお気に入りのヴォーカリストは、Elvis、Jim Morrison、Janis Joplin、Del Shannon、Bobby Vinton、Gary Floyd、それにGlenn Danzigだぜ」

■"New Blood"という曲にある、"This ain't 1983/1984/1985. This is our time!"って歌詞が特に好きだな。ちなみに、この曲の後半部分は誰が歌っているの?Danzigみたいだね。

「ドモアリガト!そこを歌っているのは俺だよ!みんな誰か他の人間が歌っていると思ったみたいだけど、NIGHT FEVERは俺が全て歌っているんだ(笑)」

■レコーディングはどんな感じだった?

「全てが順調だったとは言えないな!3ヶ月もかかったし、俺とAdam Schwartz(サウンド・エンジニア)だけでミックスしたんだけど、身の毛もよだつ経験だった!俺とAdamで3ヶ月の間ずっと、週に2日か3日かけてミックスしてたから、もう少しでキチガイになるところだった。キック・ドラムを8時間ぶっ続けで聴いていれば、人間は殆ど発狂するだろ」

■Adult Crashからリリースしたのはどうして?僕も素晴らしいレーベルだと思っているけど、理由を教えて。

「そうだな、良いレーベルだからだよ!それにあっちから、"俺のレーベルから1stレコードを出してみないか"って聞いてきたんだ。断る理由なんてないだろ?」

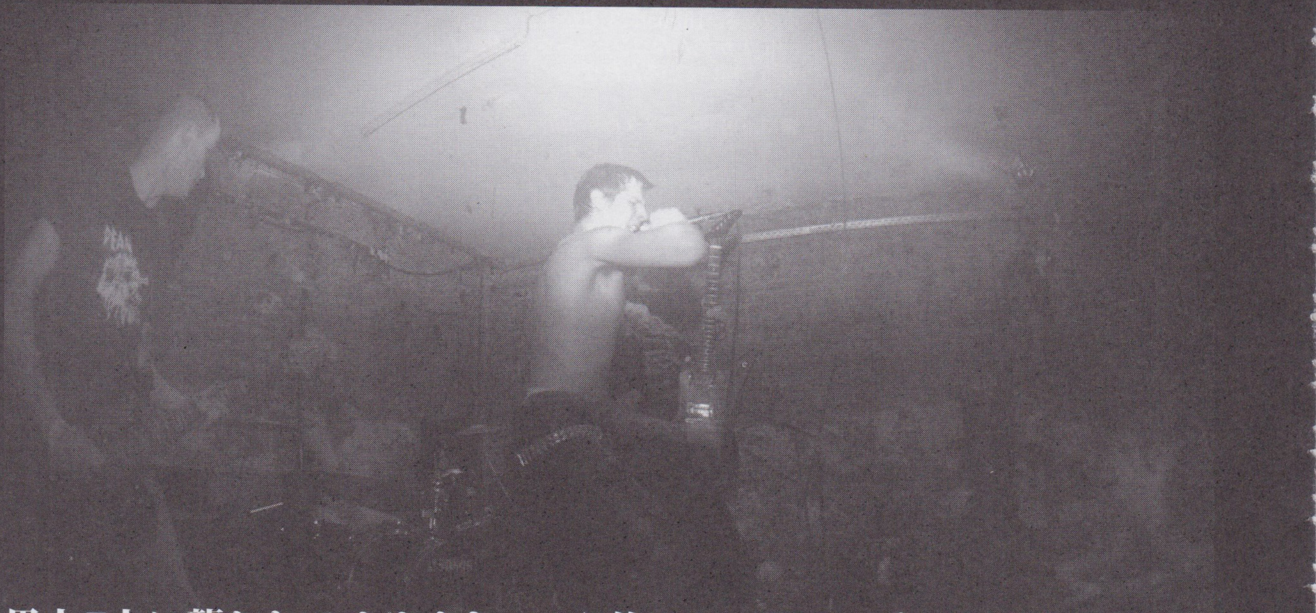
■君にとってのK-Townの最高の魅力ってどんなの?あと、Ungdomshusetでの素晴らしい思い出ってある?

「うーん、ここには現在も活動している沢山の良いバンドがいるからね。LOVE POTIONとか、HJERTESTOP、RIPPING HEADACHE、DE HØJE HÆLE、DEAD INSTRUMENT、それにMOONLESSとかね。それがK-Townの良いところさ。それに、過去にも素晴らしいバンドが数多くいた。この2つが



K-Townの良いところだ。あと美人も多い。Ungdomshusetの素晴らしい思い出も沢山あるよ。俺とHJERTESTOPのLasseは、ハードコア/パンクをプレイする場所で、毎週ラジオ・ショーをやっていたんだ。一度、そのラジオ・ショーをやりながら酷く酔っぱらっちまって、おまけにドラッグもやってたんだ(俺たちはしょっちゅう酒を呑んではドラッグをやりながら流していたんだけど、この時は多すぎた)。それでいつもはハードコアのレコードをかけていたんだけど、曲を止めてポルノをラジオで流してみたんだ(笑)。ただ俺たちが知らなかったのはその日、アムステルダムのOcciiっていうスクワットみたいなところでバースデイ・パーティーが開かれていて、しかもUngdomshusetのラジオがインターネットを通して、あっちのスピーカーでもかけられていたんだ。2、3時間経ってから何人かのデンマークのクラスティーズが、真っ赤になりながら激怒して、俺たちのところに怒鳴り込んできた。アムステルダムでも聴かれていたんだから、ラジオでポルノをかけるのは止めろってな。でも俺たちは止めずに、ポルノとハードコア・パンクを





黒人7人に襲われて、しかもあいつら俺のケツをレイプしようとしたんだよ 俺は全力で走った。黒いペニスなんてごめんだぜ

流し続けてやったぜ(笑)。あいつら、俺たちが狂ったと思っただろうな」

■これまでデンマークのバンドにいくつかインタヴューしてきたんだけど、殆どみんなK-Townのバンドだってことに気がついたんだ。K-Town以外で、デンマークの良いバンドとかシーンとか知ってる?

「他の都市にはそんなに良いバンドは多くはいないな、あくまでも俺の意見だけどね。けど、今やっているバンドでチェックすべきなのは、COLA FREAKS、SELVHENTER、WAR OF DESTRUCTION、それにUNDERAL KRITIKだな」

■日本のハードコア・バンドからの影響ってある?好きなバンドがいれば教えて。

「もちろん!DEATH SIDE、鉄アレイ、WARHEAD、KRUW、PAINTBOX、GAUZE、G.I.S.M.が好きだ。NIGHT FEVERは日本のハードコア・バンドを滅茶苦茶リスペクトしているぜ!!!!!!興奮をありがとう!」

■政治的なバンドじゃないのは分かっているけど、政治とハードコアの関係性についてはどう思っているのかな?

「ハードコアの政治性には全然関心がないんだけど、政治的な意識を持っている人々がハードコア・シーンにいるっていうのは、良いと思うよ。ただ俺はハードコア・バンドの政治的な歌詞を読むのが退屈でしょうがないんだよ。ハードコア・バンドの政治的な視点なんかより、ヴォーカルの心の中にあるものの方が聴きたいしね。個人的な葛藤だったり、自身のダメなところ、サタニズムとか、異常性とか、敵意、ドラッグの乱用、破壊、憎しみと殺人とかさ。HAIL SATAN AND FUCK POLITICS!」

■ところで、色んな国にツアーで行っているよね。最高の思い出と最悪の思い出を聞かせて。

「最高の思い出は、ツアーでスウェーデンのストックホルムでやったことだな。POISON IDEAも出演したんだけど、俺たちのライヴが終わった後に、一人の男がやって来た。そして"お前らのライヴが良かったから、ライヴ中に大声で叫んじまったよ"と言ってくれたんだ。世界でもベストのバンドだとか言ってさ、バンドもやっている奴みたいで、自分のバンドのマーチャンダイズを全部くれようとした。けど、俺たちはそいつに、"お前のバンドのマーチャンダイズなんかいらねぇよ"と言ったんだ。そしたら彼は後ずさって、なんか叫びながらPOISON IDEAを見に行っちまった(笑)。最悪の思い出はアムステルダムへツアーに行って、そこで色んなドラッグを売春街の通りで買おうとしたんだ。そしたら黒人7人に襲われて、しかもあいつら俺のケツをレイプしようとしたんだよ。俺は全力で走った。黒いペニスなんてごめんだぜ」

■じゃあ、パンク/ハードコア以外で好きなことって何かな?君はどんな仕事をしているの?

「あぁ、働いているよ。ゴミみたいなエレクトリック・テクノを流すクソつまんねぇクラブで、バーテンをやっているんだ。ぞっとするような仕事だよ。仕事に行く時は、いつも銃で自分の脳味噌を吹き飛ばしたくなるぜ。俺が好きで興味があるのは、ハードコア、ビデオ・ゲーム、コカインだ」

■今後の予定と抱負なんかを。

「日本に行って、クールな全ての日本のハードコア・バンドと一緒にドラッグをキメて、発狂したいな!あと俺たちのレコードを日本からリリースしたい」

■最後に日本の読者にメッセージをお願い。どうもありがとう!

「世界で最もイカれている日本のハードコア・パンクスに感謝したい。いつでも俺の家に来てくれよ。もしK-Townに来るならMyspaceを通してメッセージをくれ。食い物と酒とドラッグとマンコを用意しておくぜ。みんなを歓迎する、ハードコア・バンドも普通のパンクスもな。ALWAYS KEEP THE FAITH!」





ORIGIN OF [M]

広島ハードコア・シーンの先陣を走り続けるORIGIN OF [M]が、ニュー・アルバム「STRUGGLE」をリリースしている。
多面性を孕んだ楽曲は色彩豊かでありながらも、ブレることのない確固たる独創性を放ち、強靭且つ柔軟だ。
また、机上の空論ではない実践している者の意志が漲った歌詞も鮮烈。問題提起と純粋に"音を楽しむ"という、ともすればどちらかに偏りがちなこの2つのバランスが、見事に融合した一枚に仕上がっている。
ヴォーカリストのGUYさんに、今作及び、その一貫した活動の背景にあるものを尋ねてみた。

■今作の1曲目「STRUGGLE」ですが、戦場とアベェ・マリアが混ざったSEから始まりますが、これは何かの映画からですか?また曲中、北朝鮮のミサイル発射のニュースも挿入されていますが、どんな意図を込めて使ったのでしょう?

「アベェ・マリアと戦場を組み合わせたSEですが、これはPVを製作してくれた鉄太くんに頼んで素材を探して作ってもらいました。聖歌と戦場の音を融合する事で対極する現在の世界状況を表現したかったんだ。「STRUGGLE」の曲中のSEですが、これはアルバムにエンハンスドで収録されるPVの画像にあわせて入れました。最初は上関原発に反対する祝島のおばちゃんの声を入れてます。次にオバマの"yes we can"、最後に北朝鮮のミサイル発射のニュースです。オレの活動の中でポイントとなる世界の現状を表す3つの出来事を入れました。オレは今、上関原発反対の運動に参加してます。この曲はその決意の現れです。タイトル通り、"ハッピーエンドに向けて僕達の闘争は始まる -Our struggle starts toward the happy ending-"。ハッピーエンドは上関建設中止、並びに新たなる原発建設計画の即時却下、核廃絶による世界の平和〜未来への気持ちを込めてます」

■「阿呆の政」でも、選挙で民主党の大勝を伝えるニュースを使っていますね。自民と民主、どっちが政権を取ろうが阿呆の政に変わりはない、という感じでしょうか?

「まったくその通り。自民も民主もどちらも俺たちの選択肢などない。自民も民主も元は自由民主党なわけでしょ。派閥争いが党派の争いに変わっただけ。平たく言えば30年以上前の角福戦争(田中角栄と福田赳夫の権力闘争)の福田派の小泉の流れに属する自民と田中派の小沢民主党のケンカなわけでしょう?くだらねぇ。社民党はポーズで普天間や上関原発を反対してる。それでも連立で与党に入ってる。その与党の経済産業省は十数基の原発の推進計画をつい最近発表したんだ。CO2削減という世界に冠するらしいお題目とエネルギー確保とやらで。ところでCO2ってそんなに悪者なのか?エコロジーを盾に密林を切りまくってそこにサトウキビを植え、多量の油を使いガソリンの代替燃料エタノールを作ってる阿呆の米国に意見すら言えないこの国が推進するエコ対策って?CO2は植物の大好物なんだから植樹にお金をかけるほうがよっぽど効率がいい。原発計画は過疎地を狙う。過疎地は自然が豊かだ。その自然体系を破壊して、CO2を出さない(これもウソだけどね)原発を建てる。何がしたい?そんなに核が好きなのかこの国は?」

■「プラハ」〜「戦争の犬共」という流れも意図的なのかな、と思いました。また「プラハ」自体、異色というか英語のメッセージが流れてその後、爆発音が鳴り響く、という曲ですが、ここに込めたメッセージはどんなものでしょうか?プラハというと、"プラハの春"がパッと思い浮かびましたが。

「去年プラハで行われた核廃絶宣言のオバマの演説にラガのビートをあわせて作りました。オバマも"プラハの春"のチェコを手前の舞台に選んだんでしょう。ヤツが演説をしてる傍から原爆が投下され、戦争の犬共が始まる。オレなりのアイロニーです。ちなみに戦争の犬共は死の商人(軍産官複合体)のことを例えています」

■「SUCK UP!!!」の曲中、"今度こそ間違えることなく一歩ずつ確実に〜"という歌詞がありましたが、これはGUYさんご自身にも向け

た言葉なのかな、と勝手に解釈したのですが、いかがでしょうか?

「そうです。素人同然の状態から始めたオレが活動をし続ける中で間違いや失敗はありました。それで仲間も何人か去ったし、他人とのトラブルもありました。チンポムの件では現代美術館に怒鳴り込んだし、チンポムを題材にした映画を上映予定の映画館の壁を壊したり(苦笑)。まぁ、それが元でチンポムのリーダーから電話で会って話がしたい。って言ってきて彼に直接会えたプラスの面もあったんだけどね(笑)。映画館の館長とも今ではいい友人。NO NUKES RELAYっていう広島発の上関原発反対のイベントを一緒にやってる仲間。今からも活動しながら学ぶ中で間違いはあるだろう。でも平和な世界目指して行動してるんだから、出来るだけ間違うことなく確実な未来-あした-を目指そう。ということです」

■その「SUCK UP!!!」の後、小鳥の鳴き声と冒頭にもあったアベェ・マリアのような曲が用いられていますね。今回のアルバムを通して、「闘争(struggle)の始まり」から「その終わり」までを表現しているのかな、とも思ったのですが、実際は?

「そういう意味もありますが、始まりのSEでアベェ・マリアを題材に戦場の音を使い、終わりのSEで同じくアベェ・マリアを使い小鳥の囀りをいれることで、ここでも対極を表現しています。あくまでイメージで使ってますが、アベェ・マリア=聖歌=平和。闘争の終わりにあるものは幸せな未来です」

■受け取り手に任せる、どうとでも意味がとれる歌詞、というのもありますが、GUYさんの歌詞はより直接的に感じます。歌詞を書かれる際の状況や、意識しているポイントを教えて下さい。

「ヴォーカルになって2年半。素人同然のオレが深読みさせる高尚な歌詞なんか書けません(笑)。実際体験したこと、思ったことを言ったら直接的になっちゃいました」

■ちなみに、ジャケットの絵に込めた想いも聞かせて頂ければ。

「これは広島在住の油絵画家の女性、川本絵美さんの作品を使わせてもらいました。この絵は3連作になっています。ジャケットに一枚使いブックレットに残りの二枚を使っています。この3連作はジャケットに被爆直後のネガティヴな表情を、ブックレットに目を開けようとする様を、最後に目を大きく開き未来を見つめるポジティヴな表情を表すことで、65年前の悲劇を乗り越え平和都市広島を作った先人達へのリスペクトを込めています」



■繊細なフレーズと硬質なパートの絡み、リズムも多彩で、単純に"何々みたい"と表現出来ない独自性も感じています。曲作りはどういった感じでされていますか?一曲の完成までかなり時間がかかりますか?

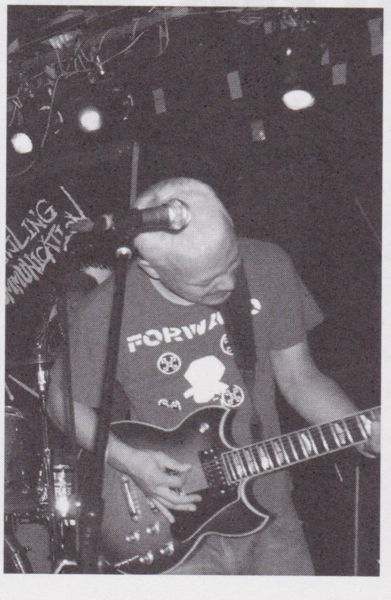
「それはね、模倣するより創造(クリエイト)するほうが楽しいもん。ある意味ではバンドマンって農家だよ。音楽っていう名の合法ドラッグきめて、新しいドラッグ(バンド)もすぐ試す(聴く)。くそー、格好いいじゃんこのバンド!!って思ったら、くやしいのですぐに自家栽培(作曲)する。種は輸入せずにね(笑)。その作った合法ドラッグを多くのパンク・アディクツ達にキメてもらいたい。そのドラッグをキメた自家栽培パンクスがまた凄いドラッグを発表する。そうやって音楽は今まで進化してきたと思うのね。だからそうやって音楽作ってます。曲は、オレの曲はほとんど構成まで自分で作る。それをメンバーが更に膨らませる。○の曲は○がフレーズを持ってきてそれに構成とオレの世界観を入れる。そしてそれをメンバーが更に膨らませる。そうすると、いい意味で当初考えてた自分のイメージとは違う曲になるんだ。でもそれがアレンジだと思うし、バンドの個性だよね。ある程度、曲っぽくなったら適当なウソ英語つけてすぐライヴで発表。自分らでも自信ある曲はお客さんが新曲格好いいね。って言ってくれる。いまいち不安な曲はまったく言われない(笑)、当然その曲はボツ。残った曲にあらためて日本語歌詞を考えて入れる。っていう流れで作ってるんだ。同時進行で7、8曲作りながら1曲完成するまで平均で半年はかかるかなー」

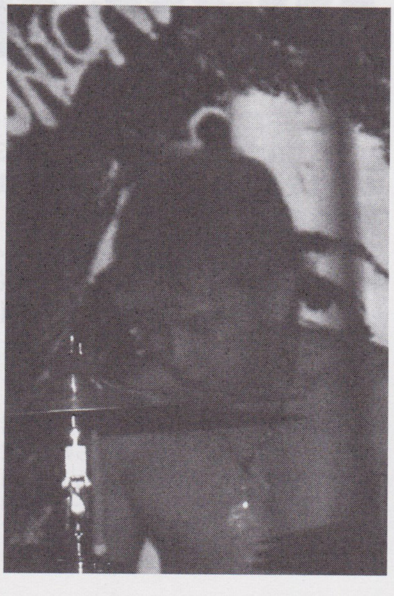
■楽曲自体は幅広いですが、やはりハードコア・パンクという面は徹底的に貫かれている印象があります。今更な質問かもしれませんが、ハードコア・パンクである、という面に関しては強く意識されていますか?

「単純にハードコア・パンクに一番影響を受けたからね。意識してるわけではないけど、完全に自分の血となり肉となってる。でもハードコア・パンクに固執してるわけではないんだよね。いつでも新しい刺激を求めてる。新しいジャンルに脳味噌やられたら、いつでもそっちに行こうと思ってるんだけど、20うん年そんな音楽には出会った事ないから未だにハードコア・パンクやってる(笑)」

■今作がご自身のBLOODSUCKERや前作をリリースしたUNDER THE SURFACEではなくSTRAIGHT UPからリリースされたのが少し意外だったのです。リリースの決め手となったことは、何かありましたか?









ハッピーエンドに向けて僕達の闘争は始まる

「京都でSLANGと一緒にやるときがあって、その打ち上げで「今度KOちゃんとこから出してよ」って話したら「いいですよ」って二つ返事でOKしてもらったのでそのままリリースに至りました。結局1年半かかっちゃったけど、その分いいモノが出来たかなと。それと、このバンドを始めるときにBLOODSUCKERからは出さない。って決めてたのね。他のバンドと同じようにデモ作ってレーベルに送って、っていう工程をちゃんとしたかったんだ。BLOODSUCKERはオレのレーベルだから暗黙の了解でリリース?なんてメンバーに思われるのもヤダったし。で、最初は男道から出せたらな。と思ってたらOKですよー。って音も聴かずに井上くんに言われたので(笑)、DEMO今から作るからそれで決めてよって、急いで録音しました(笑)。オレが作品も人間も格好いいって思ってるレーベルから全てリリースしたいってのが野望なんで、これで三つ果たせたかなと。それが今回STRAIGHT UPからリリースした理由です。いつかオレが人間的にも格好よくなったら、その時はBLOODSUCKERから出そうかな(笑)」

■TO FUTUREジンにしても、お店/レーベル、そしてバンドの活動も個別事項ではなくて、GUYさんの中で全てが繋がっているような印象を受けます。行動が首尾一貫しているというか。原発問題で揺れている祝島にも直接行かれたようですし、「自分に何が出来るのか?」を常に考えて、実際に行動に移されている。根底にあるのは、危機感ですか?何だか漠然とした質問ですみません…。

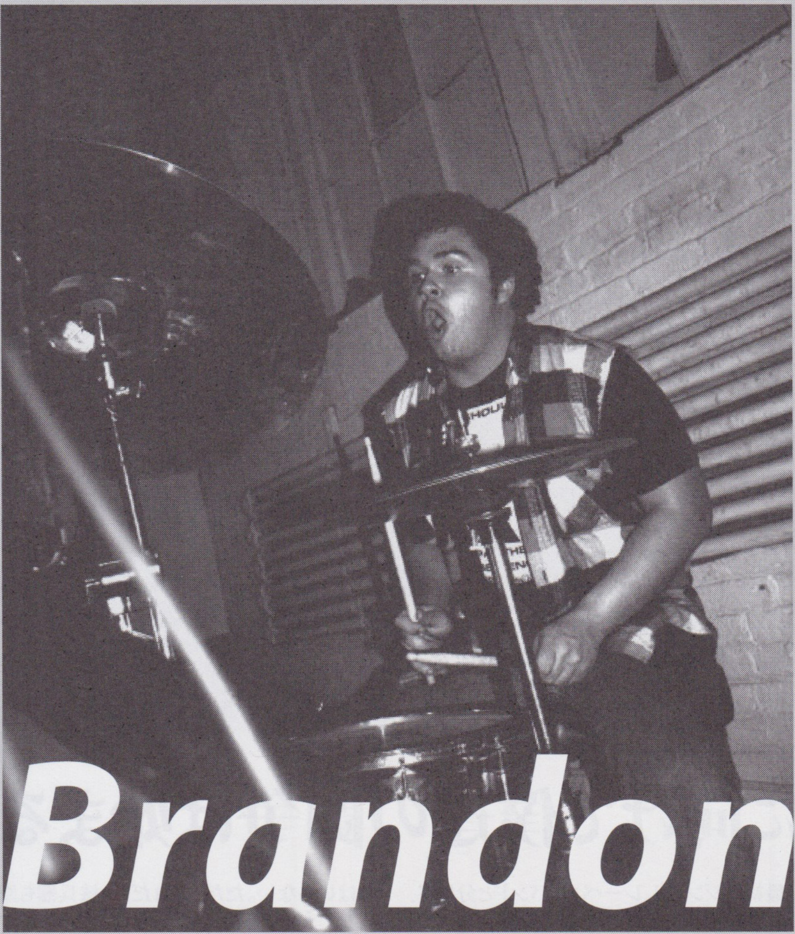
「最初はジン、店、レーベル、バンドと分けてたんだけど、やっぱオレがやってるわけで今はいい意味ごちゃごちゃになってます。原発問題も、語り部の会(毎月6日広島市内のbarスワロウテイルで行われている被爆者の方のお話を聴く会)に参加してたときに原発反対の活動をしている女性に出会ってね。その人から色んな話を教えてもらってる中で上関の話が出たのね。それで核廃絶も大事だけど、原発もいらないよな。って本気で考え出して個人的に色々調べてたんだ。それから1年位後にNO NUKES RELAY(広島発の上関原発建設反対のイベント)に誘われたんだよね。その時からかな、本気でこの問題と向き合ったのは。去年10月に広島、東京と2本ぶんぶん通信2(六ヶ所村ラプソディーなどで知られる鎌仲ひとみ監督のビデオレター)上映ライヴをやったのね。地元もみんなが協力してくれて、自身初めての上映とライヴのコラボを成功させたんだけど、東京はオオサカ(CROSSFACE)のイベントに上映を組み込んでもらったり、上映の用意をしてもらった。イシヤ(FORWARD)には用意だけでなくアドバイスを沢山してもらったんでこの二人には凄え感謝してる。快く了承してくれたその日の出演バンドや理解あるEARTHDOMスタッフにも感謝。上関を通じて人と人との繋がりの大切さを教えてもらってるような気がする。オレが声かけてNO NUKES RELAYに参加してくれた全国のパンクスにもこの場を借りて感謝します。話は戻ってオレの行動についてなんだけど質問の通り、最初は危機感。でも祝島に行ってそれは完全に変わった。いらないものはいらない。ただ、それだけ。核兵器も原発もそういう意味ではまったく一緒。今、オレの頭の中はシンプルだよ」

■視線は後ろ向き、内向きではなく、前を、未来を向いているとも思っています。ハードコア・パンクの未来、20年後、30年後はどうなっているか、とか、想像されたりしますか?これまた漠然としていますが…。

「基本的にオレ、ポジティヴだからさ。あんま悪い事は考えないのね。ハードコアの未来?そんなの格好いいバンドがいっぱいいて格好いいステージ見せて、それを格好いいと思ってのってくれるパンクスがいれば、それだけでいい。本当の意味での平和が来たら、みんなノンポリ・パンクスになればいい(笑)。オレが目指すのはPUNK DISCOだからね。みんなパンクで思い切り楽しんで思い切り踊れっていうマインドだからさ。未来は何のポリシーもなく、ただ楽しいからバカ騒ぎするパンクスの時代がくればいいなと」

■最後に、読者さんに伝えたい言葉がありましたらお願いします。

「さっきの質問でも言ったんだけど、オリジンのいくところ、それは全てPUNK DISCOだからね。LIVEHOUSEでもCLUBでもないんだよ、PUNK DISCO!!みんなオリジンをネタに騒いで踊ろうぜ!!!難しいことは家に帰って考えようぜ!!」



Brandon

from —— SOUTHSIDE STRANGLERS —— SYNDROME
GOVERNMENT WARNING —— WASTED TIME
DIRECT CONTROL – NO WAY RECORDS – VINYL CONFLICT

元MUNICIPAL WASTE、CAREER SUICIDE。
現SOUTHSIDE STRANGLERS、SYNDROME、GOVERNMENT WARNING、DIRECT CONTROL、WASTED TIME。そしてレーベル、NO WAY RECORDS。
更にレコード・ショップ、VINYL CONFLICT。
米国リッチモンドにて、これら全てを一手に担っている男、Brandon、御年25歳。僕が他誌(…なんでしたっけ?)に関わっていた時にコンタクトをとり、インタヴューのセッティングをしたのですが、その後も彼の動きはドンドン活発化、SOUTHSIDE STRANGLERSなんてバンドも始めたようで、その1st 7"を買ったら極上のキラー・パンクだったのです。そんな経緯でBrandonに、「久しぶり!元気?今、EL ZINEての作っているんだけど、またインタヴューやろうよ」とメール。5分後には返信があり、そうしてこうしてインタヴューとなったわけです。米国のハードコア/パンク、と言ってもだだっ広いのでその一部ではありますが、彼は間違いなく重要なキーパーソンの一人なのです。

■2008年のインタヴューで基本的なことは知っているから、最近の状況について質問したいんだ。なんと言ってもSOUTHSIDE STRANGLERSを始めたことが最大の出来事だと思う。このバンドではギターのパートを選んだのはどうしてなの?

「実のところ、SOUTHSIDE STRANGLERSを立ち上げたのは俺じゃないんだよ。GOVERNMENT WARNINGのKennyと他のやつらがSOUTHSIDE STRANGLERSを始めて、その後に俺がセカンド・ギターで加入した。ギターを選んだのは、このバンドにとってそれが面白いんじゃねぇかなって思ってさ。それにドラムならたくさんの別のバンドで叩いているだろう(笑)!」

■「Too Much TV」はキラー・パンク・ロックで素晴らしいよ!DEAD BOYSも思い出したけど、曲はどんなふうに作ったの?

「全員がそれぞれ曲を書いて、練習の時に持ってくるんだ。リハーサルやジャムをしながら少し書くこともある。EP「Too Much TV」のレコーディングはクールだったぜ。俺がバンドに加入した後に、俺のギターもレコーディングしたんだ。新しい作品も作っているから、このジンが発行されるまでには出ているんじゃないかな。「Strangle You」って作品になるぜ。FASHIONABLE IDIOTS RECORDSからリリースされることになっている」

■曲の尺って考えている?SOUTHSIDE STRANGLERSの曲は2分以下だよね。"2分を超える曲はクソだ"と前に言ってたけど。

「自分たちのやり方で曲を書いただけだと思うよ。曲の長さなんて全く気にしちゃいなかったな。結果、こうなったって感じさ。だろ?」

■(タイトル曲の)"Too Much TV"で"MTV"を取り上げているね。MTVをどう思う?たぶん好きじゃないだろうね(笑)。

「俺はMTVが好きだぜ。TVは全部好きだね。バカでマヌケなTVを見るのがさ。だから他のくだらないことを考えるひまがないんだよな。シンガーのKennyはTVがあんまり好きじゃないと思うよ。彼が歌詞を書いているんだ。でも確信はないんだよ。まだその歌詞を読んでいなくてね、ハハハ!」

■SYNDROMEも君の新しいバンドなの?!びっくりしたよ。SYNDROMEのサウンドはD-Beat/クラスト・ハードコアだから、GOVERNMENT WARNING、DIRECT CONTROLなどとも全く違うよね。

「SYNDROMEはD-Beat/スウェディッシュ/ジャパニーズ・スタイルのハードコア・バンドなんだ。俺たちはSOD(スウェーデン)やDISARM、CRUDE SSなどのバンド、それにFRAMTIDのような新しいバンドに影響されている。俺はそういうバンドが好きなんだよ!日本のパンクスもそういうバンドが大好きだよね。そう望むよ!!!!7"がDESOLATE LEGACY RECORDSから出るし、PERDITIONとのスプリットLPも計画中だよ。日本のレーベルが興味を持ってくれたら、名誉なことだね!」

■君はパンク/ハードコアを幅広く聴いているから最高だね!ところで、Oi!、サイコビリー、スカ、ストーナー/ドゥームなどは好きなのかな?

「主にはパンクとハードコアを聴いているけど、たまにはBLACK SABBATH、THIN LIZZY、MOTORHEADのようなロックも聴くぜ…New Wave Of British Heavy Metalなんて言われる作品も大好きだし、Oi!も少しね。時々だけど…」

■最近のお気に入りバンドを教えてもらえる?僕はNIGHT FEVER(K-town)、UTOPIA(ポーランド)を最近よく聴いているよ。

「俺はSYSTEMATIC DEATHの新しいLPが好きだな!昔の作品よりも新作のほうがいいと思うんだよ。ドラムがもの凄ぇ!!!!!またUSに来てほしい。NYCでやった時のようにGOVERNMENT WARNINGと対バンしてもらいたいよ。SYSTEMATIC DEATHのショーは本物だぜ。最高だよ!!!!とにかくだな、他に今俺が夢中になっているのは、Feral Wardから出たKIELTOLAKIのLP、FIRMEZA 10の「Hardcore Radikal」LP、FOLKEIISのデモ、QUICK FIXの6曲入り片面EP、SSRの「Orwellian Future」EP。これらはどれも素晴らしい新作だぜ!!!!」

■VINYL CONFLICTというレコード店を始めたのはいつで、どうしてやろうと思ったの?店の運営はうまくいっているのかな?

「店を始めたのは約1年半前になるんだ。厳しい仕事だけど、充実した時間を過ごしているし、価値ある仕事だとも思うよ。永遠に店を続けていきたいね!!!」

■DIRECT CONTROL、GOVERNMENT WARNING、WASTED TIMEはどうなっている?これらのバンドの最近の状況を教えてもらえるかな。

「DIRECT CONTROLはもうほとんど活動していないんだよ。でもドラムと俺は一緒にいろんな音楽を演奏してはいるぜ。俺たち、このバンドから生まれたものに目を向けてみようと思っているんだ。DIRECT CONTROLのデモやリリースされていない作品がもう間もなく、もしかしたら遅れるかもしれないが、TANKCRIMESレコードからLPで出ることになっているよ。クールな作品になるはずだぜ。GOVERNMENT WARNINGのほうはヨーロッパ・ツアーの後から休みをとっているんだ。LPと7"を出したんだけど、出せて嬉しいよ。俺たち、いつも日本に行きたいと思っている。でも日本は俺たちに来てほしくないのかな????WASTED TIMEはずっと活動しているよ。NEGATIVE APPROACHとも共演したし、BASTARDやCROWも出演する"CHAOS IN TEJAS"に出るんだ、やるぜ!!!!!!新曲もあるし、あそこで起こることが楽しみだね」

■そう、GOVERNMENT WARNINGは2009年にヨーロッパ・ツアーを行ったね。その印象を聞かせてもらえる?

「そうだな、ヨーロッパはGOVERNMENT WARNINGとWASTED TIMEでツアーしたんだけど、とにかくハードだったよ。ボロくて最悪なバンを使い、機材もひどいもんだった。条件は悪かったが、それに負けないくらいやったと思う。どのショーも素晴らしかった。俺は毎晩、両バンドでドラムを叩いたから、もうクタクタになっちまって、もう疲労困憊だったよ。毎晩、ヘロヘロだったぜ!」

■毎年、"NO WAY FEST"をオーガナイズしているね?今年も予定しているの?

「Lauren(俺の婚約者)と俺は今年の夏に結婚する予定なんだよ。それで、たぶん秋ごろに"NO WAY FEST 4"を開催するつもりでいる…だけど、うん、この3年間は俺たちがフェスを運営してきた」

■ところで、君が一番好きなパートって何なの?ヴォーカル?ドラム?それともギター?

「ドラムかな。どんな時も個人的に一番気に入っているよ。それは疑う余地がないぜ」

■店にレーベル、バンドもやってて多忙だと思うけど、スケジュールはどうやりくりしているの?寝る時間はある?

「うまいことやりくりしているよ。睡眠も十分とってるしね。時には、とり過ぎるほどさ。ハハハハハ!目が廻るほど忙しいことも時にはあるけど、問題なくやっているよ」

■パンク/ハードコアは今後、70's〜90's、そして現在よりもクールになると思う?君は25歳だったよね。10年後の自分は想像がつく?

「パンク/ハードコアは俺たちみたいなファンがいる限り、生き残っていくだろうと俺は望んでいる。滅びないさ。10年後は35だな(俺たちの時代だな!まさしくね!)。今以上に、もっと速くて、もっと強烈なバンドが登場したらいいね。でも俺たちがそれを見せてやるぜ、だろ???」

■活動を続けている原動力になっているものって何なの?パンク/ハードコアから離れていく人もいるけど、君は本当に活動的だよ。尊敬している。

「俺だって君を心からリスペクトしているよ。1度だけじゃなく、2度もインタヴューしてくれて、名誉なことだと思う。敬意を抱いているよ。君と握手を交わしに日本に行けたらいいな。それからレコードを買いにもね!!!!!CHICKEN BOWELSの7"、HALF YEARSの7"、NIGHTMAREの1st LPが必要なんだ。アハハハハ!!!!!!!いろんなことをやり続けているのは、人生は1度きりだからさ。自分の人生を充実したものにしようとし、できるだけポジティヴであろうとする。なあ、そうだろ?どこにだって難問は持ち上がる。そんなの気にしちゃいられねぇ」

■人生において最も重要なレコードは?ベスト5、もしくはベスト10をあげてみて。

1. ADOLESCENTS「S/T」LP
2. ZERO BOYS「Vicious Circle」LP
3. AGENT ORANGE「Living In Darkness」
4. DISCHARGE「Why」LP
5. TOXIC REASONS「Kill By Remote Control」LP
6. KORO/7"
7. ABUSED「Loud And Clear」EP
8. BASTARD「Wind Of Pain」LP
9. UPRIGHT CITIZENS
「Open Eyes, Open Ears and a Mouth to Speak」LP
10. BAD RELIGION「Suffer」LP

■店、レーベル、バンドの抱負は?

「自分がやることをやり続け、出来る限りベストを尽くして人生を生きていくことかな」

■日本の読者のみんなにメッセージをお願い。ありがとね!

「日本——大好きだぜ!GAUZE、FRAMTID、FOLKEIIS、JUDGEMENT、BAD DIRTY HATE…他にもたくさんのバンドを見たい。君らの国に招待してくれよな!!!!Kenji、どうもありがとう!!!!!!STAY PUNK!!!!」



SYNDROME



SOUTHSIDE STRANGLERS



人生は苦闘であって
かたちはそれぞれ違っても誰もが何かと戦っている

THE FIGHT

ポーランド+ドイツ出身者による女性ヴォーカル・バンド、THE　FIGHT。スウェディッシュ・ハードコアとメロディアスな東欧ハードコアの狭間を行くような、ありそうでなかった鮮烈なスタイルのバンドです。ノドを全力で振り絞っているかの切実なシャウト、そして何よりもステレオタイプとは一線を画す歌詞が、実に興味深いのです。例えば、"Books"という曲。"Youtubeやテレビなんか見ないで本を読んで"的な内容で、"White pages are calling me"なんてくだりは、本好きにはたまらないものがあります(笑)。彼女ら/彼らが主張している、ヴェイガンや女性の権利についても、少し突っ込んだ話しをしてみました。ちなみに、ドラムはVITAMIN Xのメンバーでもあります(…知らなかった)。

PHOTO:Daniel Marcinkowski (except ※)

■THE　FIGHTのヒストリーを教えてもらえますか?THE TANGLED LINESのメンバーもいるの?

Asia「ハイ!ポーランドとドイツ出身のTHE FIGHTよ。アルゼンチンのハードコア・バンドのTRUSTにインスパイアされ(※ポーランドのEMANCYPUNXがTRUSTのシングルをリリースしている)、オール・ガール・グループを作りたくなって、Gosia(ベース)と私(Asia/ヴォーカル)とで2005年ごろにバンドを始めたの。でも全くうまくいかなかった。私達のいい友達って、男(Pawel/ギターとMarek/以前のドラム)だったのよ。結局彼らとファストなハードコア・パンクの曲をやることになったの。数ヵ月後にMarekがやめて、THE TANGLED LINESやVITAMIN Xでプレイしているwolfiがドラムで加入したわ。間もなく私達はデモをレコーディングして、ショーもたくさんやるようになったけど、Wolfiは他のバンドもやっているし、ドイツのドレスデンに住んでいたから、定期的にバンドをやることができなかった。残念だけどね。2008年にKamilがセカンド・ギターで加入し、このメンバーで2009年にファーストLPをレコーディングしたわ。たいしたことないヒストリーよね…」

■バンド名をTHE　FIGHTとしたのは?とてもシンプルな名前ですよね。

Asia「シンプルでキャッチーな名前にしようって考えていたの。ねえ、いい時でさえ、人生に必ず存在しているのは戦いかもしれない。個人的なことを言うと、THE FIGHTにはポリティカルな意味も込めているの。自分の人生の中でやっていくこと全ては、なんらかのかたちで政治的であるから。どんな選択も他人との関係も…全て政治と…。あ、だけど名前の話しに戻って…現実を見つめないとね…この名前にしたのはキャッチーだから(笑)」

Pawel「THE　FIGHTは本当にシンプルな名前だよ。でも、全てを言い表している。人生は苦闘であって、かたちはそれぞれ違っても誰もが何かと戦っているだろ…それが政治的なものであるかは関係なくてさ。それに、バンド名を覚えてもらうのは簡単だからね(笑)」

■子供のころってどんな風でしたか?パンク/

ハードコア・ミュージックとの出会いはいつ、どのように?

Asia「もう、難しい質問してくるのね。自分のことしか話せないわよ(笑)。QUEENやBLURを聴いて素敵な子供時代を過ごし、15のときに、友達やジンに影響され、ショーに行ったりして、パンクに夢中になり始めたの。最初は若者の反逆とファッション(ティーンネイジャーのころは誰しも他とは"違う"と感じたがっているものね・笑)だったけど、すぐに行動主義、フェミニズムなどに強く夢中になった。音楽から生まれる社会的な意識と比類のないエネルギーが、私をここに引き留まらせていると思う」

Pawel「小さい町で子供時代を過ごした。インターネットも電子系の娯楽もない、クールな時代だったよ。13のときに、学校で何人かのパンクスと出会った。やつらは反抗的で刺激的に映ったし、強烈な印象を受けちまったんだ。俺は彼らとつるむようになり、テープやジンを買い、そういうことを今日まで推し進めてきたよ」

Wolfi「俺はドイツ民主共和国(旧東ドイツ)で成長してきた子供時代のことを、あんまり覚えていないんだ…絶えず食料が不足していたことを除いてはね。あのころは食べ物を手に入れるための、自分なりの方法を持っていなければならなかった。ある時期までテクノに夢中だったが、IRON MAIDEN、HELLOWEENやドイツのパンクを聴くべきだと思ったよ。アニキが素晴らしいハードコアのレコードを教えてくれた。LIFETIMEの『Hello Bastards』だったんじゃなかったかな。それは俺にデカい感動を与えてくれたよ、ドラムを叩きたいって思いに駆り立ててくれたね。その後、アニキと一緒にTHE TANGLED LINESを作り、ハードコア・パンクの世界にどっぷりはまっちまった」

■KNIFE IN THE LEGとスプリット7"をリリースしましたね。彼らとスプリット7"を制作したのはどうしてなの?

Asia「友達同士でもある2バンドのアイデアだったの。私達は一緒に作品を作りたくて、あれを作ったのよ。レーベルをやってる仲間も助けてくれたわ。だからあの作品は私達みんなの赤ちゃんね(笑)。一緒にバルカン半島をツアーしたんだけど、素晴らしいツアーだったわよ…」

Pawel「あの当時、俺達はとても仲が良くて、よくつるんで遊んでいる間にスプリットを作ろうって話になったのさ。スプリット7"を実現させてくれた人達に感謝だよ。それと、セカンド・ギタリストのKamilは今でもKNIFE IN THE LEGで弾いているよ」

■君たちの「Maldicion」LPは素晴らしくパワフルでした!レコーディングはどうでしたか?順調に進みましたか?

Asia「思い出せる限りだと、本当に素敵だったわよ。特に友達みんなとのシングアロングのパートはね。まあ、イライラすることもあったけど。まだ曲が出来上がっていなくて、レコーディングの間に完成させなくちゃならなかったりもしたから。でもやり切ったわ。今では良い思い出よ」

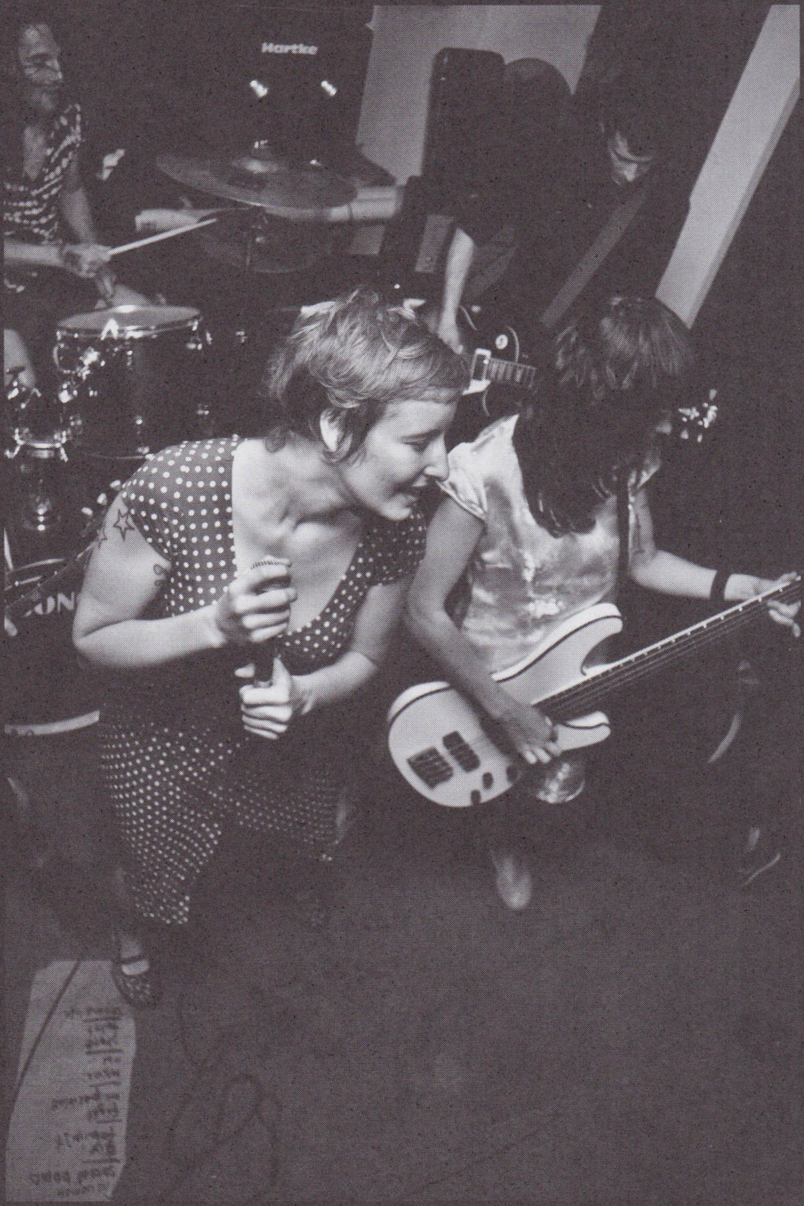
Pawel「本当に素晴らしい時間だったぜ。猛烈に集中していたし、ストレスも感じたけど、前向きな行程だったな。俺たちはできるだけ素晴らしい作品を作りたかったんだ。約1週間、全力を尽くし、満足いくものが出来上がったよ。作品作りにぴったりの方法に照準を合わせ、LPを作れたことに感謝だな。次の作品は更に良くなるだろうね」

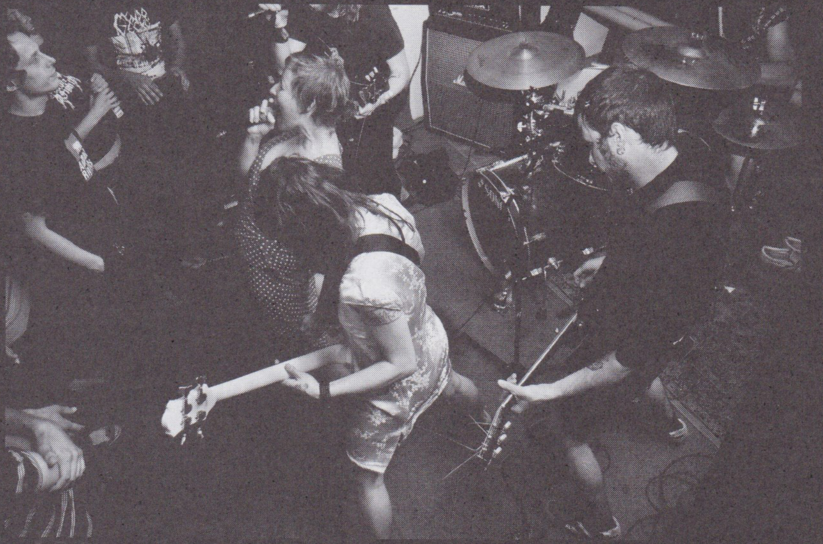
■君たちのサウンドからはTRAGEDYやスウェディッシュ・ハードコアの要素も感じます。最近はどんなバンドを聴いているのですか?

Asia「みんなバラバラなことを言うと思うわよ。私達ってまだそういう年頃だと思うの(笑)。Pawelはスウェディッシュものに夢中ね。私は速い曲やガールズ・バンドをよく聴いている。PANDAMONIUM、CONDENADA、KHATARINAも好きだな。でもSCREAM CLUBやCANSEI DE SER SEXYのようなエレクトロ・バンドも聴いているんだけどね」

Pawel「ハハハ、俺達の音はTRAGEDYと似てるとは言えないな…あんなに暗くない、ハハハ。でもそれは最高の誉め言葉だよ。そうだな、俺はクラスト/D-Beatにどうしようもなく夢中だけど、影響されたものを全部混ぜ合わせようとしているよ。だから、TRAGEDYやWOLFBRIGADEのレコードには見つけられない良いメロディーを、俺達の曲から聴き取れるってわけさ」

■ところで、BAD RELIGIONやNOFXやGREEN DAYなどのような、USの有名なバンドはどう?そういうバンドは聴いていますか?そ





れとも論外?

Asia「子供のころ、GREEN DAYに本気で夢中だった(音楽的に好きだったって意味よ)。でも今はもう好きじゃないな。一般的な政治に対して"積極的"な態度をとっているところが苦手。ええと、待って。彼らはBushに対しては反対する立場をとり、Obamaには賛成するようなことを言っている。これは"パンク"とは違うと思うの(そういうものがパンクなら、私達は何時間でも議論できる)。でもそういうことを言うような背景を持つ人なら、私はやっぱり好きになれない。でも、もしかしたら私は状況を混同していて、人に期待し過ぎているのかな?どうなんだろ…とにかく、あなたが言ったような音楽スタイルにはもう興味がないし、求めてもいなくて…」

Pawel「まず初めに…BAD RELIGIONはGREEN DAYや他のくだらないバンドと一緒にくくっちゃいけないよ。BAD RELIGIONのレコードは今でも好きだな。最近のものではないけど。でも彼らは俺にとっては7 SECONDSやYOUTH BRIGADE、他の古典と呼べるバンドと太刀打ちできるものなんだよな。GREEN DAYやOFFSPRINGは聴いたことがないよ。俺は年寄りだからね、ハハハハハ」

■君たちの歌詞は、僕にはとても興味深いものです。ありきたりなパンクの曲とはかなり違っていますね。歌詞はどのように書いているのですか?

Asia「歌詞は私の頭にわいてくるの(笑)。物語や人生観察、私を悩ますあれこれ、社会問題などをベースにした個人的な経験を混ぜ合わせて書いている。他のメンバーが書いている曲もあって、Wolfiが書いたのは"Time To Fight"、Kamilは"Second Life"をね」

■"Can't Look At Your Plate"を歌っているので、ヴェイガンなんだろうなと想像しました(肉が乗っているからお皿を見られない、という内容の歌詞)。ヴェイガンの信念について話してもらえますか。

Asia「ええ、メンバー全員がヴェイガンよ。またはヴェイガンであろうとベストを尽くしてる。なぜなら、今の世の中で100%ヴェイガンであるのは難しいからね。不可抗力で口にしてしまうこともあるし。個人的にはヴェイガンを貫こうとベストを尽くす姿勢を支持してる。なぜヴェイガンかって?ここ数年で自然にヴェイガンであろうと決心したわ。最初は難しいんじゃないかと考えていたけど、ヴェイガンの人達と休日を一緒に過ごしているうちに、生活がヴェイガンになったのよ(笑)。だから最終的には難しくはなかった。今ヴェイガンは、健康的でエコロジーでもあり、道義にかなった選択よね」

Pawel「とてもシンプルさ。動物の命は彼らのものだ。Asiaが言っているように…今じゃ俺達には他の道を選ぶ必要がないよ」

■スウェーデンのバンドにインタヴューしたとき、"お前らクジラを食べるのをやめろ!ヴェイガンになれ!"と言われました…。捕鯨についてはどう思っていますか?第二次世界大戦後、日本は食糧不足だったので肉の代用にクジラを食べていました。今ではそれほど一般的ではないですが。

Asia「私にはクジラを食べるのは他の動物を食べるのと同じようにクレイジーなことに思える。動物の種類は問題じゃない。"伝統"や歴史的な事実は私も承知しているわ。スペインにも闘牛があるし、フランスではカタツムリを食べる伝統もあるからね。でもそういうことは"文明"とはかけ離れていると思うし、倫理的な生活に背いていると思うのよ…少なくても私が望んでいるのは…でも、今はもう一般的ではないってあなたが言うなら、特別なことになっている、あるいは"昔のこと"になっているなら、それは良い方に向かっているんじゃないかな」

Wolfi「VITAMIN Xで日本を訪れたときに、日本でヴェイガンでいるのは本当に難しいと感じてショックだった。ヨーロッパではハードコア・パンク・シーンの人間の1/3がヴェイガンなんだ。ヴェイガンであるのは普通だし、難しいことじゃない。ヴェイガンがたくさんいるから、交流を持つのも、問題の解決も簡単にしているんだよ。ヴェイガンの俺は、日本ではエイリアンの気分だったな。ほとんど肉や魚を出す店ばかりで、それを除くと、通りで食べ物を見つけるのは大変でね。ひもじかった。日本のパンクスは食糧の問題に関心がないみたいだね。みんな伝統にのっとった食事をしている。ヨーロッパでは90年代後期から2000年代初期に強固なヴェイガン活動があって、今日まで多くの人達が影響を受けているんだ。動物の権利のムーヴメントはいまだに成長しているし、かなり勢力的だよ。ヴェイガンであるというポリティカルな選択は、環境や俺達の友人…動物(笑)に大きな影響を及ぼしている」

■ちなみに、妊娠中絶容認を支持していますか?君たちの国では妊娠中絶容認と中絶反対との深刻な対立がありますか?たぶん、大部分の日本人は中絶容認です。





Asia「ポーランドは厳格なカトリックの国なの。ここでは中絶は憲法違反だし、教会が人々の考え方に大きな影響を及ぼしているわ。教会はそれを正しいことだとスローガンに掲げているから、中絶反対を主張する人も多いし。でもゆっくりと状況は変化している。この問題に対して、カトリック教徒の多くが"自分の意見"を持っていると思う。また、フェミニスト・ムーヴメントもたくさん作られているし、この問題からタブーを取り除こうと動いているわ。でもなかなか難しい仕事で、やるべきことはまだまだある。法律だけじゃなく、妊娠中絶を禁じている暗い面に人々の目を向けさせることにもね。ポーランドでは違法だけど、お金のために非合法でそれをやるところを見つけることはできる。もちろん、これはアンダーグラウンドだし、刑務所に入れられるリスクとも直結しているわ(中絶手術を行った医者は罰せられる)。それに女性の体に負担をかけることも…悪い状況の中で、経験不足の医者が行うことも多いの。時には命をかけることさえ…この国では、モラルの問題以上に、経済的な問題のほうが大きいことに目を向けないと…お金があれば中絶は簡単にできる。いまだに世間の意見の圧力は大きいわ!いつの日か良いほうに変わっていくことを願っている。子供を持つ、持たないの選択を、自分自身で決められる日が来ることを…」

■英語で歌っている理由は?世界中の人達にメッセージを伝えたいからですか?

Asia「部分的にはイエス。でもWolfiがポーランド語を話さなくて、英語でコミュニケーションをとっているからでもあるの。バンドとしての私達とリスナーとしてのあなたが、歌詞に同じようにアクセスするのよ」

■シーンは女性がバンドをやりやすい環境にありますか?

Asia「質問の答えには合わないかもしれないけど、バンドをやりたがっている女性は、パンク・シーンにいる他の女性、男性から、気づかいやサポートを受けていると思うわ。素晴らしくてポジティヴな雰囲気がある。少なくともワルシャワのシーンはね。もちろん、女性を"お飾り"みたいに扱うクソッタレなやつもたまにいるけど。でもそれは避けることができない…」

■日本のバンドや文化は何か知っていますか?日本に興味はありますか?

Pawel「もちろん。DISCLOSE、スターリン、UNHOLY GRAVE、ENVYのような日本のバンドを知っているよ。WolfiがVITAMIN Xで日本を訪れた後に、日本について少しばかり知ったことがある。いつか日本でプレイできたらクールだろうな」

Wolfi「昨年、日本に行った際に、文化や国に深く感動したな。誰もが相手に対してとても礼儀正しいし、素晴らしい人達だったよ。ヨーロッパに戻り、懐かしく思うときがあるんだ。東京は強烈だったな。クレイジー・シティだ。知っているバンドをあげるよ。TOTAL FURY、DAMMIT HONEY、ISCREAM 7 SHOWERS、TOMATO STEAL、COMPLETED EXPOSITION、ECHO、ZONE、FLIPOUT A.A.に、SLIGHT SLAPPERS。日本ではどのショーでも、こんな凄ぇプレイはできないぜって降参しちまうような、グレートなバンドと共演したよ。俺の友達、Daisuke、Naoki、RichanとDave EEにもあいさつさせてくれ」

■これは繊細で難しい問題ですが…女性のイスラム教徒は髪や体のラインを隠さなければならないですね。時には"名誉の殺人"も行われます…。これをどう思いますか?女性の権利の迫害?それとも宗教をベースとした文化?

Asia「難しい質問ね。宗教と伝統という2つの面があるからね。ある理由があって、女性でも男性でも、体を隠すような服を着るのは構わないし、そういうことを信じるのも私は気にならないわ。個人的には、私は宗教的な人間ではなく、私に体を隠すように強制してくる人の宗教は認めてはいない…隠すものもないし、恥ずかしいとも思わないしね…でも、とにかく、自由に着るものを選ぶ人を尊重する。だけど伝統のような別のことは、必ずしも信じる必要のないルールに従う集団を作り出すのよ。"こういうふうにやるべき"とか"昔からこうやってきた。これは自分たちの伝統だから、続けていく"なんていう理由だけでね…批判的な考えも持たず、個人の考えをぶつけ合うこともせずに…。自分の娘は髪を隠すべきだとか、学校には通わせないなどと決める家族もいる。若い女性に辛らつにあたって、彼女達の教育や仕事、それに他の人に美しさを見せることを罰する家族もいるのよ。こんなことには賛成できないわ。絶対にね!もちろん宗教と伝統は強固に結びついている。でもたいていは…私は自分の人生は自分で選べるほうがいい。顔を隠したいと思う女性はそれを選び、好みの服を着て顔を見せるほうがいいと思う女性はそうできるといいと思うの。彼女達に危険が及ぶことなしにね」

■今後の予定や目標を教えてください。

Pawel「休日までに何本かショーをやるつもりだよ。今年はスペイン人の友達のREPRESIÓNとスプリット7"をリリースしたいな。たぶんいつかはUSツアーもね(笑)」

■日本の読者のみんなにメッセージをお願いします。ありがとう!

Wolfi「良い質問をありがとう。いつの日か日本で会いたいね。または、こっちで寝る場所を用意して日本の友達を歓迎するぜ!」

Pawel「お前らクジラを食べるのをやめろ(笑)!ヴェイガンになれ(笑)!ありがとう!」



※



PUNK/HARDCORE/UNDERGROUND in LATVIA

the first volume

前号にてロシアのUNBROKEN BONESを、そしてしょっちゅうポーランドのバンドは紹介していますが、何かが抜けている。そう、ロシアの西、ポーランドの北東に位置し、日本では全く馴染みのないバルト三国。
期せずして、チェコに"東ヨーロッパのDIYハードコア/パンク"を専門に扱う『DRUNK NACH OSTEN』(D.N.O)という素敵なセンスのファンジンがあり、今春に発行された号にはバルト三国の一角、ラトビア共和国のシーン・レポートが掲載されていた。発行者のPaayaに許可を得たので、2回に分けて転載させてもらう次第です。
執筆者はボスニアヘルツェゴビナのハードコア・バンド、RIOT IN OPERAで活動しているMišo、掲載元の『D.N.O』はチェコと、ラトビア人不在のラトビア・シーン・レポート(後半のインタヴューには登場している)。まだまだ知られていないバンドは世界中にゴマンといます。"今のパンクはつまらない"とロクに聴かずに悟った風の人には、"お前は今のラトビアのバンドを聴いたことがあるのか?!"と切り返してみましょう。多分、気が狂ったと思われます(笑)。
では、前編をお楽しみ下さい。

やあ、Mišoだ。『D.N.O』のPaayaから記事の依頼をされて嬉しく思うよ。この記事は今のラトビアを伝えるものではあるけど、違うとも言える。これは僕が見ている一面であって、同時に別の面も進行しているからね。僕たちは記事を書くのを延ばし延ばしにし、時間だけが過ぎていった。そして、機は熟し、やっとかたちになる時が訪れたよ。このジンが発行になって感激している。それにさらに続いていくことも願っている。僕は独特のサウンドを鳴らす誰も知らないバンドや、Tシャツさえ売っていないようなバンドの記事を読むのが好きだ。世界中にはひと癖もふた癖もある面白いバンドが散らばっている。そういうバンドによる、ノイズまみれのテープを聴くのも楽しいし、デモやライヴを録音したテープを聴くのもいい。

僕がラトビアに行ったのは、もう2年以上も前になる。ラトビアの印象はすでに相当あいまいになってきている。もともと、この記事は自分のジンに掲載するつもりでいた。しかし、ジンはまだ制作の途中でもあり、ここに掲載したほうが良いと思ったんだ。

僕に手紙をくれる人、もしくはレコードのトレードに興味を持ってくれる人がいたら、miso.komunikacia@gmail.comにまで連絡してくれ。またはwww.myspace.com/stehpunkを見てほしい。

事実に基づいて、僕の印象を記してみる。

ラトビア

バルト海の北西に位置する小さな国。接しているのは、リトアニア、ベラルーシ、ロシア、エストニア。ほぼ平坦な土地。"バルト海の真珠"と称えられる美しい港町・首都のリガ、良質の琥珀の産地…複雑な言語…たくさんの魅力的なバンド。シンプルで簡潔な紹介になってしまったね。

ラトビア・パンク・シーン? ラトビア・パンク・シーン!

僕のやっているRIOT IN OPERA(ボスニアヘルツェゴビナのバンド)と共演したこともあるラトビアの**CITA ATTIEKSME**。このバンドはNYの影響が少しあるイキのいいハードコア/パンク…素晴らしいバンドだよ。

ラトビアのシーンを調べるためにまず最初にやったことは、地元のシーンの代表者と直接連絡をとることだった。そして、あるジンに掲載されていた2つのシーン・レポー

トは、ローカルなバンドに関する僕の知識を広げてくれた。同様に他のバンドを見つけ出す助けになってくれたのは、『Discography of Eastern European punk music 1977-1999』という本。

これはTien An Men '89 Records(http://www.geocities.com/tam89rds)から出版されている。

VONOSONOLOPPUSと**33-LETNY PODONOK**とのスプリット7"を購入して、さらにラトビア・シーンへの興味が強くなっていったよ。このスプリットはDarboukaレコーズ(http://pagesperso-orange.fr/darbouka/links.htm)というフランスのレーベルからリリースされている。この２バンドが発するエネルギーに圧倒された。僕には強烈なカオティックとあざとさのないサウンドに聴こえたんだ——心がくすぐられたよ。

初めてラトビアを訪れたのは、S.I.K.A.(スロバキアのバンド)がバルト・ツアーを行ったときだ。僕たちはリガにあるDEPOクラブで心底がっかりさせられてしまった。ここはパンクの聖地なんかじゃない、というのが最初の印象だった。再度訪れたときに、僕は地元のシーンの情報を幅広く手に入れようと思い、音源を探し回り、ラトビアのパンクやアンダーグラウンドの状況を知ろうとした。簡単なことじゃなかったよ。だが、インターネットがそれを楽にしてくれた。

後に、僕はラトビアを旅行で訪れた(教育者として働いていたサマー・キャンプで、ボランティアや教育実習の経験をするため)。キャンプの後には、リトアニアやラトビア、フィンランドなどのバンドが出演する"Roko Naktys"というロック・フェスティバルを見に行く計画も立てていた(このフェスにはリトアニアのオルタナティヴなバンド、BIXも出演することになっていた)。リトアニアも旅して廻り(これについては、また別の機会に書こうと思う)、リガとクルディガにも寄ってみた。ここはパンク・シーンが誕生した重要な街でもあるからね。



ラトビアのロックが発展したのは80年代のことだ。それまでは、ソビエト連邦の同時代のシーンの一部に過ぎなかった。**LIVI**、**CREDO**、**REMIX**、**PERKONS**、**DZELTENIE PASTENIEKI**などが活動していた。

パンク・シーンが動き始めたのは80年代半ばのことになる。最初に出てきたバンドの１つが、ポスト・パンクの**ZIG-ZAG**。そして、**INOKENTIJS MARPLS**だ。

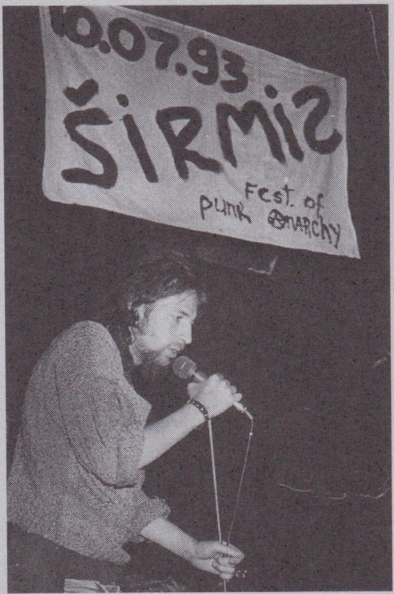
もともとINOKENTIJS MARPLSは1985年にヴォーカリストが**AKLA ZARNA**というバンドを立ち上げ、それが1987年にINOKENTIJS MARPLSとなった。音楽の面でこのバンドをジャンル分けするのは難しい…しかし、自分たちではハードコアだと断言している。ヴォーカルのDambisは**AMORALA PSIHOSE**でも活動している。このバンドも実際はパンクとは違うジャンルに入るのかもしれない…ジャズやJimi Hendrixの要素もある。Dambisいわく「俺たちのバンドは誰にも影響を受けちゃいねぇ。好きなバンドもいねぇし、みんな違う音楽を聴いている。自分たちが好きなことをやるだけ。カヴァーなんてやらねぇよ。歌詞も多岐に渡っている——社会問題、政治、哲学、おもしれぇこと、精神分裂。だが、歌詞は俺たちを取り囲む世界に対する、俺たちの考えを表現している」。INOKENTIJS MARPLSはラトビア国内ではコンサート活動も勢力的で、コンピレーションにも数多く参加し、作品のリリース数も多い。

音源:

『Speks no tetiem』〈2000年〉アルバム。テープで発表/2003年にはスイスのレーベル、Strongly OpposedからCD、ヴィニールでリリース。

『Bitit matos』〈2002年〉EP。400枚限定/Ezs sper soli records。

『Keras pie sirds』〈2007年〉CD/Gauja records。





90年代の初期になるとDambisはコンピレーションをリリースするようになる。後にシリーズ化された『ODEKOLONS』としてCDでコンスタントに発表。それはラトビアのパンクやオルタナティヴなシーンを刻み付けるような作品になった。12シリーズ作られているはず。最初のテープのタイトルは『EAU DE COLOGNE』と付けられている。MP３ヴァージョンはwww.tornis.lv/odekolons/index.htmで聴くことができる。

Dambisは『LATVIJAS PUNK/HC』コンピレーションもリリースしており、確かヴォリューム４まで出ていたように記憶している。パンクからグラインドまでのバンドを収録。ぜひチェックしてみてくれ。

www.myspace.com/inokentijsmarpls

IR BIJUSI MATI UN IZBIJUSI
(1990－1992/リガ)

Tornis recordsが初めてリリースしたバンド。当初、このバンドはPIXIESやWEDDING PRESENTに影響を受けているような、シンプルなギター・ミュージックを演奏してい



NGO（非政府組織）であるTornis recordsはインディペンデントなラトビアのバンドやアーティストをサポートしている。小さな音楽レーベルとして8年間存在した後に、NGOに登録した。1991年にスタートして以来、80作を超えるテープやCDをリリースし、ショーやフェスティバルの企画も行ってきた。ここに掲載するインタヴューを読んでもらえたら、Tornis recordsをもっと知ってもらえるんじゃないかな。インタヴューに答えてくれたのは、レーベルの創設者であり所有者であるJanisというナイスガイだ。リガにあるミュージック・ショップの前で待ち合わせし、彼のアパートでたくさんのレコードを聴きながら、音楽の話をし、2人で充実した午後を過ごしたよ。このインタヴューはその2ヵ月後にEメールを通して行った。

■Janis、簡単に自己紹介をしてもらえるかな。Tornisレーベルを始めた理由は何なの？Tornisとはどういう意味になるんだろう。なぜTornisと名づけたの？

「1989年の終わり頃かな、昔からの友達とロック・バンドをやろうとしたんだよ。ベースの弾き方を学び始め、3人目のメンバーを招き入れて、IR BIJUSI MATI UN IZBIJUSIを結成した。まず最初にやったのは、他の新しいアンダーグラウンド・バンドを見つけることだった。BEZ GREZNIBAS、TUKSA MUCA、SILVISなど、いくつか見つけたよ。昔からやっているバンドも見つかったな（INOKENTIJS MARPLS、他）。あの当時、本物のアンダーグラウンド・バンドは10バンドもなかったね。今は数え切れないほどいるよな…。その後、自分たちの力でコンサートやフェスティバルを様々な土地や会場（学校、カフェ、使われていない建物など）でやったよ。当時のラトビアには専門のロック・クラブはなかったからね。1991年の初めに、リガにある古くなった給水塔を見つけて、そこを練習場所にしたんだ。そこで、IR BIJUSI MATI UN IZBIJUSIとTUKSA MUCAは練習するようになったんだが、すぐに他のバンドも加わるようになり、把握できないほどの数のサイド・プロジェクトが生まれていったよ。このTornis（＝タワー）で数多くのレコー

た。後になって英語で歌うようにもなる。しかし、彼らは確かな手ごたえを手にする前に解散してしまう。リーダーはビジネスを始め、他のメンバー2人はTornisレーベルを立ち上げるとともに、数多くのアンダーグラウンドなバンドでも活動を続けている。
音源：
『PRIMITIVE PRIMATE』〈1993年〉コンピレーション・テープに収録の3曲も収録/Tornis records。

KARTAGA（1994－1996/リガ）
2人のバンド・リーダーによって結成されたバンド。その2人とは、実験的なロック・バンドの**TUKSA MUCA**のAndzonsと、グラム・パンクの**M.GVARDE**のEdgars Subrovskisだ。短期間でいいバンドに成長し、ラトビア・アンダーグラウンドの中でもベストにあげていいだろう。KARTAGAのサウンドはヨーロッパの音楽産業と結びついたインディー・ギター・ロックと表現できる。間違いなく1994年から1996年を代表する重要なバンドであった。



LIKSMA MASTURBACIJA（1991－1992）
パンクをぶっ放すアンダーグラウンド・バンド。Tornis recordsから、シングルを1枚リリースしている。

最近、Tornis recordsは様々なタイプのバンドの作品をリリースしている。例えば**IMANTS DAKSIS**。ラトビアのフォーク/サイケ・シーンを代表するバンド。人間的にも魅力的なやつらだ。www.myspace.com/imantsdaksis
BALOZU PILNI PAGALMIはインディー・バンドで、かなり人気がある。





ディングも行うようになったんだ。俺たちはDIYスタジオを作り、アルバムやデモを次々とレコーディングしていった。1995年まではお粗末な機材を使っていたよ…ソビエト製のマイク、8トラックのミキシング・デスク、オープンリール・テープレコーダー。後になってから、中古のスタジオ用マスター・テープ・マシンを購入したが、2001年までは2チャンネルで一発録りしてたんだ、ミキシングもしなかったよ」

■レーベルの主だったコンセプトは？

「DIYと音楽の記録だね。それで十分だと思うんだ。以前は友達のバンドでもどんなバンドでも、音源がないから音を知るのは難しかった…いい音を出しているバンドでさえ難しかったよ」

■これまでどれくらいリリースしてきているの？

「90年代の終わりごろまではテープ作品を作っていたよ。60タイトルほどだ。その後、CDRを出すようになって、これが約15タイトル。この10年は前よりも活動がにぶってて…家族もできたし、子供や勉強、仕事もあって…今は1年に1枚から3枚くらいCDを出しているよ。それから、過去の作品を10枚ほど再発する予定が控えていることをつけ加えておきたい…」

■気に入っている作品は？

「TUKSA MUCAの『Trajektorija:sapni-relejs』〈1993年〉。それと、BALOZU PILNI PAGALMIの1995年から1996年あたりのアルバム。KARTAGAの『Zens ar akmeni』〈1995年〉、VOICEKSの『Uz elli var iet ari ar kurpem』〈1996年〉、SIRKEの『603』〈1997年〉、DEPOの『Alepo』〈2002年〉、BERNIBAS MILICIJAの『Muzika dejam』〈2004年〉だね。もちろん、これから出るEMBRIJSとMAZIE SMIRDIGIE KOCINIの作品も素晴らしいよ」

■他にはどんな音楽活動をしているの？ラジオ番組のNABA、ギグなどは…？

「バンド（PLASTALINS、SARKANAIS OKTOBRIS、他）をやってる以外には、Tornisスタジオでレコーディングに携わったり、たくさんのコンサートやフェスティバルもやってきた。ファンジンも出したな（『DZIGA』〈1990年〜1993年〉、『TORNA ORGANS』〈1992年〜〉）。このリガでオルタナティヴなFMラジオも始めたよ（2000年に"KNZ"という番組名でスタートし、2002年からは"NABA"に変更）。INOKENTIJS MARPLSのリーダーのDambisと一緒に、ラトビアの音楽を取り上げるラジオ番組を、1週間に2時間放送しているんだ。毎週日曜の20時から22時までだよ（www.radionaba.lv）」

■ラトビアのパンク/ハードコアの歴史を簡単に紹介してもらえるかな…重要なバンドもあげてもらいたい。

「俺の知る限りでは、このリガに本物のパンク・バンドが登場してきたのは、80年代の半ばのことだ。ほんの数バンドだがね。最重要バンドはZIG-ZAG（最初はARPRACという名前だった）だけど、パンク・バンドというよりは、ポスト・パンク寄りだったな。彼らはグラム・パンクスみたいな服を着て、オフィシャルなコンサートでプレイしていたよ。2枚のアルバム（1987年〜1988年）もレコーディングし、あの当時、テープでリリースした。1987年に続いて登場したのが、INOKENTIJS MARPLS。彼らはパンクスだったが、音は本物のハードコアだったね。ソビエト連邦で初のパンク・バンドだと俺は思っている。今でも変わらずラトビアの最高のパンク・バンドだ。曲もいいし、歌詞もメッセージ性が強く、あらゆるジャンルの壁を凌駕している。新しいアルバムをレコーディングしたが、これがまた素晴らしいんだよ！1991年以降はたくさんのパンク・バンドが続々と登場してきたよ。だけど、昔も今もINOKENTIJS MARPLSを超えるバンドは現れていない」

■最近はどんな作品をリリースしたの？またこれからの予定は？

「気づいているだろうけど、Tornisは空白の2年間を過ごしてきたんだ。プロモ用のコンピレーションや"ラジオ・シングルス"以外にはこれといったリリースもなかった。まさに今、5枚のアルバムをリリースするところなんだよ。MAZIE SMIRDIGIE KOCINIとDUN DUN（ex-Embrijs）のデビュー作、BALOZU PILNI PAGALMIとBERNIBAS MILICIJA、EMBRIJSのニュー・アルバムをね」

このインタヴューはすでに3年前に行ったものであると警告しておかなくちゃならない。最新のTornis情報はwww.tornis.lvを見てくれ。

次号では、ラトビア西部の都市、クルディガ編へと続く──。



as photographer

MARTIN SORRONDEGUY

ex LOS CRUDOS〜現LIMP WRIST、N.N.、NEEDLES、そして偉大なるハードコア・レーベルLengua Armadaの主宰者であるMartin Sorrondeguy!!彼の写真展が東京と大阪で開催されます。
彼が写真家として活動していることを知らなかった人も多いでしょうが(…僕もBASEの飯嶋さんに教えてもらうまで知らなかった)、掲載している写真を見てもらえば分かる通り、臨場感溢れる見事な作品を数多く手掛けています。そんなわけで今回はバンド/レーベルではなく、"写真家としてのMartin"に焦点を絞ってインタヴューをしてみました!

■カメラと写真に興味を持った頃のことを教えてください。何かきっかけがあったのですか?LOS CRUDOSを始める前のことですか?

「写真との出会いはLOS CRUDOSよりもずっと前になるよ。10歳頃に初めてのカメラを手に入れた。ポラロイドカメラで、プレゼントしてもらったものだったね。写真を撮り始めているうちに、写真への興味がかきたてられていったよ。1986年に家族みんなで金を出し合ってくれて、クリスマス・プレゼントにキャノンAE 1を贈ってくれたんだ。すぐに自分のパンク・ライフはもちろん、心惹かれるものは何でも写真におさめたよ。アート・スクールに通うようになり、そこで写真を勉強したことで、技術を磨く助けになった。俺は今、ハイスクールの生徒に写真を教えているよ」

■最初に写真を撮ったバンドは何でしたか?うまくいきましたか?

「1987年だったとは思うんだけど、最初に撮ったバンドが何だったのかは思い出せないんだよな。もっと早くから撮り始めていればよかったんだけど。B.G.KやINDIGESTI、CHRIST ON PARADE、他にもたくさんの偉大なバンドを見ていたからね。でもシーンはどうしようもないほど暴力的で恐ろしかった。最初の頃はギグにカメラは持っていかなかったよ。ギグじゃ、殴りあったり強奪したりって光景をよく目にしていたから。カメラを持っていなくても、俺はもの凄く緊張していたよ」

■過去から現在まででベスト・ショットはどれでしょうか?

「最近の写真で好きなのはCHRONIC SEIZUREのものと、LIMP WRISTがポートランドのギグでプレイしたときに集まってくれた、大勢の観衆の写真かな。気に入っているよ。昔の写真かい?ZERO BOYSの写真も好きだな。いい写真が撮れたと思う。昔のパンク仲間の写真も気に入っている。俺の人生のある時期と俺が目にしてきたものを現しているものだからね」

■強く印象に残っている思い出は?

「そうだね、写真に関しては良い思い出と悪い思い出の両方があるな。時には心が忘れてしまったことでも、写真はいつだって記憶をよみがえらせてくれる」

■写真を撮る際に最も大切にしていることは?様々な撮影手順があるかと思います。

「重要なのは、1.せめてでもいいから、わずかな明かり。2.俺はステージがデカ過ぎるのは好きじゃないな。3.バッテリーをフルに充電しておくのは鉄則。4.熱いエネルギーのみなぎるバンドと客はどんな場合でも大事。退屈なバンドのライヴは写真も退屈になっちまう」

■ちなみにカメラは何を使っていますか?

「今はニコンD50を使っているけど、別のものにしたいと思っていて、将来は新しい機材を手に入れるつもりでいるよ。また、昔使っていた古いカメラを使ってみたくてね。



DIRT

CLOROX GIRLS



DEAD SILENCE



WARCRY



DESTINO FINAL



GERM ATTAK



ISTERISMO



KRIEGSHÖG



感度のいいフィルムの3200がまだ製造されているなら、これで撮ってみたいんだ」

■日本で写真展を開くのはどうやって思いついたのですか?楽しみにしています!

「いつもサポートしてもらって、本当に幸せだよ。日本では俺はバンドとしては受け入れられているけど、写真を撮っていることを知らない人はたくさんいると思ったんだ。写真、アート、音楽、そのどれもが俺の人生にとって、常に重要なものだった。音楽の他に、視覚的なものに対するスピリッツもみんなと共有したくてね。日本で写真展とショーを企画してくれることになった、Toshio IijimaとPunk&DestroyのShinにサポートしてもらえて幸運だよ」

■好きなハードコア/パンクの写真家はいますか?僕はJack Barfield(アメリカ)とMateus Mondini(ブラジル)の写真が好きですね。

「好きな写真家の作品は本当にたくさんあるよ。昔の写真家ならMurray Bowels、Philnflash、Anna Summa、Marie Kanger Born、Jenny Lens、あげきれないね。最近の写真家では、Mateus Mondiniは尊敬すべき写真家だね!Larry Wolfleyも素晴らしい作品を撮っている。Chrissy Piper、Karoline Collins、Christine Demitriもいい写真家だ。もちろんChristine Boartsはニューヨークのスクワット時代のバンドやシーンをドキュメント写真に残すという、素晴らしい仕事をしているよね」

■映画監督もやっているし、もちろんバンド、レーベル、それに毎日の仕事もされていますね。かなり多忙でしょう。様々な活動をしているあなたのモチベーションとは？

「時々、自分にも同じ質問を投げかけることがあるよ。ハイスクールの教師として働き、レーベルのLengua Armadaもやっている。バンドもあるし、わずかな時間だけど他の生活もある。パンク、それにパンク・バンドやアーティスト、写真家など、何か自分で動いている人たち、パンクや人生に情熱を注いでいるファン、それらに強烈な刺激を受けているよ。素晴らしいね！生み出された作品からも、何かを作り出そうとしている人がいるっていうのを知ることでもインスパイアされるし、もっとやる気が湧くエネルギーを与えてもらえるよ。この世界は、俺にもみんなにも刺激を与えまくってくれるクレイジーな場所さ。あとは、批判的に考え、クリエイティヴなことに敏感であり、時には音楽やアートに異論を唱えることを恐れない態度は必要だと思うな」

■ところで、2008年に行ったLIMP WRISTの日本ツアーの印象を教えてください。LOS CRUDOSで日本に来たときとは、何か違い（パンク・シーンなど）を感じましたか？

「LIMP WRISTの日本ツアーは素晴らしかったね!!!懐かしい友達にも再会できたし、新しい友達もできた。充実した良い時間を過ごせたよ。新しいバンドも目撃できたし、日本のみんなと俺たちがやっていることを共有する機会も得た。LOS CRUDOSのツアーも俺には大切なものだったよ。未知の国と文化に足を踏み入れたんだからね。連絡をくれていたみんなとの初対面の瞬間でもあったし。本当に特別だった。日本ツアーはどれも決して忘れない」

■このインタヴューはあなたの写真がメインですが、N.N.とNEEDLESについても聞きたいです。両バンドの結成についての話も聞かせてもらえますか？今後の予定も含めてお願いします。

「N.N.とNEEDLESは俺がメンバーとして活動する新バンドなんだ。N.N.はLAで何回かギグをやっている。LAロウ・パンクスのTUBERCULOSIS、RAYOS X、ATAQUE DE NERVIOS、KRUEL、LA VOZ、POLIZKITZO、SICKEM、それにラティーノ・パンク・サイコ・スタイルの多くのバンドともね。俺はLAのバンドが好きだよ。ここにはたくさんの友達がいる。だからここでギグをやるのは素晴らしい！N.N.は今ちょうどLPを作っているところなんだ。NEEDLESのほうは、攻撃的なハードコア・パンクをプレイしていて、もっとギグをやるつもりでいるよ。うまくいけばレコーディングもね」

■LIMP WRISTは解散したんですか？もし解散しているなら、差し支えなければ理由を聞かせてください。

「今は休止しているところで、解散とは違う。再始動するのがいつになるのかは、自分たちでもわからないんだ」

■日本の読者のみなさんにメッセージをお願いします。ありがとう！

「インタヴューとサポートに感謝したい。パンクの写真を準備している今このとき、また日本を訪れることを考えて、とても興奮しているよ。まだ会ったことのない日本のみんなに会えるのが楽しみだし、俺の写真をみんなと共有したい。ギグでみんなの写真を撮りたいと思っているんだ。だからもし俺がギグに現れて、写真を撮っていいか聞いたら、最高の顔を撮らせてくれよな。楽しもう。グラシアス!!!」

Martin Sorrondeguy
"Twisted Visions" Photo Exhibit.

東京
6月22日（火）～27日（日）
会場：中野MOONSTEP BAR SPACE
16:00～23:00　入場無料
問い合わせ：BASE 03-3318-6145
写真展を記念して期間2日前！から1週間（6月20日～27日）！HARDCORE/PUNKのライヴをMOONSTEPにて開催！詳細はMOONSTEPサイトにて！！
http://www.livehouse-wall.com/moon/top.html

大阪
6月30日（水）～7月1日（木）
会場：アメリカ村HOKAGE B2F BAR FLOOR
入場無料
両日共に、写真展は14:00　OPEN～ライヴ終了まで。両日共に、PM7:00よりHARD CORE PUNK SHOW！（B1F LIVE FLOORにて、入場料未定）
問い合わせ：
PUNK AND DESTROY 06-6213-5773

今回の写真展に合わせMARTINのPHOTO BOOKが発売！各会場にて先行販売！



CAZU (C) x SAKATARUIDE (SR)



サカタルイードの「とびっきり対談・タコ部屋編」

今回のゲストはORdERのCAZU(カズ)です。彼とは十代からの付き合いで、前号で対談したKATSUTA君に一緒にディズニーランドに連れて行ってもらった仲間です。…とはいえお互いのコトはあまり知らないまま「生意気なヤツだな〜」くらいにしか考えておらず(笑)。しかしORdERに加入してからの革新的な音色はギタリストならずとも興味をそそるはず。というワケで文中には登場しませんが東名高速のサイドシートでゲロを吐きまくる浜松キャットアグリーのケースケを引き連れ(笑)、行ってきました身を切るような暗闇のど真ん中in名古屋CITYっ!!

SR「カズは元々出身はドコですか?アレ(昔アコムプライスのキンちゃんとカズの引っ越しを手伝ったコトがある)は八王子?あのタコ部屋は」
C「あ、あれは青葉台だけど、元は町田。町田生まれ」
SR「町田生まれの町田育ち?」
C「うん、そう」
SR「最初にさ、ガキの頃ね『バンド・サウンド』って言うのかな?意識したのっていつ?つ〜か誰?」
C「子供の頃?」
SR「うん。TVから、とかじゃない?やっぱ」
C「あ〜…『チェッカーズ』かな(笑)?小4の頃」
SR「あぁ、そ〜…なるかもね(笑)」
C「髪立ってたりとか、柄のパンツとかさ〜」
SR「バンドの基本が4人とかってのも最初わかんないもんね」
C「そ〜だね」
SR「んでそ〜いうモノを意識してさ、すぐに自分は『ギターやろう!』と思ったの?」
C「いや、どっちかっつ〜と…なんてのかな…小学校の時ずっと絵画をやってて、6年間教室に通ってさ中学生になってもまだやってて、そのまま絵の学校行っても良かったんだけど…何かギターもイインじゃねぇかって思えてきて…ギターにしよっ!って」
SR「へ〜っ!」
C「変換になった時ってのはやっぱりパンク・ロックに出会ったトキ!」
SR「絵をやってて、それでパンク・ロック。何のバンド?パンク・ロックってもさ」
C「ん〜…色々あって(笑)そ〜なってくるとウチのタコ部屋的状況も話さなくちゃいけなくなるわ(笑)」
SR「イインじゃん?話しても(笑)。カズって兄弟いるの?」
C「いるよ。弟とね、妹がいる」
SR「へ〜、知らなかった」
C「中学の頃、家庭事情で何かまぁその〜『タコ部屋』におとされて(笑)、暴力的虐待ってのがそこにあって。会社の飼ってた犬も虐待にあってて。チンピラが酔っ払って帰ってくると虐待される。んでオレはそれを守ろうとスコップとか持って戦ったり。それを今度上のヤツラが『気に入らない』っつってまたオレがシバかれたりとか」
SR「あ〜」
C「そ〜いう環境の中でちょっと不良みたいなヤンキーみたいなコトもしてみたんだけれど、まぁそれも『強ければ勝ち』みたいなカンジだし。まぁそれはそれでイインだけどさ、そんなトキ自分の中に『パンク』てのが現れてさ。周りはさ、ボウイとかガンズとかでさ、友達の方が音楽聴いてて、オレもCD屋に連れて行ってもらったトキに…『パンク』って言葉に何か尖った憧れみたいなのがあって」
SR「ヤバい的な雰囲気でしょ?」
C「あったあった。んで連れがガンズアンドローゼスが新譜出したの買ったら5曲で￥2500くらいしたの。当時のオレにしてみりゃ高ぇな、と思って。だけどその新譜コーナーの横にさ、ラモーンズマニアってのがあって。肩書とかに『これぞニューヨーク・パンク!』でジャケットも尖ってカッコ良くて!30曲入って￥1890だぜ(笑)!」
SR「コレは分かりやすいや、と思って(笑)?」
C「そうそう、それからだわ!ラモーンズからだ!」
SR「それ聴いてさ、最初どう思った?」
C「なんかスカッとした!それに何かそれよりも尖ったモノが色々さライナーに書いてあって。日本にはこんなバンドがいる、とかさ。それでグレートパンクヒッツとかあ〜いうのも結構再発してた時期だったから…すぐにたどり着いたけどさ。そこでG - ZET。分かる?」
SR「知ってるよ。インストの」
C「そう、インストゥルメンタルなんだけど今で言うループみたいな?ギター・サウンドで。スゴいパワフル、迫力を持った。それがあの、さっき言った『絵』の!感覚と合致したっつ〜か、こ〜いう路線だったらオレやれる!みたいな」
SR「あ〜、そうなんだ〜」
C「そっから世界観がある音楽がたくさんあるのを知った。ハードコアの。日本のハードコア、特に初期は憑依っていうモノとかも、ホントに体現してたと思うから。そっから創作活動、作曲活動」
SR「しっくり来たんだ?自分の中に」
C「そうそう、世界が産まれるんだ!じゃないけどそんな風に、曲を作るとかリフを作るとかがさ、止まんなくなっちゃって」
SR「それが絵を描いてるのと同じくらいの楽しみ、つ〜か感覚だったんだ?」
C「そうそう、そこでリンク」
SR「あ〜、そっか〜。…オレはさ、例えばヴォーカルだからかな?他のバンド見たり聴いたりして歌が上手い下手じゃなくて何か、ピンと来ないっつ〜か、あんじゃんそ〜いうの。そ〜なったらもうダメなんだわ。だけどG - ZETとかは最近聴いて、やっと最近『スゲぇカッコいい』ってやっと分かるくらいの音楽なんだ。元々音にこだわりは無いからさ…んでカズは今でも自分以外の音源とか聴くトキは…やっぱギター・メインで聴くの?」
C「ん〜…と〜…そんトキの流行りっつ〜か…今は結構ベースを聴く」
SR「え!ホント?何で?」
C「最近はエレクトロ・ミュージックをよく聴くけど、ダブとか。低音が進化した音楽?デシベルが強かったりとか」
SR「あ〜、確かにそうだねぇ」
C「それはその場所…なんつ〜のかな、クラブの音響じゃないと家のレコード・プレーヤーじゃ聴けない音域に入ってる、クラブ・デシベル?下のウーハーとかによって初めて聴ける音とかあって。そこがゴリゴリだったら新鮮だしカッコいいからさ」
SR「へ〜!」
C「硬質なビートとぶっといベース、みたいな」
SR「うんうん」
C「全体的に捉えられてるか分かんないんだけどそのカッコ良さは知ってる」
SR「その、何だ、あの…バトル的な聴き方もする?あ〜ココ違うんだよな(笑)みたいな」
C「そ〜だね〜、最近聴いてるのは…ベースが表情つけててギターが入ってないのが多いから」
SR「そっかそっか」
C「だからバンドだとギターが入ってるから『そうじゃ無いんだよな』って思うかもしんないけど、(ギターが)入ってないから。ギターのフレーズ入れていけるっつ〜かその…上奏訓練。そこに相手も居ないからバトルにもならないし。好きなバンド聴いてると、あんま聴

きすぎるとその『バンド』を目指してしまうから。自然な事だけど」

SR「あぁ、そうだね」

C「消化すればイイと思うんだよね。いわゆるミクスチャー・ミュージックってのはやっぱりアメリカから生まれてると思うんだけど、ミックスジュース?野菜をさ、砕いて要素をミキサーしちゃうよね」

SR「あぁ、要は吸収して上手いコト消化して一個の感覚にすると」

C「そう。只さ、その消化って部分があまりにもミクスチャー過多になっていくと、なんつ～のかな、おばあちゃんとかが食べ物は『50回噛みなさい』って言ってたのが正しいっつ～の?咀嚼率が下がるんだ。簡単にアレもコレも取り入れようとして3回くらいしか噛まないで…消化ってモノが上手く出来ない?次から次へ取り入れようとしてさ」

SR「表面的に…まだ自分に馴染んでない状態でミクスチャーというカタチを出しちゃってる、と」

C「そう、あからさまにジャンルがプラスされてるだけの簡単な影響に?なってしまうコトも多いんだよ」

SR「あぁ、言ってるコトは分かる」

C「オレもあんまり枚数は聴かないんだけど『好きだ』ってモノを100回聴くとか200回聴くとかさ、の方がさっきも言った『咀嚼率』?どんどんどんどんカラダに染み渡っていってそ～いう軽くないトコロの方が自然な影響となって、そうなっちゃうみたいなさ、表れるみたいな」

SR「うん、分かる分かる。自分の一部になっちゃってね」

C「その…オレが思うのは『和える』って感覚?ミクスチャーってよりは日本人の言う『和える』って素材を大事にする感覚。空気を入れながら混ぜ合わせてさ、その感覚はまたミクスチャーとは違うと思うんだ。素材とは自分達で。ヤバいモノが沢山ありすぎて色んなモノ消化しようって慌てるよりも好きなモノどんどん咀嚼していって」

SR「そうだね」

C「自然に自分が、カラダに影響が出ちゃうくらい好きなんだからさ(笑)」

SR「うん(笑)」

C「それが増えて行けばまた…ハッピーだし!」

SR「いずれそれが『個性』になっちゃうもんね。自分で意識しなくてもさ」

C「そうそうそう、自然に」

SR「カズはさ、歌詞とか言葉も気にしたりすんの?例えばコースケに対して『何でサビでこの言葉が来るの?』とかさ」

C「う～ん、オレら(ORdER)の場合はさ、まず言葉があって…ってこ～いうの話すのは初めてだな(笑)」

SR「(笑)」

C「言葉ってモノがまず最初にあるからさ」

SR「『言葉』って『タイトル』?」

C「タイトルになるかキーワードになるか?次のステップで違う言葉になっていくか、確定していくのはコースケの領域で、分かんないんだけど」

SR「きっかけとして?」

C「そう。最初にまだ楽器も何も持たない状態で。それはオレが喋ってコースケが『それだ!』って時もあるしその逆もあるし、ネ」

SR「イイね」

C「4人で下らないハナシをしながら、キーワードがあって。繰り返すうちに上手く当てはまるようになってきたり。結果、詩の中から『皮肉』だったり『肯定』だったりが見えてきたりする」

SR「あ～、もう分かってるんだ?気にする前に。『この辺の感情だ』とか」

C「そうそう、そうなんだよ(笑)」

SR「すげぇ、でもいいメンバーだね～!」

C「うん(笑)」

SR「ハナシ…戻るけどさ、カズ、町田でしょ?BLAZEやってたじゃん?アレって最初のバンド?」

C「ちゃんとしたバンドは…そう、あれが最初」

SR「ブレイズってドラムをソルティックの人がやってたじゃん?」

C「あ～、あれは後期だよ。最後の方」

SR「ブレイズってドコのバンドだったの?」

C「町田だよ。まだオレも町田でしか遊んでない頃で、スタジオに募集の紙貼ったりしてメンバー集めてさ。町田にそ～いうハードコアは居なかったから。相模原とかには居たんだけれど」

SR「へ～。ブレイズの次は…何?RAGs.CONCLUDE?」

C「そう。そっから空いて、スティックス(STICKS IN THROAT)。ラグスコンクルードまで作曲99%オレで。…何か違うんだなって感じちゃって」

SR「ラグスコンクルードが活動的になった時は『これはカズが賭けてるな!』って思ったけどね」

C「それをねブレイズん時と同じやり方をしてしまったから、また同じコトになる、と思って。まだイニシアチブを握るには早いって。人間てモノを分かって無いっつ～か…曲作るばっかでさ。そ～いうのがあったからちょっと外したい、って気持ちから沖縄三線を持ちまして(笑)」

SR「そ～なんだ!個人的に?」

C「個人的に。まあ実際にはセッションとかやったくらいで、まぁアレだったけど…。それで、でも1～2年は取り組んでた、っつ～か。それでライヴはやってなかったんだよね」

SR「うん。沖縄三線やってさ、教訓になったコトってのもあんの?やっぱり」

C「基本沖縄民謡は一個も弾けてないから。その頃シドバレット時期のピンクフロイドをね、初期の!今でもファースト・パンクじゃね～か、って思ってるくらいだからさ。そ～いう即興みたいなのをやるにあたって、沖縄三線みたいな硬質な音が良かった」

SR「あ～、音だ?」

C「そう、いわゆるその音で『即興をやろう』っていう。そしたらリズムもアレはあるし」

SR「そ～だね」

C「そうそう。それであの北海道のにぶたにのお祭り(アイヌモシリ)に行ったわけ。んで朝の5時半くらいにさ、まだ練習中の身だからステージ立つとか考えてなくて。川下に向かって弾いてたらさ、下からさ、あの…インドから帰ってきた、ジャジャ君が…川下から現れて突然(笑)、それで手にインドの三味線楽器みたいなの持ってて…、『オマエの音、向こうで聴いてずっとセッションしてたんだよ。オレばっちりだからもうステージやろう!』なんて言って!あと、影山クンてパーカニッション、3人で。アイヌモシリに居る間は即興ライヴみたいなの何ステージかやってさ。それがホント初の『即興体験』っ!ひとりじゃない」

SR「へ～」

C「一緒になんか引き出すっつ～かさ、ジャジャ君は語り部で、語り部というカタチで歌にしてさ。それを機に『オレもバンドやろっかな?』なんてさ、ちょうど夏の終わりだったかな?ライヴでも行ってみよう、と。確か…ロフトに何かを観に行ったと思うんだけど、同じ日にさ、同時に2つのバンドに誘われるんだ。それがスティックスインスロートとサカタがやってたZIKKKKEN(ジッケン)。誘ったコトあるでしょ?」

SR「誘った」

C「そう。確かカオスUK来てたんかな?それでミキオ君とサカタから同じ日に電話がきて…迷ったわ(笑)」

SR「悩むね、それは(笑)」

C「そん時は(笑)!」

SR「…それでスティックスやって?」

C「それは…そう、さっきのハナシに繋がるんだけど『自分でリーダーをやる』ってバンド?は自粛で、少なくとも10年くらいは修行の身で行こう、と思ってたから、それでこう、そこはスティックスを選んだっつ～かさ。それは『今だから』ってやつだけどさ。どっちにとって自分が居なけりゃ活動できないかってコトも考えて。サカタは音楽のイメージがはっきりあって、オレが居なくても他が弾ける、やれる。で、スティックスは曲作りからの状態で、曲なしでスタジオ入ったりしてたから(笑)。オレがやろ～っ!みたいになって」

SR「うん」

C「まぁ結果それが合ってた、っつ～かね」

SR「そうだよね」

C「だからそうやってみんなと曲を書きながらやる、っていうのが新鮮で。んで何かそうしてスティックスで今のギター・スタイルを確立した」

SR「そうだね。スティックスの途中くらいから『あ、カズってこういうギターなんだ』って。それまではやっぱりチェルシーとツルんでたり、その流れ?のイメージが強かったのね、オレん中では。だけどミキオ君のバンドじゃん、要は。そこにそ～いうギターを入れてくるってコトは『カズのやりたい音』ってのも逆にハッキリしたんだよね」

C「チェルシーと遊んでた時の感覚?ってのがさ、どっちかっつ～とギターの細かいコトとか話し合ったコトはそんなに無くて、宇宙観を共有してる、ってのがオレの…2人の中にはあって」

SR「あぁ」

C「感覚だからさ、まぁイイんだ、っつ～ハナシ。みんなが同じモノを違うトコロから見てるから。例え一緒に見ててもさ、自分の視点を得るヒントをくれた、っつ～か。自分の手法?トーンて言うのかな」

SR「例えばジャパニーズ・ハードコア、とかUKの影響を受けたバンドとか、そういうんじゃないじゃんオマエのギターって途中から。そんな部分で『抜けた』っつ～か、閃いたカンジはある?」

C「うん。あと…その頃はやっぱり意識したのがジギャクとチェルシーってのがあってさ」

SR「やっぱそうなんだ」

C「うん。両方のエッセンスを貰ってた気がする。そんなシーンの中でオレが見てたのは『2人がやってないコトをやるんだ』ってのがあって」

SR「でも今は完全にそうだよね、そうなってるよね」

C「コレはやんね～っしょ?みたいなトコで。例えばストラトでJCで鳴らす、とか。例えばライヴで全バンドが同じギターのトーンでやっ

てるよりは、1バンドがディレイ入れたり、カラッとコーラス掛けた、オーバードライブ・サウンドなんかが効果的じゃないか?とか、そ〜いう引き算の考え」
SR「オレ達の頃っつ〜か…何かこの世界の先輩っていまだにスゲぇヒト達ばっかでさ、だから『自分だけに出来るコトって何かな?』って真剣に考えたオレらくらいのヒト、多いかもね」
C「オレ達が見てたのってDEATH SIDEにしてもアサイラムとかさ、繋がりがあって更に『インディーズ・シーンで一番カッコいい』みたいなさ、通用してるカッコ良さ?今メジャーにいるバンドも元々はその辺に影響受けていたりさ」
SR「うんうん。カズはさ、ORdERに入ってどれくらい?」
C「うん、と5年くらいだね」
SR「ORdERでの『これがオレだよ!』みたいなのってある?ポジションて言うか、さっきも話した『音色』みたいな」
C「う〜ん…そうだなぁ……教えてほしいね(笑)」
SR「(笑)!やっぱライヴの後で『(カズの)ギター凄いネ!』って声はやたら耳にするし…だから何にこだわって今みたくなったんだろう?って」
C「ん…今思うのは『心技体』みたいな、トコロで。ヒトとやってると色々なせめぎあいみたくなったりするけど、バンドってそれぞれ役割があるでしょ?何気に技術ばっかり行ってて心の部分がおろそかのヒトも居るし…その時々と環境で学ぶべきモチベーションが違ったりさ、だからオレが最近感じてるのはその心技体の『心』の部分、無視して生きてきたな〜、って(笑)」
SR「(笑)」
C「自分と時間をその…ギターに投入すれば?何とかなるんじゃないかって。人間性とか振り返るコトが少なかった。他者への理解というか。やっぱりそれもさ、音楽の『共鳴』て考えが当てはまる。って言うかぶつかり合えば『摩擦』。それも含め」
SR「うん」
C「イイ音同士はさ、ね。例えばサカタの声でも、あれコーラス掛けてんの?」
SR「あぁ、ディレイとかディストーション、所により」
C「声の中でもさ、サカタの声はコーラスが出来てると思うんだよ。リトルミラーズの途中から突き抜けた、って言うか、声が。あぁいう『トーン』?てのを得ちゃうと『水を得た魚』じゃないけど気持ちイイの知ってるから。そういうのが『共鳴』を呼ぶと。心に響く、聴くのは『心』だから。鳥の声とかはそんなに大きくないのに響くじゃん?あれは基本、求愛行動であってまず『伝えたい』って気持ちがあるから」
SR「あ〜、気持ちね」
C「その伝えたい、って気持ちが『共鳴』を呼ぶ鍵で。おのずと自然の音響を活用するんだね、自然のトーン。そうするとヴォリュームより全然大きく聴こえる。痛々しい音は痛いし、だからと言って言葉で統率すると…背徳が生まれて」
SR「うんうん。じゃあさ、もっとこうしたい!ってのとかある?カズ自身も、あとコースケやタン、しょうちゃんに対しても」
C「仲良くなりたい(笑)。今、しなやかって言うか、全体的に伸びてるカンジがあって。より感覚的にナチュラルに、削ぎ落としたカンジに…『もっと』で言えば、その立ち位置が入れ替わりするような…廻ってくれれば面白いネ」
SR「名古屋に越してきて、ど〜よ?上手くやれてる(笑)?」
C「多分(笑)。パンクスも、クラブ系も、悪い人達も(笑)…個性的な人間が友達になって、ライヴ・セッションとか。そういうんでライヴハウス行くコトが多いんだけど。東京とかじゃ自分の環境ではあり得なかった」
SR「東京はヒトが多いもんね」
C「それぞれがさ、確立してんじゃん?だからオレみたいな雑食なギターはさ、そういうトコでやってみて『おぉ〜!』ってなったり(笑)、『え?ORdERのギターなの?』みたいな(笑)、出会ったり出来て楽しいね」
SR「イイね〜」
C「レーベル(vitriol muse)ってのも全くひとりで立ち上げた訳ではなくて。影で『やっちゃいなよ』って支えてくれてる同士がいて。そうやって応援してくれるヒトにもっと貢献出来たらイイな、と思ってる。創作意欲に溢れる人達の『シーン』だね」
SR「浜松もいいバンド沢山あるけど『何とかしよう』って頑張ってるヤツは明らかに分かるもんね。そういうのを端から見ていて得るモノもあるし、気持ちも知ってる。『解るよ〜、そのカンジ!』みたいな、それで繋がっていく部分ってのは絶対にある」
C「音楽が進化してる、ってのは世界中でのコトだから。もっともっと、って自分から出て来てるモノは自分が無視したら終わりだから。生まれないからさ。時にはふんばってでもスタートしなきゃいけない」
SR「そうだね」
C「始まっちゃえばさ、後は創意工夫して…良くするだけ?そういうアティチュードっていうか『姿勢』が音楽ジャンル問わず意識として。ちょっとサカタさ、これ聴いてみて」
SR「(機械を指さして)これ何?」
C「レコーダー。日々ね、録音ボタンが押されてんの」
SR「聴いてイイの?」
C「触りだけちょっとさ、聴いて貰いたいから。次回作」
SR「イイよ(と言って手渡されたヘッドフォンを装着)、はい」
C「……(PLAY!)」
SR「…このさ、水がうねってるような音あんじゃん?これ打ち込むの?」
C「それはね、水の音が入ってるワケじゃないんだ」
SR「ペニャペニャ鳴ってる音とかさ、何で操作すんの?」
C「う〜ん…と、まぁエフェクターだね」
SR「……(しばらく音源を聴いている)…スゴいな、カズっ!」
C「そう?」
SR「うん、スゴ〜いっ!!」
C「マジで?イエイっ!」
SR「これ全部ひとりでやってんの?」
C「そう!」
SR「…(まだ聴いている)…スゲぇ…。(ここでヘッドフォンを外す)何かさ、オレ達の作る…特にオレは歌だからさ『工程』があんじゃん?そういうのじゃ無いもんね」
C「うん。違うかもね。そっち(Equal=8.cazu/juliファースト音源を指さして)はまた音的にこれとは違くて」
SR「へ〜」
C「何か絵でいう印象派のような小作品集みたいなカンジでさ、タイトルごとに手法も全部…自分がやりたいコトやりながらいこうと。だから連なっていく内にもっと面白くなってくと思う」
SR「逆に『こんだけのコトが出来るヒトだからORdERであんだけのギター弾くんだ!』とは思うけどね」
C「いやいや(笑)。ただ、活かしていく機会にしていけたらなって」
SR「ちょっとね…ビックリしたわ(笑)。ツアーの帰り道とかずっと聴いていたいもんね」
C「お〜、嬉しい(笑)」
SR「ORdERはさ、リリース予定とかある?」
C「うん、3日後くらいにEP録音するんだ」
SR「HG(ファクト)?」
C「うん、HG。上手くいけば夏前にはリリースできるかな、来月には終わるから」
SR「オーライ、つ〜か今回マジいい話っ(笑)!ありがとうカズ」
C「いやいや、あそこんトコ(?)はカットしてね(笑)」
SR「OKOK(笑)」

いかがでしたか?あんなにメチャクチャだったブレイズのカズが今では素晴らしい『音楽人』にっ(笑)!ボクはエイプリルフールに(これを書いているのは4/2)早起きして「浜松Gサイドにて石田純一の出演が決定!90分はトークで20分は歌うらしいぜ!」なんて嘘メールを40人の仲間に送信した…までは良かったがその返信に対してまた返信、返信、…気づけば150件オーバーで右手親指の指紋が消えそうデス(涙)。しかしキヨシ(キャットアグリー)とタクミックス(ドレックス)はペロッと騙されて馬鹿だね〜。あんな2人が引っ張っている浜松ロック・シーンは『平和』です(笑)!いつもありがとう、ピース!

VITRIOL

vitriol muse record
http://www.myspace.com/vitriolmuserecord

VEKTOR
5月15日(土) 初台WALL
「SHADOW THE PIPER12×SEASICK JAPAN TOUR 2010」

http://vektor.moryou.com/

WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.5 Germany

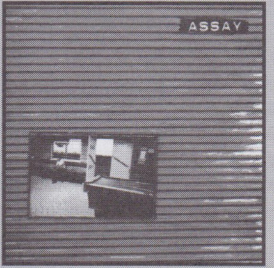
TEXT:
Yuki SP(Y)/WSオニギリ(O)

AGE/ST



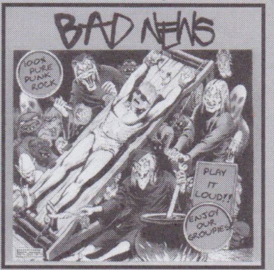
全てはここから始まった。90年代ドイツのハードコアからエモーショナル・サウンドへの変遷時期を最前線で突き進んだバンドAGE。1stリリースが2枚組EPだなんてオシャレ過ぎます。ヴィーガンSxEを掲げた熱く物悲しい情熱のエモーショナル・ハードコア・サウンドは後のドイツのシーンに多大なる影響を与えました。この他にLOVE RECORDSから12インチをリリースしており、そちらも重要作品。(Y)
(EQUALITY/EP-05)2xEP 制作年不明

ASSAY/PISSCHRIST



RUSTY JAMESにAGEのヴォーカリストだったHAUKEを再度迎え、結成されたのがASSAY。この7曲入りLPが唯一の音源。AGEよりも一層メロディアスに、より一層スピーディーに掻き鳴らされるサウンドは人を惹きつける力をあり余るほど備えており、さすがとしか言いようがありません。MIGUELがメイン・ヴォーカルをとる曲もありRUSTY JAMESファンも必聴。(Y)
(LOVE/LOVE#13)LP 1997年

BAD NEWS/ST



彼らの作品の中でも70'sっぽくない作品で、このシングルはポップ・パンク・ファンだったら国を問わず撃沈の内容でしょう。全4曲ともに捨て曲なし。疾走感のある曲、泣きのポップ・パンクな曲、CROWDをも思わせるオーオー・コーラスばっちりなロッキンなポップ・ソング、全員大暴れ間違い無しな曲と1枚で4度うれしい作品。333 x UP & DOWNシリーズの中でも個人的に大好きな一枚ですね。傑作だと思うんだけどな。見付けたら買いです。(O)
(INCOGNITO/INC.074)7" 1995年

COLOGNE CITY ROCKERS/ST



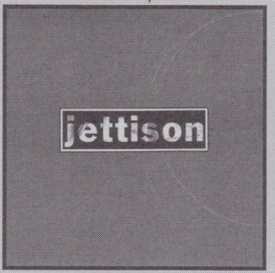
見る度にFUN FUN ATTITUDEの1stシングルを思い出してしまうジャケットを見たらご用心。後にYETI GIRLSに加入するメンバーが率いる3人組の4曲入りシングル。中期WOMBELSタイプのノリノリメロディック・サウンドは後に大輪を咲かせるのには十分な栄養分を秘めています。SCRAP YARDとのSPLIT LPも91年にリリースしています。(Y)
(COLOGNE CITY ROCKERS/PF)EP 1992年

DIE BONNER PRÄSERVATIVE/LASS ES SEIN!



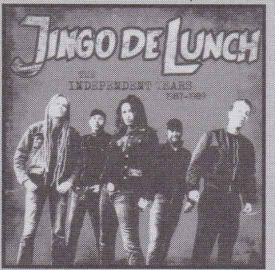
WOMBELS、WALTER ELFとAWUP! EPで競演していた4人組による6曲入りミニ・アルバム。タイトル曲はビートルズのLET IT BEのドイツ語カヴァーなのですが、ドイツ特有の全員ヴォーカルに、中学生の時に友人の家で遊び半分でギターを掻き鳴らしているようなテンションで見事なまでにビートルズの面影を消してくれています。この他に単独EPもあり。ヴォーカルは現在DIE WELTENRETTERというバンドで活動中。(Y)
(HEKTIK/HR006)LP 1990年

JETTISON/THE NEON LIGHTS



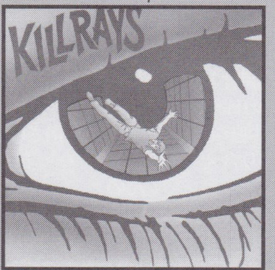
ライヴハウスで出会ったドイツからの留学生に強引に買わされたこの7"も今となっては、彼に感謝しています。はっきり言ってエモなんですが、JAWBREAKERのDEAR YOUや、ASAHIスーパードライのCMで使われる遥か以前のJIMMY EAT WORLDを思わせる極上のメロディーを持つバンド。悲しいんだけど何故か力が湧いてくるそんな傑作シングル。知ってるのはこの7"とコンピに収録されていることくらい。他に音源出ているんだったら教えて!(O)
(RENTAL CAR VACATION/RCV001)7" 2000年

JINGO DE LUNCH/THE INDEPENDENT YEARS 1985-1989



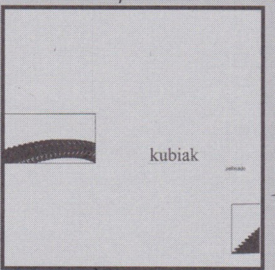
ハードコア・ファンに人気の高いドイツのガール・ヴォーカル・メロディック・ハードコア・バンド。ロックンロール色も結構あります。かなりクセのあるヴォーカルだけど、はまってしまうとどっぷりな感じです。ノルウェーのLIFE...BUT HOW TO LIVE IT?とサウンド的にはかなり近いのでは?アナーコ・メロディック・ファンに支持されているのも頷ける。こういうバンドがメジャーに行けちゃうってドイツってかヨーロッパはすごいな。これは初期の音源をまとめた編集盤。(O)
(BOSS TUNEAGE/BTRCRS029)CD 2008年

KILLRAYS/ST



最初に言います。これはパンク界のアルフィーです。ドスの効いたヴォーカルのくせに歌が上手く、メタリックな泣きのギター・ソロで幕を開け怒濤のスピードで突っ走る正直メロコア。なんだーけどーラストのパートはアカペラで、しかもめちゃくちゃ上手いユニゾン・コーラスで決める部分はアルフィーですよ。目をつむって聴くと目の前に高見沢、桜井、坂崎が現れる怪曲です。普通のメロコア嫌いな方もこれは聴いてみる価値ありです。(O)
(GET HAPPY/HAPPY004)7" 1992年

KUBIAK/SELFMADE



もし「RUSTY JAMESに一番似てるバンドって何?」と聞かれたら「KUBIAK!」と即答します。90年代ドイツ・エモーショナル・シーンを地で行く悲しみと青さを兼ね備えたサウンドは文句なしにかっこいい。それもそのはず、このバンドYAGEの前身バンドです。ちょっと頼りないヴォーカルは青さを引き立て、透明感と悲壮感のあるサウンドは目をつぶると真っ暗な空間に浮遊しているかのような気持ちにさせてくれます。(Y)
(NOVA/CARRERA/AO)EP 1998年

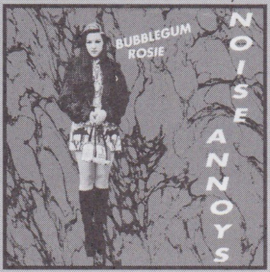
LOST LYRICS/SOME THINGS NEVER CHANGE



1992年にNASTY VINYLからリリースされていたベテラン・ゲーハー・メロディック・パンクの名作1stアルバムをノリと勢いだけで2009年にSPが再発。一度聴いたら忘れられない特徴的なヴォーカルに牧羊的でいてどこか懐かしくなる民謡のようなメロディー。そして曲中にYMOの「増殖」で使われていた「ミスター大平」をサンプリング。サンクス・リストに「THE YELLOW MAGIC ORCHESTRA」の文字が書かれており、熱心なメロディック・ファンの間では話題になりました。現在も元気に活動中。(Y)
(SP/SP 011)CD 2009年

今回はビール大国ドイツ編。ドイツというと聞くのがツアー中各ライヴ会場では壁一面にビールケースが置いてあってバンドは飲み放題という、うらやましい話。でも常温保存らしい…。やっぱりそんな国から登場してくるのは、酒焼けした野太い声で大合唱なスタイルのパンク・ロック・バンドが多いけど、そういったステレオタイプなバンドばかりでもない。やっぱり音楽大国故に色々なタイプのバンドがゴマンといるのです。この国もジャンルとして「ラモーン・パンク」が定着していますね。このコーナーを楽しみにしてくれてる人は1人しか知らないけど(笑)、…ドイツは前編後編の2回に分けてやっちゃいます！

NOISE ANNOYS/BUBBLEGUM ROSIE



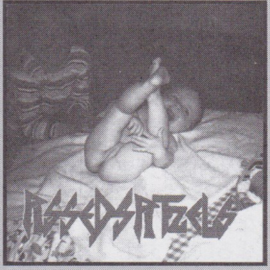
3枚目にして完成されたNOISE ANNOYS節！全編を通して弾けるようなリズムにウキウキなメロディー。本人たちがバブルガムバブルガム言うてるんで、バブルガム・ポップ・パンクとはこういうことなんでしょう！バンド名から推測出来るようにBUZZCOCKSに多大な影響を受けているのは間違いないけど、それを45回転ではもの足りずに78回転でやってしまっているかのようなサウンドは間違いない！えっB面？全然印象にないよ。だってA面しか聴かないもん。(O)
(VINCE LOMBARDY HIGHSCHOOL/VINCE 009)7" 1993年

WALTER ELF/HEUT ODER NIE



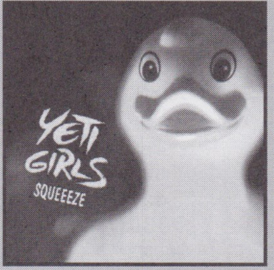
83年から91年まで活動したドイツのメロディック/ポップ・パンクの元祖的バンドの1stアルバムに初期音源を追加した再発盤。DESCENDENTSのメンバーも大ファンだったそうです。解散後も未だに根強い人気を誇るのも納得なDIE TOTEN HOSENよか100万倍かっこいいぜ！すっとぼけたホーンといい、切ないメロディーを合唱で歌っちゃうんだから。このサウンドは現在進行形のKICK JONESESへとしっかりと受け継がれています。(O)
(BOSS TUNEAGE/BTRCRS016)CD 2006年

PISSED SPITZELS + KIDS OF BOREDOM/Split



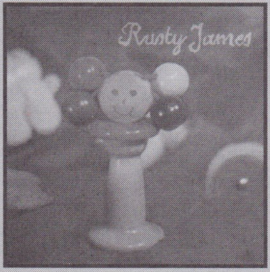
RASTA KNASTのメンバーでもあり(現在は脱退)、HÖHNIE RECORDSのオーナーでもあるHÖHNIEがヴォーカルを務める問題児バンドの記念すべき1stシングルはNASTY VINYLの前身レーベルから。アグネス・チャンに怒られそうなジャケットから飛び出すたった20秒しかない1曲目の中に彼らの魅力が全て詰め込まれています。坂道をサックス片手にクラウチング・スタートまで使用して駆け下りているような素っ頓狂なサウンドは中毒性高し。数枚シングルをリリースしています。(Y)
(SCHRAWINER/01)EP 1988年

YETI GIRLS/SQUEEZE



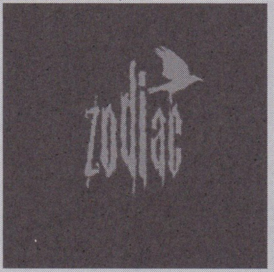
人気POP PUNKバンドのWOLVERINEから95年にリリースされ廃盤になっていた1st CDを日本のSUPERMARKET FANTASYが嬉しい再発。「甘い・キャッチー・ハイトーンヴォーカル」とPOP PUNKに必要な要素が見事に集約されている優良物件。クラブ・ヒットな大名曲"Sexy minisuperflowerpopupcolafan"が手軽に聴けるようになった事だけでも非常に意義のあるリリース。(Y)
(SUPERMARKET FANTASY/SMF006)CD 2009年

RUSTY JAMES/SAVE THE LAST DANECE FOR ME



ドイツの90年代、エモーショナル・メロディック/ハードコア・シーンを牽引した重要レーベルLOVE RECORDSの代表的バンドと言えばこのRUSTY JAMES。前身バンドAGEでギターとコーラスを担当していたMIGUELがメイン・ヴォーカルになり才能が見事に開花。青く伸びのあるヴォーカルと胸を掻きむしるような切ないメロディーの調和は他のLOVE RECORDSメイトよりも秀逸。この他にもシングルEPがあり、そちらも名作。(Y)
(LOVE/LOVE#4)LP 1996年

ZODIAC/ST



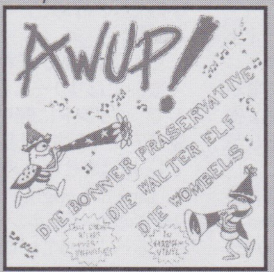
AGE、ASSAYのヴォーカリストとしてドイツ90年代エモーショナル・メロディック/ハードコア・シーンを駆け抜けたHAUKEが2009年に5曲入り10インチで突如カムバック。AGE、ASSAY当時となんら変わらない怒りと物悲しさを兼ね備えた咆哮は、心に全く癒しを与えてくれることはなく、聴けば聴くほどやさぐれていく一方です。HAUKEのヴォーカルをまた聴けるというだけで枕に顔をうずめて悶絶しちゃいます。(Y)
(7DEGREES/AMPLIFIED DR003/AA004)10" 2009年

SLAS/EYE OF CONFUSION



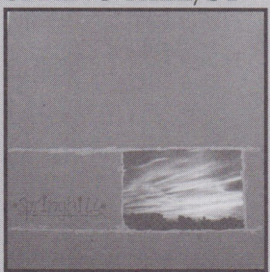
全く情報がないんですよこのバンドについては。ドイツのバンドだってことがインナーの住所からわかるくらい。誰か知ってる人がいたら教えて欲しいです。4曲中2曲が最高の哀愁メロディック！残り2曲は普通のハードコア。恐らくドイツという事でSPERMBIRDSあたりのメロディック寄りのハードコア・バンドを目指していたのかもしれないけど、その才能がなかった故の偶然の産物。捨て値でどこかに落ちてるはずなのでぜひ手に入れてほしい。(O)
(ECOCENTRIC/106)7" 1991年

VA/AWUP!



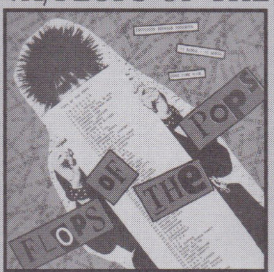
BONNER PRÄSERVATIVE、WALTER ELF、WOMBELSの仲良し3バンドによる3way split。各バンドが自分たちの持ち味を十二分に発揮しており、盤面のどこに針を落としても楽しむことが出来ます。楽曲のクオリティーは、この中では後に最も成功した事になるWALTER ELFがやはり抜きん出ています。レッド・ヴィニールとグリーン・ヴィニールを確認済み。もしかしたらまだ他にもあるかも？(Y)
(UNWERE KLEINE WELT/LIE 001)EP 1989年

SPRING HILL/ST



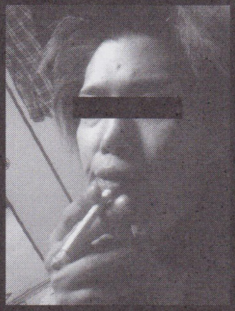
アルペジオで幕を開け一気にドライビング・ギターが炸裂し、熱いヴォーカルが哀愁のメロディーを歌いあげるエモ/メロディック・パンク・バンドの1stアルバム！！まさにSAD PUNK。北欧のAMAZING TAILSやNOWHEREと同ライン上に位置しているバンドだとホント思うんですよね。シングルも良いです。もちろんEVERSORやUKメロディック、DAG NASTYなんか好きな人も絶対にストライクでしょう。全音源を収録した編集盤が現在リリースされているので聴くべし。(O)
(LOVE/LOVE#008)LP 1996年

VA/FLOPS OF THE POPS



もうさ、ドイツって言ったらINCOGNITOものが何枚も入ってくるのしょうがないじゃないか。BACK TO FRONTだけじゃないんだよ。現行の世界中のバンドも狂ったように当時リリースしてたんだからさ。カタログ番号は001なのにリリースは91年という時間がかかった作品でブックレットもついてる。でもドイツ語だから読めないじゃないか！あれもこれもINCOGNITO好きな人だったら、お？ってなるメンツ。KLAMYDIAも収録してるところがホントこいつら抜け目ない。(O)
(INCOGNITO/INC.001)LP 1991年

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE



第三回

TEXT:PAINTBOX 宗

EL ZINE愛読者の皆さん、お元気ですか?このコラム面白いですか?俺はもう、あまり反響は気にしないで書こうと思います。

何故なら1回、2回目で一気に歴史を書き過ぎちゃって、もっと小出しにすれば良かったとかなり後悔中です。連載仲間、FRAMTID高山君を見習うべきでした。

書く事が無くなって来た気がする俺です。

ちょっとゆっくり行きましょう。

ここらでちょっと宣伝させて下さい。

現在、PAINTBOXのヒストリー的なライヴDVDを只今製作中です! タイトルは既に決まっています。

「Anarchy,Madness & Love」(Live & Laughin' Works)です。

PAINTBOXのスローガン的な言葉「Anarchy & Love」にMadnessを加えてみました。

PAINTBOX、チェルシーを良く知ってる人には納得の言葉ではないかと思いますが。

予定では1998年から2009年の去年のツアーの映像までを(空白の数年はありますが…)、けっこうなボリュームで出します。

デジカメなんか無い時代の映像が多いので、そんなに高画質は期待しないで下さい。

まあ、昔のハードコアのライヴ・ビデオよりは画像はいいですが。

音も千差万別、ハンディで録った映像が多いから(なるべく固定カメラの映像は省きました)音割れしてるのもあるのであしからず。

でも、ライヴ映像を撮ってチェックしたりするタイプでもないのに良く録ってあったな、と思うくらい映像が何故かあったので、20曲はこえるであろう内容にもかかわらず、曲はほとんどかぶらないで収録出来そうです。

チェルシーの意思もありますが、ハードコア・バンドなのにもかかわらず、楽しい作品にしたいとつい思ってしまう俺たちなので、なるべく笑える内容にしたいと思います。

まあ、チェルシーはご存知の通り、ヒッピー風サイケから地味な浮浪者風など日々成長(?)をとげますし、ゴローちゃんも初期はモヒカンじゃなかったり、ダサいパンク・ロッカー風だったりと変わりますが、フロントマンの俺が大した変化がないので、面白みにかけると思いますがご了承下さい(笑)。俺とスグルの縦2人はほぼ変わらないです。

太ったり多少痩せたり位で。もっと髪型変えたり、オシャレしとけば良かった、俺オシャレじゃないんだなと改めて分りました(泣)。

あと思うのは、10年なんてあっという間って事。

まだまだ若手だとおもっていたら、俺ももう38歳。ペイントに入ってから12年が経過。マジかよ!って感じです。あっという間の長い時よ~!速い速い!

それにしても精神年齢は全く成長しておりませんね。多分10代くらいから…。

考えてみりゃ、前々回書いたような、ガキの頃聴いたバンドを未だに聴いてるしね。まだまだ初期衝動を忘れず感動出来る俺は、ピュアなハートを持ったYOUNG PUNKSの様だ…。とかポジティヴに考えてばかりもいられない。

一般社会ではもう中年もいいとこ。社会的地位はいい線いっててもおかしくない年齢…。ヤバイ!俺は何も無い!金も女も地位も名誉も何も無い…。

パンクスらしくていいじゃないの、NO FUTURE!って言っても限度がありますな。小銭くらい貯めとかなきゃいかんぞ!パンクスたち!

と、大幅に話が逸れましたが、DVDです。

夏前にはリリースしたいと思っておりますので、ペイントに興味のある方は是非とも見てみてください!長いな~、と思ったとしても、損はさせない内容量です!

「Live & Laughin' Works」と銘打っておりますので、チェルシーのMCやオフショットもなるべく使っていこうか、と思ってます。

チェルシーのMCや、俺とかとのやり取りは名物的になっていたし、あれもペイントの味だと思ってるので。まあ、当たり前だけど、面白かった日にビデオを録っておける訳も無くそんなにMCのストックは豊富じゃないのが残念ですが。とにかく、色々な趣向を凝らし、今までに無い(常にPAINTBOXはそーしてきましたが)面白い作品にするつもりですのでお楽しみに!!リリースは勿論HG Factから!!

それと、ブックレットに過去のライヴ・リスト(1998~)を載せようと思ってるのですが、俺が居なかった2005年4月頃から、チェルシーが亡くなって活動停止する2007年8月までのライヴが分りません。なので、対バンした、とか見に行って覚えてるとかあったら一つでもいいので皆さん教えて下さい!(場所、日時、出来れば対バンも)

頑張って調べまくってはいますが、限界あるので…。

なるべく完全なライヴ・リストにしたいと思っているので。よろしくです!!

連絡先はココ↓

travellingmoth@hotmail.co.jp

イタズラ死刑!!

また、なんか俺と連絡取りたい、何か言ってやりたい、知り合いたい♡って人は気楽にメールして下さってけっこうですよ!

と、宣伝をここまで書いてきましたが、今回は先に触れたついでに年齢とハードコアについて思う事を書こうかな、と思います。

パンク、ハードコアは若者の音楽、若者の代弁者だ、なんて言う方もおりますが、ハードコア誕生時からやってる人間がやっと年を取って来た訳で、歴史は繰り返す、なんて言葉がありますがまだ繰り返す歴史が無いわけです。

だからこれからが見もの、というかこれから歴史が作られていくのでありまして、年寄りがいつまでも居座っていやがって…等と思わないで欲しいですな。

まだまだ歴史は浅いんですから。

たかだか30年程度のハードコアの歴史、いくらでもこれから自分らで作れるはずです。

そんなジャンルに出くわし、活動している事をラッキーと思いましょうね。

「歴史に爪立て、傷跡を残せ、存在を示す為」なんてPAINTBOXの歌詞にもありますが(さりげなく宣伝)やったりましょう!

で、話は飛びますが、歴史で思い出しましたが、6月にはなんとLIP CREAMが再結成ですよ、皆さん。もしかしたら、実際のライヴは見たこと無いって人も多くなって来てるんじゃないでしょうか?

LIPと言えば大先輩、勿論年齢も上ですが、あの人たちが年だからってショボいライヴをやると思いますか?絶対大丈夫と断言しましょう。間違いなく、いい物を見せて下さるでしょう!期待して大丈夫です!完全に個人的に書くと、ハードコア・パンク界でミノルさんはゴッドなんではないでしょうか。

で、やって欲しい曲は…「NO RULES」「BANDIT」「罪」「LONELY ROCK」「BLOODY SUMMER」あたりです♡

ちなみにプチ情報ですがLIPの4th ALBUM「LIP CREAM」の曲間に寸劇というか、セリフが入ってますが、「戦争?いかねえよ。ゼッテー逃げるぜ」とか「俺もコネ作ってよ、武装すんだよ、いい考えだろ?」となかなかの演技を聞かせてくれるのは何を隠そう我らがチェルシー先生です(笑)。サンクスに本名でしか載せてないから意外と知らない人もいるんじゃないかな。昔、実際にセリフを言ってもらった時「わー、本物だ!」とちょっと感動してしまった俺でした(笑)。

話を戻します。

年と言えば気になるのは体力。そりゃ、特にドラムなんてハードコアの場合は体力も使うし、若い方がいいかもしれませんが、年齢を重ねキャリアを積んだものには、ハードコアをやる上で一番重要かと思われる「センス」が磨かれているわけです。

速い曲をやり続ける為には体力が必要で、勿論若者の方が有利でしょう。

でも、ハードコアはライヴで10曲やるのに、全て速い曲をやらなきゃいけないのか。

そんな事は無い。ミドルテンポの曲もハードコア・バンドには重要で、ミドルの曲でかっこいいのを作れるバンドはいいバンドだと言えるのではないでしょうか。

それこそ「センス」が必要なわけです。

勿論、ハードコアですから、全曲遅いとか、ミドルテンポしかない、てのは個人的に好みではありませんが。

あの、ハードコアのスピード感、疾走感にやられたのが現在の自分があるルーツですから、遅い曲ばっかりやるバンドは好きじゃないかな。

まあ、ファストだ、グラインドだ、と言うのは俺の守備範囲では無いので何ともいえませんが……ドラムの人、頑張れ!としかいえません(笑)。

そしてその「センス」は歌詞にも強く現れるのではないでしょうか。

こればっかりは、長く生きてきた人間の得なところです。勿論、若いバンドにもいい歌詞を書くのはいるでしょうが、年を経た者にしか出せない味のある歌詞ってのもある筈。音も歌詞も、ハードコアは熟練の味で若い力とも勝負できると、私は思います。

でも、たまにアレっと思うのが、若い20代前半のバンドでいいのがあると(最近で自分で見た中で良かったのは、T.N.A等でしょうか)おじさんの俺は、つい若いのにやるな、って思いがちですが、よく考えれば俺達が影響を受けてきた先輩のバンドも、20代前半であれをやってたんだな、と気付いたりします。

皆、若いのに凄いね。ほぼ見本なんか無い時代にね。

海外の偉大なバンド達は、ピークをすぎてしまうとあまり評価されない感じになりがちですが、日本のバンドを見ると、いやあ、まだまだ衰えなんて見受けられません。

やはり日本のハードコアは世界一なのかもしれませんね。

なんたって、アメリカ人から見たらここ敗戦国日本はバンドの「レジェンド」的な人達が、平気な顔して活動して、新しいものを作り続けている訳ですから。

こりゃージャパニーズ・ハードコア世界一説もまんざら嘘ではないんじゃないかと…いや、ほぼ間違いないと思います。俺は。

日本で世界に通用するジャンルはハードコア・パンクであると断言しましょう。

若さ、といえば例えばですが「Get the glory」を未だにやるのはスゲー勇気あるな、と思ってしまうとする。まだやるか!と(あまりに有名なので例えに出させて貰いました〜)。

10代や、20代前半で作った曲なんて恥ずかしくて出来ないよ…って人の気持ちも分らんではない。俺もそうかもしれない。

でも、また登場するけどLIP CREAM。初期の曲も全然色あせないですね。

恐るべき若者だったわけです。若くても「センス」を持ち合わせた者らがいる。

本人達がどう思っていらっしゃるか分りませんが、初期には初期の素晴らしさがあり、ライヴでやって欲しいと思うのは懐かしい、ってだけじゃなくて充分カッコいいから(まあ、LIPの場合、初期だろうが後期だろうが、どの時代も充分に懐かしくかっこいいので選曲への不安…みたいのはありませんね)。

他にもうちの先生のDEATH SIDEしかり。DEATH SIDEだって20代でしょ。

今度、CHAOS IN TEJASでやるBASTARDのメンバーだって、皆さんそれぞれ、バリバリの現役です。そのレジェンドなバンドをやってた人たちは、昔の名前で出ています、ではなく、更に前進を続けております。

また、ハードコアの良さは、流行り廃りの音楽じゃないから、基本的に曲が古くならない。

クラシックになりづらいジャンルと言えるでしょう。

音質で古いと思いがちですが、曲自体は衰えないんです。

「Lonely Rock」は古いから、貴重だからいいのか?違うでしょ。

今聴いてもかっこいいのです。あの「タメ」は奇跡的にかっこいい。当時の先輩方の多くの音源もしかり。古くなってるのは音質だけです。

まあ、古い音質がまたいい、なんて場合もありますが、マニアック過ぎるのは嫌いです。

それも踏まえてあのリズム(D-BEATっての?)を作り出した、というか全面に押し捲ったDISCHARGEってのは偉大だなあ、と今更ながら思ったりします。

だんだん俺は何を言いたいのか…分らなくなってきました(笑)。

まあ、テーマはもう今更どうでもいいって事でお願いします。

自分は特に、この年でも相変わらずにハードコアを聴いているし、年齢に合わせて聴くものを変えたりもしないから、パンクは若者の音楽だ、と単純には感じないです。

いい年だからもう聴くのやめた。とか関係ないでしょ、ハードな音楽でもさ。

そーゆう、年だから卒業、俺もいい加減落ち着いてよ…的な暴走、憂国烈士の様な世界とは違うよね。ヤンキーからヤクザへグレードアップ、みたいなのも無いしね。

ハードコアというジャンルの中でも成長、進化する事は出来るし、簡単な道ではないよ。

何かしら理由があってシーンから離れちゃう場合は仕方ないし、やりたくなけりゃやめりゃいいし、自由なんだけど、年齢を理由にやめちゃう人って少ないと思いますが。

だからこそ、ハードコアの歴史と一緒に育ってきた、もしくは歴史を作ってきた人達が今後、どうやって更に新しいものを作っていくのか。

短いハードコアの歴史だからこれからが初めてって事がまだある訳で興味津々です。

「何でも俺が最初だった、見本なんて無かった。俺が誰も通らなかった道を切り開いていった」、というThe Great Mr.矢沢永吉じゃありませんが(笑)、先輩たちが切り開いてきた道、俺らがまた新しく切り開いた道を若いやつらは是非、利用活用してください。

そーやってるうちにまた新しい道、やり方、音を俺たちの世代が作り出していくでしょう。

これから10年くらいかな、ホントだったら面白くなるはずですよ!人事のようですが(笑)。

まあ、いつか世代交代はくるでしょうが、なかなかハードコアの先輩方もツワモノ揃い。

かつてのキング・オブ・スポーツ新日本プロレスでA.猪木が長州や藤波世代になかなか世代交代を許さなかったように、簡単にはいかないでしょうね。

とにかく、…ハードコアに年齢は関係無いって事です。「センス」重要。

若くてもいけるジャンルでありながら、年を経ているからこそその味もまた良し、と。

まあ、メッセージあってこそのジャンルですから、有言実行を長い間続けていくのは並大抵の事ではないので非常に精神的に面倒だし、強い精神力を持続させてきているベテランはやはり凄いな、と思わざるを得ない事もあります。

でも、言ってきた事と違ってきた事を認め

て、なお進化していくのも俺はいいと思います。

そんなに強い人間ばかりじゃないから。ペイントの歌詞にもあります。(またもさりげなく宣伝)「老いては気付かされ、更に激しく逆らい枯れ果てなるものか」「変わってしまった自分受け止めて、そして舵を取れ」なんて事も言っております。

でも、意地でも曲げずにつっぱってるのも、それはそれでカッコいいですけど。

俺には出来ないってだけで。

しかし、引き篭りチックな俺が知らないだけかも知れないけど、若いバンドが妙に少ないね。

つーかほとんど無い!クラブ・ミュージック全盛の時代とはいえ、元々ハードコア・パンクは少数派の音楽なのは分ってますが…。どうした事かアンダーグラウンドでも超不人気!

まだまだ魅力的なジャンルだと思うんだけどな。

まあ、バンドってもの自体が(ロックのバンドね)若い人には魅力無いのかな…。

気持ちは何となく分るけどね。パンク云々じゃなく、「バンドやってます」って事自体が魅力無い…っていうより恥ずかしい!…というのは分る。

実は俺も思ったことあるし。例えば仕事場で、刑務所で、キャバクラおねーちゃんに(キャバクラ行った事無いですが・笑)、いちいち「バンドやってるんですか?」「うん、まあ」「どんなの?」「うーんと…うるさいやつ」「え～じゃあエックスみたいの?」「いや、パンクかな…」「パンク?ブルーハーツとかでしょ?」って会話を嫌ってほど繰り返しているのですが、その度バンドとかバンドマンって面倒だな、って思うし、ヴィジュアルってのが出て来たり、青春ソングのロック・バンドが売れたりしちゃうと、どんどんバンドってダサいな、と思ったりもします。

世間一般の「バンド」のイメージって俺らの尺度からすると、かなりダサいよ多分。

何はともあれ、若いバンドが出てこないと、いつか絶滅するよ、マジで。

そこまで行かなくても更にマイナーな、閉鎖的な世界になってしまうかも(本人たちが思ってなくても、そう思われてしまう)。

それ位、危機感感じたほうがいいと思う。今、現在のシーンの状況で、バンドを解散とかしたら、新しい人材見つかるのかって不安が半端じゃない気が。

現段階で、俺らもベース見つけるのに、全然あてがないもん。

それに、下からイキのいいのが出てきて、突き上げられないと、年寄りも個人を確立していくのはいいけど、そればかりで広がらないと言うか…刺激が足りないよね、多分。

また敷居が高くなっちゃうし。

まあ、俺は永遠の若手なので、関係ありませんが。

SO YOUNG by THE STRUMMERS。

特に東京はちょっと畑違いのシーンで聞くぐらいで、この界隈は無しに等しいのでは。

確かに40歳オーバーも多いこのシーンで、敷居が高いかもしれませんが、(ただ人気が無いだけ、もしくは恐ろしい、という説もある)若くても、かっこよければ認められる世界。

意外と懐が広いんですよ、このシーンは。かなり上下関係が少ないシーンだと思うけどな。

まあ、だからこその厳しさもあるっちゃ、あるんですが…。

とにかくこのままでは滅びる!だからってこっちから出来る事ないしなあ…。

人気無いから影響力が無い(笑)。

出来る事と言えば、ただでさえ人材少ないのを更に寂しくしない為に、悪い事して捕まらない様にする位かな(笑)。捕まり過ぎだよね。ここ数年。

それに関して思うのは、やっとオマワリが(国家権力が)ハードコアの格好したやつとか、そーゆう雰囲気のやつは要注意だって気が付いてしまったんだと思います。ヤクザっぽい風体のやつだけが要注意じゃないぞって。またこれも一つの歴史です。

ボーっとしてっと、片っ端からいかれるぞ!

ちっと脱線しましたね。その内、それ関係についても書こうかな。

もはや、ハードコア・パンクは死語となりつつあるのか。

それとも、また違うシーンで都合よく言葉のみ、使われているのか。

年寄りで引き篭りな俺には、それすら分らない今日この頃。とにかく若いの出てこい。年寄りとせめぎ合おうぜ～!

若いの増えないと、ハクいスケも増えないんだぜ!

ハードコア・パンク、明日はどっちだ!!

しかし、早くも3回目で既に何を書きたいのか破綻してきて、メチャクチャでした今回。

脱線に継ぐ脱線で。

もうこれから、こんな感じで行こうと思ってますが、どうですかね。

では先に書いた、ペイントの俺の分らないライヴ情報、待ってま～す!

ではまた次号で。

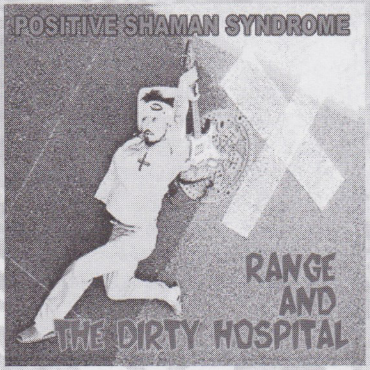
今回の良く聴いた作品



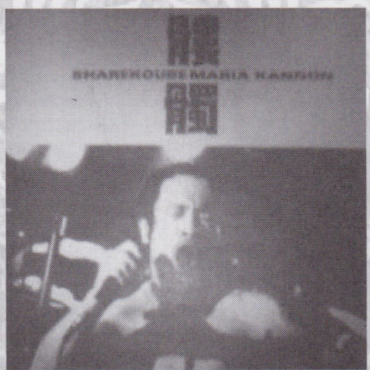
VEKTOR 「T.T.T.N」



ALLIANCE 「RESONANT AGITATE」



RANGE & the DIRTY HOSPITAL
「Positive shaman syndrome」



マリア観音 「髑髏」

THE THUNDERBOLT! VOL.4

TEXT:TAKAYAMA(NIGHTMARE/PUNK AND DESTROY/FRAMTID)

皆様こんにちは！今回も、性懲りも無くやってきました第4回！性懲りも無く締め切り寸前で一人深夜にテンぱっている、私、高山による性懲りも無い連載、「the THUNDERBOLT!!」です！よく、「THUNDERROAD」と間違われるのですが、BOLTの電光石火の方ですので、よろしくお願いします！そう言う私が一番良く間違えていますが！(笑)さてさて、うっすらと、予感はしていました、「そろそろ来るんじゃないか？」と、感づいていました。あれはそう、前回の連載記事の入稿を、締め切り期日をぶっちぎり、10日近く？遅れて必死の思いをしながら、朝方、入稿を済ませたばかりの満身創痍な私に、山路さんは言いました。「ありがとうございました、これからも、よろしくです！で〜、あの、すいませんが、今の感じで最低でも2ヶ月に一冊ペースはもちろんなんですが…、これからやはり月一で行きたいと思うんです！」

ほらきた！きたきた、きたぜ、やっぱりきた！(笑)僕は絶対こうなると思ってました、山路さんは、発行ペース増加による僕への負担なんかを気づかって考えてくれていましたが、まぁ、多少しんどい思いをするのなんて、はなから覚悟の上、すべてはこの連載がいつの日かヒロトの目に留まって、「おお、この高山君という人は、凄く僕達の事を好きなんだなあ、うんうん♪ずっとそのままで居てくれよなあ〜！」なんて思ってもらう為の絵図なのですから(笑)そんな事は屁でも何でもないのですが、しかし！しかしです、月一で、見開き2ページ活字びっしり6800文字はさすがに拷問でしょう！(汗)原稿用紙17枚分も、しかも毎月？そんな、いくら、どんなに僕がthe BLUE HEARTSが大好きでも、無理無理、絶対無理！そんなに書けませんから(笑)。

と言うわけで、今回から、文字数も半分にリニューアルしたthe THUNDERBOLTですが、いかがでしょうか？まあ、書いている話の内容からして、最初からこれ位が妥当ですよね？すいません、この連載を始める事に決まった時、ことヒロトの事になると、ついはりきっちゃって(笑)「山路さん、あのお、アレなんですけど、もしよかったら見開き2ページ、いかしてもらってもいいっすか？」なんて言って、山路さん、手の平の返しが早くて、どうもすいません！(笑)

ここまで、今回はなんだか脈絡の無い感じできてしまいましたが、これもまた良しとして、このままつらつらといきます！先日、某友人カップルが来店、あれこれ楽しく、買い物とお話を楽しんでもらっていたところ、彼等は、先日とあるお店で売り出されていた、LONDON NIGHTのCOMP Lpを中古で買ったんだけど、それが凄いんだ、と言う、何故すごいのか？を問うてみると、何を隠そう、そのCOMPには、あの「情熱の薔薇」が収録されているのだと言うではありませんか！？これは、僕、初耳でして、へえー！と、そんなのあるんだなと、もう少し詳しく話を聴いていると、彼等、その時、それぞれ購入し、2枚あるのだと言うので、「へぇー、もらっちゃっていいの？ありがとう！(笑)」なんて、冗談では無い冗談を言ったりしてたんだけど、先日、NIGHTMAREでのライヴに、わざわざ持って来てくれたのです！嬉しい！！かくして、僕がたまにDJなんてやらせてもらう時の、キメのナンバーのストックに、また一曲、加えられたわけであります！よしよし(笑)Yくん、Aちゃん、どーもありがとー！

まぁ、そんなSYSTEM FUCKERのユータくんには、「お礼にコピーして渡すね！」と約束した、2ndアルバムを出した頃の若きthe BLUE HEARTSが出演した、たーじんが司会の関西ローカルのTV番組、幻の放送のDVDを、いつまでも忘れたフリして渡さずに、たっぷりじらして遊んでやろうかと思っています！(笑)(ところでこれは、今度出る、DVD BOX SETに、収録されるのでしたでしょうか…？)

でも僕は、実は、「情熱の薔薇」、これ、あんまし好きではありません。いや、まぁ好きなんですが、何というか、他にも例えば「リンダリンダ」とか、「終わらない唄」とか、「Train Train」とか、あの、所謂、代表曲中の代表曲みたいな、必殺なナンバーには、ほとんど思い入れが無かったりします。そして、これはきっと僕だけでは無い筈なのですが、ではこれは一体なぜでしょうか？これらの曲は、曲自体は、もちろん、文句のつけ様の無い位に間違いなくかっこいいものですが、まぁ、特に初期のナンバーの、あの青さ(これはANTI BLUE HEARTSな人々の、もっともたる嫌いな理由だった)がちょっとしんどかったり、もちろんそれもあるんですが、違うんです、これは実際のところ、PUNKと呼ばれる種類の人間によく見られる、あの、極めて自己中心的で意味不明、非生産的極まる悪習慣、「理由も無くめったやたらに大多数な何かに反抗する症候群」から来るもの、単にそれだけな可能性も、あるにはある(笑)。いやしかし、人気のある曲ほど、サビの部分でキメの振り付けみたいなのが出来上がってて、何千人という数の人々が、「リンダリンダ！」と、サビの部分だけ、そろって馬鹿みたいに右拳を上げ続けるコンサート会場の様は、僕にとってはまさに地獄絵図！(汗)面白く無いので、「サビ以外のところで拳を突き上げ続ける異端者！」として孤立無援の争いを、がんばったりもしましたけどね、若い頃は(笑)。まぁ、だからとにかく！レゲエの野外フェスでは「ONE LOVE」が始まろうもんなら嘘みたいな大盛り上がりの大合唱！とか、色々なケースがあると思うけど、ああいうのは、虫酸が走ってしまいますよね、そう思いませんか？

で、話は戻りまして、あれ？戻ってるかな？(汗)僕が最も好きなナンバーはと言うと、HIGH LOWSやCRO-MAGNONSまで入れてると到底、選べないかと思うのでthe BLUE HEARTS限定で！一曲だけだとどうしても選べないので順不同の2曲を決めるなら、うんうん、おそらく、「ナビゲーター」と、「the BLUE HEARTSのテーマ」になります！おんなじような人も、結構居るんではないかと思いますが、どうでしょうか？「ナビゲーター」は、もちろん、4枚目のアルバム、タイトルもいかしている、「BUST WASTE HIP」のラストを飾るナンバー。ヒロトのアコギと、マーシーのボトルネック・ギターの響き、ブラス・バンドみたいなアレンジで力強くも可愛らしく、そして生命の感動を素晴らしい比喩表現で言い表し、歌い上げるヒロトのヴォーカル！人生を冒険の船出に例えるクライマックスでは本当のブラス・バンドも参加して盛り上げる、シンプルな楽曲なのにヒロトの壮大過ぎる世界観で無限大の広がり奥行きを感じさせる大大大名曲だ！

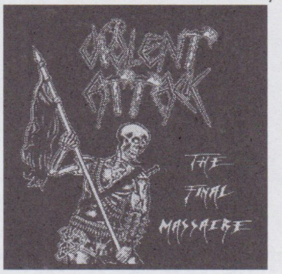
と、これからもっと「ナビゲーター」について語ろうかと思ったところで、今回、文字数のようです、なんとか締め切りに間に合いました、ただいま夜中の3時前(汗)も〜う、疲れたっす！さっき夜11時に山路さんからメール、「締め切りよろしくです！僕、今から寝るので、朝、目が覚めたらこっちのPCですぐ読める、みたいないい感じで！でわでわ★」みたいなのが来てました、んーもう！俺は怒ったぞ！(怒)山路さん、あなたがそんな風にくるんなら、こっちだって言わせてもらいますよ、「そんな事言う山路なら僕は蹴りを入れてやるよ♪」もしくは、「豆腐にぶつかって死んじまえOi Oi Oi Oi!」こうですから！(笑)それでは、今回はこの辺でお別れです。全国10万人のthe BLUE HEARTSファンの皆様、いつもいつも、本当に、糞くだらなくてごめんなさい(笑)。また次回まで、皆様お元気で！

SATANIC OCCULT DEATH III

TEXT:二ツ木正康

この号が出る頃にはMIDNIGHT、GERM ATTAKの来日は終わってるのかな?!
相変わらず音源は買ってます。今月は中々良い新人METALのバンドが聴けました。SKULL FIST!!BURZUMの新作が話題ですが、BURZUMはVery NAZIですのでその辺は忘れずに。

VIOLENT ATTACK/The Final Masacre



私にとって懐かしいカセット音源のアナログ再発。その昔、絵に描いたような刻みゲキ熱THRASHサウンドに興奮して今では絶対にやらないカセット・ダビングでD-BEAT MASTERにダビングしてあげました。TANKARDの1stと共にMASTERも気に入っていて、陰ながらDIS-BONESに貢献した南米スラッシュメタル作品です。

(Dies Irae/016)LP

ARES KINGDOM/Incendiary



2ndフル・アルバム。ORDER FROM CHAOSのHEAVY METAL要素引継ぎチーム・バンドかな?!日本での過小評価バンドの代表格だと個人的に思うが、ソレも納得してしまう地味さが漂う、はっきり評価するととてもシブイバンド。ホント真面目にMETALなのだ！SLAYERは最初の2枚が好きという人には完全お勧め。METALのバカバカしい部分しか見て無い人にはお勧めできない。ウルトラ・アダルト・デスラッシュ！

(NWN!/ANTI GOTH133)LP

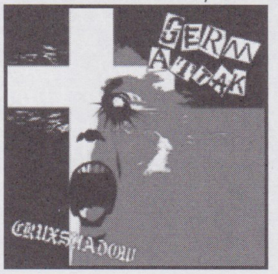
SKULL FIST/Heavier Than Metal



カナダ新鋭HEAVY METALバンド。覚えている人は覚えてるMANIACというバンドのメンバー在籍です。一曲目からなんか聴いたことあるメロディーで(思い出せない)聴きやすく、初期MOTLEY CRUE風のヴォーカル、ルックスがジョー・サトリアーニ風のギタリストが放つソロ、そして109ギャル風のドラマーの力強い2バスが最高です。09 METAL!!

(self release/品番なし)CD

GERM ATTAK/Cruxshadow



カナディアン・ハードコア新作。今までのDISORDER系のノイズコアと思いきや一曲目からCharged GBH仕様全開の更なる基本的なUKスタイルにチェンジ。今回もJOの限界ギリギリセンスがバッチリと光っています。NO FUTURE、RIOT CITY系サウンドも感じられ、基本をカッチリ押さえている最近では珍しくなったピュアUKハードコア・サウンド!!

(Drunk With Power/DWP-001)CD

RIPPIKOULU/Musta Seremonia



フィンランド・デスメタル93年デモ音源アナログ再発。陰鬱なメロディーも聴かせる、いかにもフィンランド・デスデス！と感じる音なのですが、もの凄く聴きやすい。DOOMというジャンルはROCKから始まり2010年現在、実は一番進化してきた音なのでは？と私的に感じています。時折、初期コラプテッドを思わせられ、日本のボキャブラリーをくすぐられる。そしてこの音源が完璧な90年代DOOM作品であると納得させられます。

(Svart/SVR005)LP

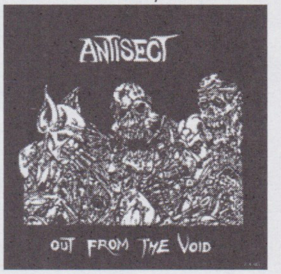
PHLEGETHON/Drifting In The Crypt



フィンランド・デスメタル再発盤。日本でもたまに特価中古で見かけていた12"。買っとけば良かったなーとは何時ものエピソードです。しかし最初期は初めて聴きましたがコレが素晴らしきDEATHRASH!!初期、中期、後期とこのバンドの歴史からフィンランドのDEATH METALが辿った、ヒストリーを感じ取れる、素晴らしき再発盤。

(Xtreem/XM 075 cd)2CDs

ANTISECT/Out From The Void



この時期のANTISECTの特筆すべき点の一つはギター・サウンドだと思う。この時期のUK勢はアリアかヤマハのSGを使っているが、ENTの足元を見るとオレンジのペダルのみ(BOSSのDS-1かな)。DS-1一つではこの音を出せるはずがない。非常に気になる所だが未確認。実際このギター・サウンドはバンドとしても誇りの一つであったようで機材の盗難が解散の一つの理由になったとの話だ。

(Bootleg/品番なし)7"

SANGRAAL/Fatal Coordinates



USのGEHENNAのプロジェクトBLACK METALということですが、コレは今で言うBLACK METALとは違います。モテたい度数0%の昨今のGEHENNAに通じるヴァイオレント・ブラックハードコア!!ギャグなのか?!本気なのか?!興味が惹かれるところですが、本人に確認したところで「どちらでもない」と適当に促されてしまいそう。

(Rock Cocaine/001)7"

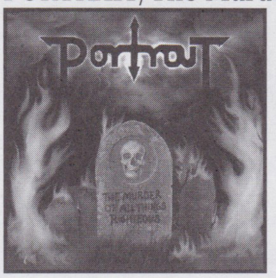
BLASPHEMOPHAGHE/...For Chaos, Obscurity And Desolation...



新作2nd。メンバーのRR BASTARDはいいヤツですよ。彼が言うには、「俺達は初期南米THRASH、BLASPHEMYに多大な影響を受けている」と言っていますがホントそれを2010年にそのまま運んできたサウンドです。今回のこれは良いです。マッチョな感じは余りなくて、前作よりもMORBOCIDADの3rdにならんで完璧にオールドスクール2000年代型DEATHRASH!!

(NWN!/ANTI GOTH139)LP

PORTRAIT/The Murder Of All Things Righteous



待ってましたスウェディッシュHEAVY METAL新作EP!!と思ったらKING丸出しのヴォーカリストは脱退していました…。しかし、ストレートなMERCYFUL FATE感覚の楽曲はそのままに新ヴォーカルはプロ仕様ですが、バック陣の進化にバッチリ対応しています。新作LPが楽しみ。

(High Roller/HRR095)7"

Making Some Cool Noise 非音楽を作るための音楽談義

さてさて、ギター製作の工程と原稿の締め切りのバランスが狂って来ましたよ。ギターインレイ（ポジションマーク）の工場で事故があり納期一ヶ月遅れで進んでます。

今回はレコーディングについて書いてみたいと思います。

先日、自分のバンドでレコーディングしました。場所はまたご存知ノイズルームスタジオで。前は田無という東京の田舎にあったのですが、騒音問題をクリアすべく今度は西武柳沢という田舎に越し24時間フル稼働！って事だったのですが、私たち早起き軍団は午前10時集合で。

イヤーまた此処が駅からスタジオに行くまでがちょっと遠いアンド本当にスタジオがあるのか不安（駅前以外何も無い）なのですが到着してみれば広い（前より）くつろげる！そして以前よりスタジオスペースも広くなりバックの演奏はいっぺんに全て録れてしまいました。それなので録り開始から3曲一時間強でバックの録り完了。ワレながら何も考えて無いのか?!ちょっといいのかなと感じてしまいましたが、飽きたのでそれで止めました。

私はレコーディングで間違えても気分がよければそのまま使ってしまいます。次にやったら成功するかも知れませんが、その次は失敗するかも知れないし、要は実力と確率、運などを全て考えてそうするようにしました。なので大概はライヴの方がレコーディングより上手く弾けます。因みに音作りに関してもとくには考えません。

今回のギターオーダーついでにLIFEの時に使っていたESPのMV（マーベリック）をリペアに出しました。ネックなどの調整を依頼したのですが、なんとリアピックアップが死んでいるとの事。どうりで…。思い当たる節はありあり。

私のMVには標準仕様でダンカンのSH-4（JB）が乗っていたのですが、折角なので何か違うのをと思い、自分が知っていたSH-5（カスタム）より新しい、自分にとって未知のSH-6というのを乗せてみました。コレがまぁパワーがあるのに非常にクリアで便利！しかしクリアで便利すぎるのが難点！という結果を招き、さてどうするか考え中だったのですが、今回のレコーディングにはMVを使いました。

クリアなのを良いことに、RATにイコライザーでは無くDODのODをブースターで使用。なかなか良い感じに80's仕様に出来たのですが、問題発生。GAINは極力出さずにいたのですが、マーシャルの800につないでるもんだから、立ち位置によってハウルハウル。

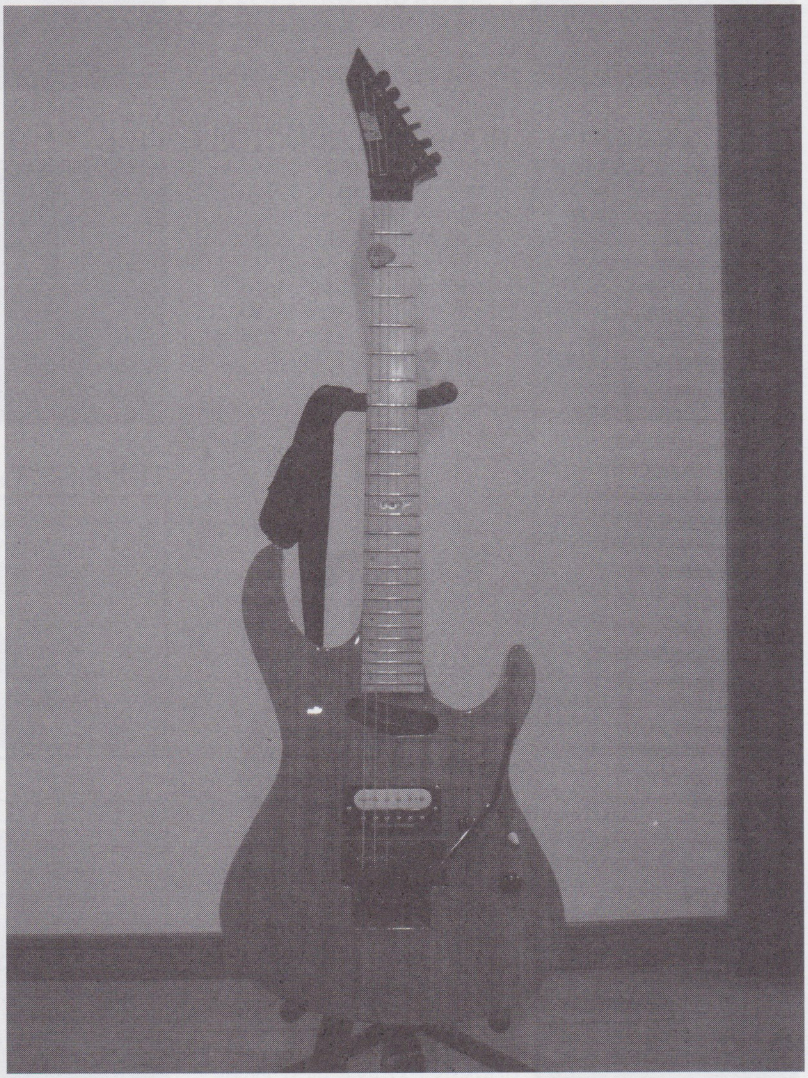
ノイズルームは広くなったとはいえ、マイク立ててベーシストもいてとなると中々立ち位置が難しい！皆さんも立ち位置に気をつけてください。

稀にですがレコーディングについてなどの質問や意見を人に求められることがあります。そんなときは「考えすぎているのなら、適当にやる。考えて無いならもっと考える」と答えます。私は適当ですが適当では無いのです。ワケ解らないと思いますが、ノイズルームのエンジニアはそれを理解してくれるのでやり易いです。皆さんも自分の拘りを発揮したいのならノイズルームでお試しアレ。無茶を言っても適当に促してくれます（笑）。料金も良心的でワンパック3万ってとこです。

一つ気をつけなきゃいけないのは駅前でチョコとかジュース、タバコは買って行きましょう。あっ、ノイズルームの弱点の一つに階段が急すぎて機材搬入が怖い、というのがあります（笑）。機材を持ち込む人は気を付けてください。エンジニアも体調が良いと搬入を手伝ってくれます（笑）。

NOISEROOM
http://www10.plala.or.jp/noiseroom303/

さて、ギター製作ですがこの調子だと完成は6月頃か?!7月にライヴがあるので一ヶ月慣らし運転をして間に合うかなー。



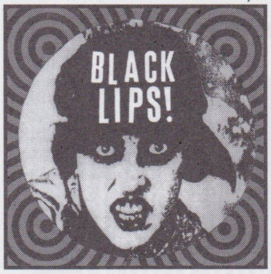
ESPのMV

LASHING SPEED DEMONS VOL.6

TEXT:大越よしはる

これまでにもガレージ系は少しずつ紹介してきたが、ここまでの本誌を読んでみて、ガレージ・パンクって実はEL ZINE的にも俺が思った以上にアリだな、というのが明らかになってきた今日この頃、というワケで今回はガレージ特集です。"ガレージ"というのもかなり広範な捉え方が出来る言葉で、以下の20枚は必ずしも純粋な"ガレージ・パンク"とは言えないものも含んでいるんだけど、ともあれ60年代から21世紀まで、ポンコツなのとかポップなのとか。

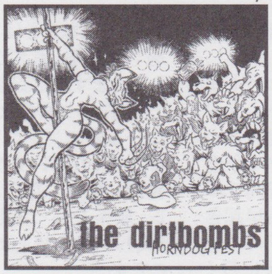
THE BLACK LIPS/BLACK LIPS!



2000年結成、この2月には来日も果たしていたアトランタの4人組。ガレージ・パンクというよりはよくいう"ガレージ・ロック"ってやつだろうが、サイケデリックやカントリーを大胆にミックスしたトラッシーなガレージ・サウンドは痛快な壊れっぷり。先日の来日ツアーでも存分に暴れたらしい。いろいろなレーベルから出しているが、コレは西海岸の老舗BOMP!からのアルバム。

(BOMP! BCD4084)CD 2003年

THE DIRTBOMBS/HORNDOG FEST



80年代末に早過ぎたウルトラ・プリミティヴ・ガレージ・バンドGORIESを結成した、デトロイトの黒い魔神ミック・コリンズ。90年代末にはこのバンドで、ツイン・ベースにツイン・ドラムの誰も聴いたことがないような真っ黒けサウンドをぶっ放した。R&Bとガレージにハードコアを突っ込んだような超強力R&R。その後もアルバム毎にどんどん黒光りする弾力を増しながら現在に至る。

(P-VINE PCD-5495)CD 1999年

BLACK TIME/DOUBLE NEGATIVE



レミー・コーション、パイレート・ラヴ、ハンバーガー・メアリー(!)という、ステージネームのイカレっぷりも素晴らしい、ロンドンの男女3人組による3rdアルバム。ガレージ・パンクというか、"アヴァン・ガレージ"…例えばELECTRIC EELSとかの、クリーヴランドのプロト・パンク勢を思わせる、崩壊感覚溢れる割れ歪んだノイズ寸前のサウンドがとても素敵なトラッシュR&R。

(IN THE RED ITR153)CD 2008年

DMZ/DMZ



ボストンといえばハードコアが熱いところだが、60年代からガレージやサイケでも先鋭的なバンドを輩出し続けてきた街でもあり。で、70年代のボストンといえばこのバンド。60年代ガレージの直球な影響を全面展開しつつ、レトロ感や焼き直しっぽい感じのまったくしない、熱量無限大・不純物一切なしのピュアなガレージ/パンク/R&Rを叩きつける。後身バンドのLYRESも素晴らしい。

(SEPIA TONE STONE12)CD 1978年

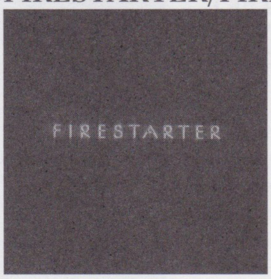
CHANTS R&B/STAGE DOOR WITCHDOCTORS



60年代ガレージの凶暴どころというと、SWAMP RATS(本誌VOL.0で紹介)と並んで思い出すのが、ニュージーランドのこのバンド。SWAMP RATSほどの爆音じゃないが、ギター・ソロ以外のところでもとにかくファズ・ギターをもの凄い勢いで弾きまくっている。バラードやおとなしめの曲もあるものの、アルバム後半のライヴ音源なんかは時々破綻寸前までイッていて素晴らしい。

(BACCHUS ARCHIVES BA1149)CD 2000年(64〜67年録音)

FIRESTARTER/FIRESTARTER



東京90'sガレージの伝説・TEENGENERATE(本誌VOL.0にて紹介)の後身と言えるバンド。70'sパンクやパワー・ポップやガレージの精髄のみを抽出してまとめ上げたような奇跡的デビュー・アルバム。「Keith Richards Man」「Rock's Dead」あたりの歌詞の硬派ぶり(うーむ、まさにハードコア…)にトラウマ級の衝撃を受け、畏れ多くてそうしょっちゅうは聴けないという…(苦笑)。

(MANGROVE root-027)CD 2000年

THE COME N' GO/2



スイスの怪物・MONSTERS(本誌VOL.0で紹介)率いるビートマンが運営するVOODOO RHYTHMのリリースの多くは、ガレージとブルーズとパンクをミックスして異様なハイテンションでぶちかます、キレたのが多い。ギター2本とドラムのベースレスで、ヴォーカリストがテルミンもプレイするこの4人組はその点、典型的。メンフィス・ガレージの帝王OBLIVIANSのカヴァーも収録。

(VOODOO RHYTHM VRCD32)CD 2005年

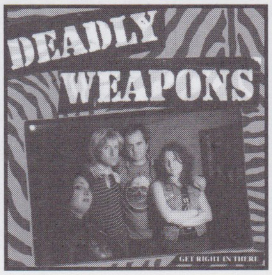
THE 5.6.7.8's/GOLDEN HITS OF THE 5.6.7.8's



後に日本が世界に誇るガールズ・ガレージ・バンドとなった存在、コレは元々カセットでリリースされていた(当時のレーベル名が"TOKYO STIFF"…このセンス!)最初期の音源を収録したCD。ロウな音質、60年代ポップスやグラムに通じる親しみやすいメロディ、初期衝動全開のラフな演奏…が絶妙なバランスで詰め込まれたお宝盤。本誌向けとか云々する以前に、全ロック・ファンに聴かせたい。

(RADIO UNDERGROUND RUC-001)CD 2003年(88年録音)

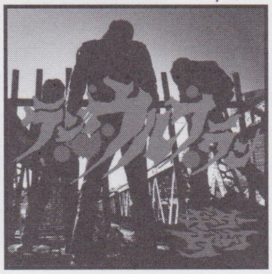
DEADLY WEAPONS/GET RIGHT IN THERE



90年代サンフランシスコ・ガレージ界にその名を残すTRASHWOMEN〜BOBBY TEENSのメンバーによるパンク・バンド。ローファイ・ガレージのTRASHWOMENともグラム寄りだったBOBBYTEENSとも違って、ハードコアなスピード感溢れるパンク・ロックが13曲18分で駆け抜ける。特に「Break Up」のヴァース部分なんか初期のMOTORHEADみたい。十分にポップでもある。

(JOHNNY CAT FY-679)CD 2004年

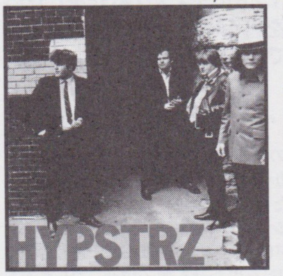
GUITAR WOLF/RUN WOLF RUN



CDのプレイボタンを押した途端にフィードバック、いやハウリングが「ピーッ!」…続けざまに放たれるロウでダーティーでカッコ良過ぎるR&R。初めて聴いたときは、部屋の中で文字通り転げまわって悶絶した。日本の、いや世界のロック史上に残る大名盤だと思う。どのアルバムも素晴らしいが、個人的にはこの2ndを猛プッシュしておく。名曲中の名曲「オールナイトでぶっとばせ!!」収録。

(LESS THAN TV ch-5)CD 1994年

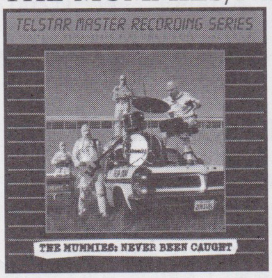
THE HYPSTRZ/LIVE AT THE LONGHORN



80年前後のミネソタを駆け抜けた4人組。『NUGGETS』あたりに収録されているような60年代ガレージ/ビートのカヴァーばかりをライヴ録音で…存在としてはいわゆるパブ・ロックだと思うんだが、DMZ同様焼き直しっぽさ皆無の凶暴なスピード感でぶっ飛ばす。コレは80年のアルバムをベースに、2夜連続のライヴ全曲と04年の新録までぶち込んだ全37曲でCD化された究極の1枚。

(BOMP! BCD4092-2)CD 2005年(79～04年録音)

THE MUMMIES/NEVER BEEN CAUGHT



RIP OFF RECORDS以前、サンフランシスコの90年代ガレージが勃興する端緒となった偉大にして異形の包帯バンド。モノラル録音の激ロウ・サウンドに露悪的ともいえるヘイトなアティテュード。…一体どうしてこんなことに。ともあれ後世への影響は限りなくデカい。写真は10年後の02年にCD化された時のジャケットだが、またこのふざけたセンスと来たら。09年には奇跡の来日。

(TELSTAR TR005)CD 1992年

THE JON SPENCER BLUES EXPLOSION/JUKEBOX EXPLOSION



IN THE REDでのシングル5枚に未発表曲を加えたレア音源編集盤。オルターナティヴ以後のロックの最前線で語られ続けるジョン・スペンサーだが、60年代ガレージの代表的コンピレーション『BACK FROM THE GRAVE』を模したジャケットから明らかな通り、PUSSY GALORE以来ジョンは50～60年代以降のブルーズ/R&Bやガレージの原初的にしてコアな激情を爆裂させてるだけだ。

(IN THE RED ITR164)CD 2007年(92～02年録音)

THE SONICS/HERE ARE THE SONICS



60年代ノースウェスト・ガレージを…いや、60年代ガレージを代表するワイルドでサヴェイジな5人組の、記念すべき1stアルバム。破裂音のようなドラムの連打と、リトル・リチャードにイカレてしまった白人青年の狂った絶叫。ギターはそれほどラウドには聴こえないのに(サックスの方が目立つ)、ガレージ・パンクの真髄が顔面を直撃する最高の1枚。アルバム3枚全部イイけどまずはコレ。

(NORTON CNW903)CD 1965年

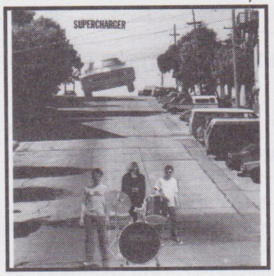
KING BROTHERS/KING BROTHERS



忘れもしない98年、GUITAR WOLFを観に行ったらいきなり前座でこの人たちが出てきたのだ。大暴れのパフォーマンスに度肝を抜かれた。その後すぐコレが出た。小汚い野郎どもがギターレスの3人編成で叫びわめき叩きつける暴力的で野蛮で不遜なR&Rは、ステージでも音源でも異彩を放ちまくっていたものです。その後10年以上、曲折ありつつも第一線で叫び続ける奴らの出発点。

(BULB BLB-057)CD 1998年

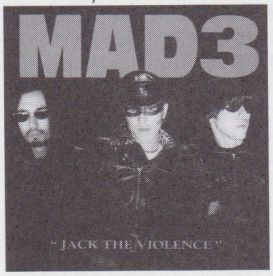
SUPERCHARGER/SUPERCHARGER



サンフランシスコの90年代ガレージといえばMUMMIESにRIP OFFS…そしてこのバンドも忘れるワケにはいかない。当時既に若くもなく、その時点で楽器も出来ない、というあんまりな(笑)3人によるあまりにもポンコツ過ぎるR&Rは、音質だけでなく演奏技術の点でも超ローファイ(しかし曲はもの凄くキャッチー)。そしてベーシストは後にRIP OFFS結成に至るのであります。

(ESTRUS ESD1240)CD 1991年

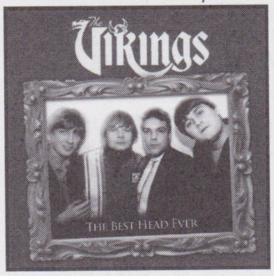
MAD3/JACK THE VIOLENCE



CHAOS UKのお気に入り…ということで、ハードコア界隈でも最も親しまれた90年代ガレージ・バンドじゃないだろうか。後に歌モノが増えたりサイケデリックなアプローチもあったりしたが、記念すべき1stアルバムはデイヴィー・アランやリンク・レイにスーパーチャージャーで過給したような(バンド名通り)狂った爆音インストロファズまみれR&R。今聴いてももの凄い音圧と勢い。

(TIME BOMB BOMB CD-31)CD 1996年

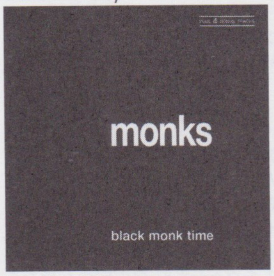
THE VIKINGS/THE BEST HEAD EVER



DEVIL DOGSとYUM YUMSとTURBO NEGROのメンバーがやってた、今考えるととんでもないメンツの4人組のCD2枚組ベスト盤(ディスク2はライヴ)。音楽的にはガレージというよりDEVIL DOGS直系のR&Rといかにも北欧系のポップ・パンク/パワー・ポップ。オリジナル曲もいいが、CHEAP TRICKだのFUN THINGSだのDICTATORSだのといったカヴァーもまた素晴らしい。

(JUST ADD WATER JAW029)2CD 2005年(94～96年録音)

MONKS/BLACK MONK TIME



西ドイツ駐留米軍の兵士たちがヴェトナム戦争の時代に結成したこの5人組は、ロック史上最も早い時期にヘイト・フィーリングを前面に押し出したバンドじゃないかと思う。エレクトリック・バンジョー(!)の破壊的なリフはハードコア通り越してインダストリアルみたいに聴こえる(66年に!)。後にTEXACO LEATHER MANあたりにも受け継がれるイカレたビートでジャンプしろ。

(REPERTOIRE REP4438-WP)CD 1966年

V.A./THE SINGLES SECOND STRIKE



90年代西海岸ローファイ・ガレージの帝王、RIP OFFS(本誌VOL.0で紹介)が主宰していたレーベル(もうないの?)の、シングル・コンピレーション第2弾(RIP OFFSのラスト・シングル含む)。60年代ガレージや70年代のオブスキュアなパンクの初期衝動だけを純粋培養したような、洗練されない演奏と音質とスピード感で貫かれた14曲24分。稀有なレーベルでありました。

(RIP OFF #057)CD 2002年(95～96年録音)

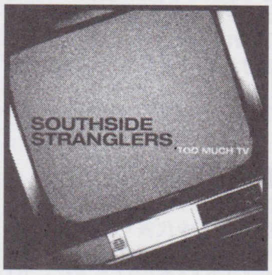
…毎回言ってるような気がするが、書いてみたら予想外に日本のバンドが多くなった。書き始める前は、EL ZINE向けのガレージって20枚もチョイス出来るかな、とか思っていたんだけど、これまた予想外に、選び切れなくて外したり、書いてから差し替えたり削ったり、というのが多く…次の号で続編をやる、かも知れません(未定)。初期のパンクを凶暴化させてハードコアが産まれたように、ビートものを未熟な若者が力任せに演奏したら60年代ガレージになった…みたいなことを考えたら、やはり両者の感覚には通底するものがある、のかもしれない。ここでいつもの一言、"すべてはつながっている"。

KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

大半が2010年リリースの作品で、一部2009年、一枚だけ2007年発表。例によってなるべく現行のバンドのディスク紹介をしたいからSAYYADINAのCD以外は新録盤だが、彼らも今活動しているバンドだから良かろう。この原稿を書く時点で売切れ状態と判明しているものは外しているが、すべて海外のレーベルやディストロで直接買わなくても国内でゲットできるはずである。

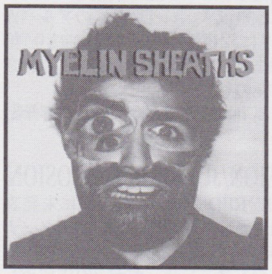
SOUTHSIDE STRANGLERS/Too Much TV



GOVERNMENT WARNINGのヴォーカルとドラムを含む4人組のデビュー盤だが、いい意味でマニアックに追求した6曲に痺れるのみ。PAGANSとDAMNEDとDEAD BOYSにハードコア以降の黒い重さを一滴垂らした如しで、裏返る歌唱や響きの熱さはロックンロールの発火点に直結している。音の状態も言葉の選び方もスリーヴ/インナーの作りもパーフェクトなパンク・ロック・レコード。クール！

(GRAVE MISTAKE/VICIOUS CIRCLE GRAVE037/VCR14)7"EP

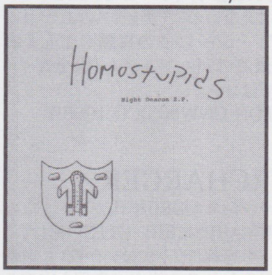
MYELIN SHEATHS/Do The Mental Twist



体温の低そうな女性ヴォーカルが気持ちいいカナダのバンドの2枚目の7"盤。靄がかった音像でパンク・ロックをやっているから"シューゲイザー・パンク"というネーミングがピッタリだ。初期JESUS & MARY CHAINを思わせる調子でサーフしたかと思えば、ハードコア以降の激しさも音に内に秘めた硬質な音で飛ばし、まさに"メンタル・ツイスト"なのだ。突き放したような歌い方も冷ややかで肌に感じる。

(HOZAC HZR-047)7"EP

HOMOSTUPIDS/Night Deacon E.P.



昨秋LOADレコードから出したセカンド・アルバムでも絶好調だった、米国オハイオ州クリーヴランドの"ガレージ・ロックンロール・パンク・バンド"の6曲入り。NINE SHOCKS TERRORをやっていたスティーヴ在籍ならではの加速度の一方で、アコースティックなインストもやってのけ、音の破片のトーンとリズムのセンスも尋常じゃない。これはスピーカーの間で革命が起こっている。最高だ。

(FASHONABLE IDIOTS FIR-038)7"EP

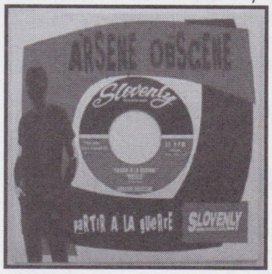
V.A./Warsaw Is Burning!



ポーランドのパンク/ハードコア5組収録。メロディック・ユース・クルー系のBURST IN、REGULATIONSに通じるUSHCスタイルのGOVERNMENT FLU、キーボード入りのポップ・ロッキン・パンクのBLACK TAPES、USスラッシュ・パンクのSIX-PACK、そして新作収録の2曲提供のEL BANDA。自国語と英語混在でブックレットも含めてバンド見本市に終らぬ味のある作りだ。別ジャケもあり。

(REFUSE/EMANCYPUNX REFUSE055/EMANCYPUNX022)7"EP

ARSENE OBSCENE/Partir A La Guerre, Docile



元FRASCHENで現VEINESのフランスの"パンク音楽家"によるソロ・デビュー盤。"ヴォーカル、ギター&ノイズ"による宅録で、リズム・マシーンによるものと思しきチープなビートも功を奏した独創的な音を放射する。初期METAL URBAINの冷たい質感と初期SAINTSのほこりっぽい疾走感を内包し、フランス語の詞を歌うヴォーカルもジョニー・サンダース系のよれ方も天然で非常に素晴らしい。

(SLOVENLY 702-88)7"EP

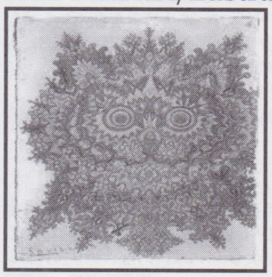
EL BANDA/Skutki Uboczne



歴史的なLPと言い切れる本誌の誌名の元になったポーランド産のセカンド。女性ヴォーカルをはじめ自国のパンク・バンドの伝統を感じさせるアクの強さが増しつつ、しなやかな楽曲と芳醇な音に拳を握りしめる。曲によってゲストがヴィオラやトランペット、ハーディガーディを演奏し、ときおりSEも挿入した一大抒情詩の24曲入り。別ジャケCDもあるが、高価でも重厚な二つ折りジャケットのLP推奨だ。

(PASAZER No Number)2LP

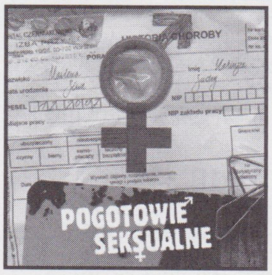
ALE MANIA/Lustful Fistful



SESS～BEATERSで活躍中のアンドリューも含むカリフォルニア州サンディエゴのバンドのデビュー・レコード。電子音みたいな音も聞こえてくるが、A面はシンセサイザー・パンクのサイバー感覚をギターでヤったみたいだ。曲名自体も意味深のB面「Vomitpig」も宇宙的グラム・ロックの感覚も漂うが、サイエンス・フィクションと呼ぶには生々しい。恐るべきセンスの最新型パンク・ロック、要注意。

(VOLAR 04)7"

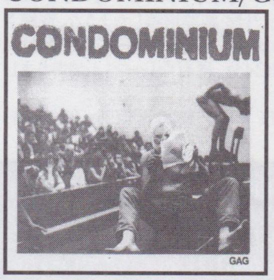
POGOTOWIE SEKSUALNE/Na Sygnale



ポーランドからの興味深いリリースが続くが、全パートが女性のみのバンドはあまり増えない。これは教条的な姿勢から解放された女性だけならではの貴重な音だ。ポーランド語の響きを活かしたパンク/ハードコアは微妙にポップでスカを入れてもあまりに瑞々しく、"パーソナルな政治"を歌う詞(英訳付)もリアルに響く。デジパックやブックレットのカラフルかつ意味深なデザインも素敵な2007年作品。

(PASAZER No Number)CD

CONDOMINIUM/Gag



米国ミネアポリスの"ストレンジ・パンク・バンド"の4枚目の7"EP。A面は7分近くのスロー・ナンバーでB面の2曲目もアンビエントなインストだが、FLIPPERやBLACK FLAGが背負ったハードコアの亡霊を葬り去るような背筋が凍る"ゆらぎ"のサウンドだ。偽悪も露悪も政治も芝居がかった演技もへったくれもない深いカオスが異形の音楽感覚で表出。手刷り仕様のジャケットも怪奇である。

(DEER HEALER DHR-009)7"EP

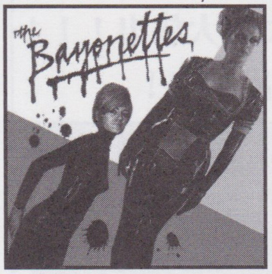
WHITE LUNG/Atlanta



RIFF RANDELLSのドラマーを含むカナダの4人組。オール・ガール・バンドだった前の2枚7"EPに引き続き、今回もユニークな前のめりのパンク・ロックで元気であった。riot grrrl系のバンドの流れを感じる屹立したヴォーカル、自由形の女性ならではの"いなたい"ベースとドラム、初期JOY DIVISIONが螺旋状になった新加入の男性のギター。どこか不揃い、だからこそ骨を感じる一枚。

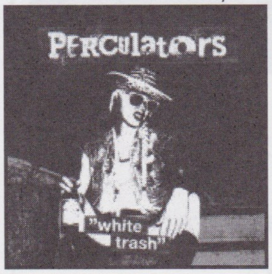
(DERANGED DY163)7"EP

BAYONETTES/Guilty Pleasure



2008年に解散したカナダのガール・ヴォーカル・バンドが2005年と2006年にレコーディングした2曲入り。むろんボツの曲を一枚にしたわけではなく、一曲一曲に誠意を感じる(これ大切)。A面はCAREER SUICIDEのメンバーによる録音、B面はキーボードが漏れ聞こえるが、"ガールポップ系パンク"とは一線を画した甘すぎず荒すぎずサジ加減がたまらない。まさにbitter sweetなパンク・ロックだ。
(DERANGED DY 113)7"

PERCULATORS/White Trash



スウェーデンといってもウーメアでなく首都ストックホルム拠点で英語の歌詞だけに、都会風の粗削り具合が魅力のパンク・バンドのファースト7"EP。「White Trash」「Drunk Punx」という表題が似合う突き抜けた存在感の女性ヴォーカルが圧倒的で、EXPLOITEDっぽい性急な曲からグルーヴィなミッド・テンポの曲まで音も痛快だ。POLYSICS風のメンバー写真も公開する遊び心あり今後も楽しみ。
(KEN ROCK KEN 72)7"EP

MENOS VALIDOS/Punk Regio



女性ヴォーカル擁するメキシコ産。2006年に比較的キャッチーなアルバム『Locura Ordinaria』を作ったが、この5曲入りは粗削りなパンク/ハードコアでギトギトに迫る。いきなりスロー・テンポでフェイントかました後(これも良し！)速い曲を連発するのだが、反則アレンジ多数でたまらない。アグレッシヴ&ファニーなスペイン語と軽いビートのコントラストにもやられるばかりなのだ。歌詞の英訳付。
(AKRACIA/KID/UNION Y DIFUSION他 U-62299M/MUS-01)7"EP

MOSTROS/Las Fabulosas Aventuras De Vacillatio Et Revolvo



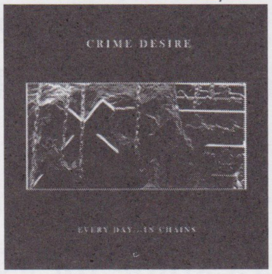
アルゼンチン出身でスペイン拠点のバンド。GIRLSCHOOLやNASHVILL PUSSYの初期、DAMNEDのサード、EXPLOITEDが頭をよぎる骨太のハード・パンク/ロックンロール・サウンドに、二の腕が太くダイナミックな女性ヴォーカルの英語での歌唱が拮抗し、問答無用に痺れる。アナーコ系ではないが、何かの紙の裏面にシルクスクリーンのリサイクル・ジャケも素晴らしい。音質もサイコー！のセカンド。
(FLYING PELUCA No Number?)12"EP

MICKEY/She's So Crazy



シカゴでFUNCTIONAL BLACKOUTSやDAILY VOIDを率いてソロも多作な、マック・ブラックアウトがヴォーカルの5人組のデビュー・シングル。B面の曲名が「I Am Your Trash」だし、"NEW YORK DOLLS meets T REX"とでも言いたくなる。マーク・ボラン似のヴォーカルをはじめとして彼らの旨みを現代に活かし、思いっきりキャッチーな楽曲にとろけるばかり。ヒットするには深すぎか？
(HOZAC HZR-048)7"

CRIME DESIRE/Every Day…In Chains



グラヴィティが手をつけたのも納得の狂気をはらむカリフォルニア産パンク/ハードコア・バンドの4曲入り。高い声のヴォーカルをはじめとしてDIE KREUZENの色はキープしつつ、ANTISECTとRUDIMENTARY PENIが手を組んだようなメタリックかつドラマチックな展開を見せ、最後は麗しい女性ヴォーカルも入り、暗黒世界を綴って息を呑むしかない。値段高めだが盤も含めて重量感ある一作。
(LIFE'S A RAPE/GRAVIEY GRAVITY 51/LIAR12-7)LP

CHAOSMONGERS/Chaosmongers



『Demo 2007』からアダチ(b)以外メンバー一新した東京拠点の4人組の初CD。"DEVIATED INSTINCT meets EYEHATEGOD"と言いたくなる"メタル・クラスト・スラッジ"に、CHURCH OF MISERYのロック・グルーヴをブレンドしたようなフックのある曲作りが光る。英詞を吐くIRON MONKEY〜GARADAMA系の柄の悪いヴォーカルも非常にうるさいのだ。水増し無しで凝縮した約20分の4曲入り。
(SEVERE MASSIVE DAMAGE SMD-002)CD

LANDMINE MARATHON/Sovereign Descent



女性がフロントに立ちツイン・ギターを擁する米国アリゾナ州フェニックスの5人組のサード。BOLT THROWERとOBITUARYの合体みたいな超重量級サウンドだが、ブラスト・ビート込みで展開も激しいから2000年代のNAPALM DEATHにも通じ、ハードコア・パンクの要素も強い。米国のニュースクール・ハードコア直系の強靭なスクリーミング歌唱も聴けば本気とすぐわかるはず。グレイト！
(PROSTHETIC 10082-2)CD

BLACK BREATH/Heavy Breathing



本誌前号で大きくフィーチャーされたシアトルの"デス・ハードコア・パンク・バンド"のファースト・フル・アルバム。発売記念ツアーを一緒にやっているCONVERGEのカート・バルーとの共同プロデュースで、残虐な音作りも曲作りも非の打ち所のないパーフェクト・ゲームだ。ヴォーカルもひっくるめて"ENTOMBED meets 最近のDISFEAR"だが、アメリカンならではの豪放なダークネスに乾杯！
(SOUTHERN LORD LORD 114)CD

SAYYADINA/The Great Northern Revisited



後期NASUM〜VICTIMSのジョン(g、vo)を含むグラインダー"セイヤディーナ"。NO VALUEとのスプリット7"EPなどのアルバム未収録曲と未発表曲をスコット・ハル(PIG DESTROYER他)がリマスタリングした30曲入りだ。ツイン・ヴォーカルとヘヴィ&シャープな楽器が繰り広げるサウンドはファスト・コア寄りで本当カッコイイ。味のあるブックレットのセルフ・ライナーと歌詞の和訳付。オススメだ。
(RELAPSE JAPAN YSCY-1176)CD

<追伸> ●VOL.4で紹介したDADFAGのCD『Scenic Abuse』ですが、演奏光景の映像を見るとギター2本とドラムの楽器編成でベースレスのようです。お詫びして訂正します。●1ヶ月ほどの間に新録のグレイトなディスクだけで20枚というのは少々しんどいが、どんどん新しいのを買わないと死んでしまう。●7"レコードの作品を中心に、ホントおもしろいパンク・ロックのディスクが世界中から次々とリリースされている。そういう作品を手に取ると、ほんとうに音楽が好きな人たちがやっていることもわかるし、可能性は無限大だと勇気づけられるのだ。





DAN-DOH RECORDS
OUT IN THIS SUMMER??

* MASTERPEACE / FUTURE REVOLUTION CD
* JAILBIRD Y / 1st ALBUM
* BLIND SNIPER / 1st ALBUM
* ATAME / 1st ALBUM
* TERRO-RHYTHM 6
  Feat : AVFALL / CONGA FURY / LULLABYE / TONEDEAF
* TERRO-RHYTHM 7
  Feat : ATTACK SS / COMPLETED EXPOSITION / CONGA FURY / SENSELESS APOCALYPSE

OUT IN THIS AUTUMN?????
* V.A / NEVER TELL A LIE 2010
* zOoOoM / 2nd ALBUM
* ACID MOTHERS TEMPLE
* the bondance in mexico
* WHEEL OF LIFE
  ....and more more FUCKERS

CHAOTIC NOISE RECORDINGS
OUT IN THIS SUMMER??

* V.A / KURO SHIKOKU CD
  SHIKOKU DARK-EXPERIMENTAL COMP
  Feat : DEAD PUDDING / ITHAQUA / OLDEMADA feat SPACEGRINDER / TERATOMA / WHEEL OF LIFE
* AMAZON SALIVA / 1st ALBUM

ENJOY MUCH NOISE!!

K-CLUB / CHAOTIC NOISE / DAN-DOH RECORDS : 高知市帯屋町 1-3-12 KENT BLD BF / TEL 088-823-8190 / chaoticnoise@yahoo.co.jp

KAWAKAMI FOREVER 2010



2010/06/05 (Sat)
KOCHI CHAOTIC NOISE
PM 6:66 NOISE / FREE GIG
Feat : KA-KAMI BARMY ARMY

2010/06/06 (Sun)
TOKYO EARTH DOM
PM 3:30 OPEN / PM 4:00 START
ADV 1500 / DOOR 1800
Feat : LIFE
REALITY CRISIS / FRAMTID
AXEWIELD / CONTRAST ATTITUDE
D-CLONE / A.G.E
CONGA FURY / FINAL BOMBS
....and more

DIS-NIGHTMARE STILL CONTINUES....

RECORD SHOP
BASE



〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4-23-5 ACP ビル3F
TEL 03-3318-6145 FAX 03-3318-6150
OPEN 12:00 - 21:00 定休日無し

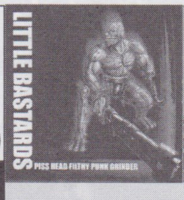
国内、海外からほぼ毎日INDEPENDENT作品を中心に入荷中!

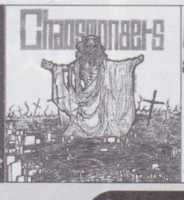
Martin Sorrondeguy
(NEEDLES/ex-LOS CRUDOS/LIMP WRIST)
"Twisted Visions"
Photo Exhibit.(写真展)

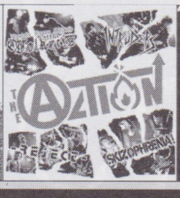
東京 : 6月22日 (火) 〜 27日 (日)
会場 : 中野 MOON STEP BAR SPACE
16:00 〜 23:00 入場無料
INFO : BASE 03-3318-6145

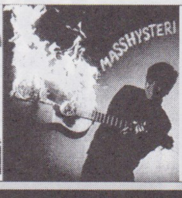
大阪 : 6月30日 (水)、7月1日 (木)
会場 : アメリカ村 HOKAGE B2F BAR FLOOR
両日共に、写真展 14:00 OPEN 〜ライブ終了まで。(入場無料)
INFO : PUNK AND DESTROY 06-6213-5773

今回の写真展に合わせ MARTIN の PHOTO BOOK が発売！
各会場にて先行販売！











BASE WebSite **http://www.recordshopbase.com**

☆新入荷 ☆ニューリリース情報 ☆当店取り扱い商品を網羅したカタログ
☆ 推薦盤 等掲載!! 通販御利用の方はもちろん、皆さん ぜひチェックしてみて下さい!!

携帯サイトはこちら!! **http://www.recordshopbase.com/mobile/**

☆P.Cサイトと同様、新入荷、ニューリリース情報、推薦盤、中古盤、当店カタログからの検索が可能です! 是非御利用下さい!!

ご注文は→ order@recordshopbase.com その他お問い合わせ base@recordshopbase.com
☆通信販売1万円以上のお買い上げで送料/代引手数料サービス続行中!! 通販スタンプカードサービスも行ってます!!

通販送料全国¥450ー(税抜き)です! 沖縄も含む! 東京都内は¥400ー(税抜き)です!

------------------更に!------------------------
当店イーバンク銀行口座への振り込みでのお支払いも可能となります。イーバンク銀行に口座をお持ちの方は代引手数料、振込み手数料がかかりません!

メール便での発送始めました!!
代金を先払いのみ300グラム以内、(7インチ3枚まで、CD1枚が目安)は送料¥180ー(税込み¥189ー)で発送いたします。

MANGROVE / BASE / ARISEのリリース作お買い上げの場合送料無料!
他のLP・CD等と同時購入でも送料無料です!
※代引きの際は代引き手数料がかかります。

always tedious editor's notes

出ました!EL BANDAのセカンド・アルバム「SKUTKI UBOCZNE」!そして前号表紙のBLACK BREATHの新譜もサイコーでした。大手と言っても差し支えないSOUTHERN LORDからのリリースですがビックリするほど僕の周辺では話題になっていません。あんなに格好良いのに、ナゼなんだろう…。あと、私事ですが5月半ばくらいからポーランド周辺をブラブラして来る予定です。ただ現時点(4月頭)でパスポートも航空券も取っていないことを某レーベルの人に話したら、「それ面白すぎ」と笑われました。もっと事前に計画立てて行くべきなんでしょうか?熱海に行くのとはわけが違うのですか?とりあえずEL ZINEという名前でやっているので、EL BANDAのライヴを見てこようかな〜、と。間に合ったら行ってきます。もし6月に次号が出たら、間に合わなかったということなので、この話題には触れずにソッとしておいて下さい。延々と出なかったら、どこかで野垂れ死んでいるはずなので、今号が廃刊号となります(笑)。
最後にニュースです。WARVICTIMS etcのSylenが新たにDESPERATというオールドスクールなハードコア・バンドを始動させています。DISじゃないロウ・ハードコアで格好良いです。それとロシアのUNBROKEN BONESが7"のレコーディングに突入。そのヴォーカル/NikitaのDRUNK WITH POWER recの次作はGERM ATTAKの音源集になるらしいです。ほんじゃ。

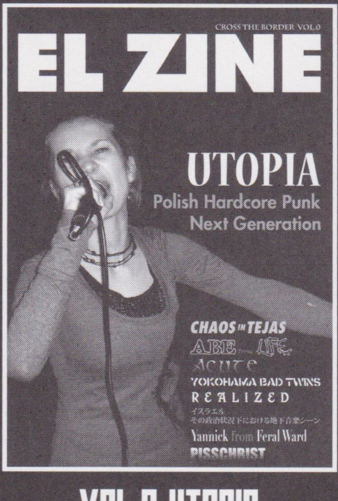
発行者　山路健二

次号の発売は…7月くらい?　※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.5　2010年5月1日発行　HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN　E-MAIL→unno13@gmail.com

BACK ISSUES

PRICE :
ALL Five Hundreds Yen

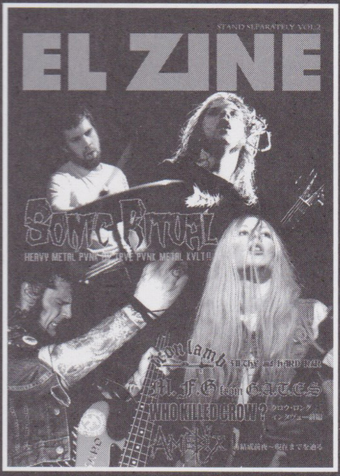
SOLD OUT :
Vol . ZERO and Vol . ONE



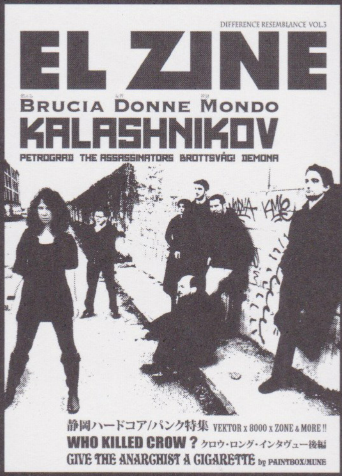
VOL.0 UTOPIA



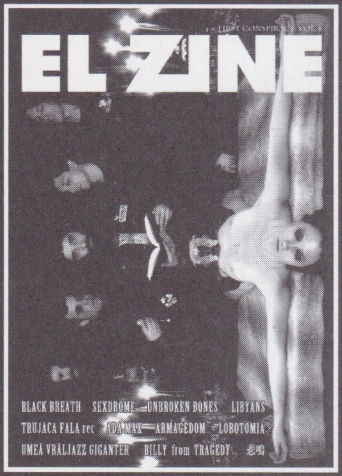
VOL.1 MOONLESS



VOL.2 SONIC RITUAL



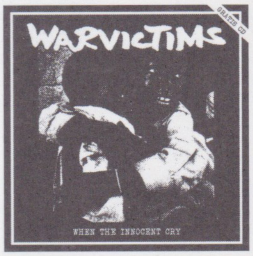
VOL3.KALASHNIKOV

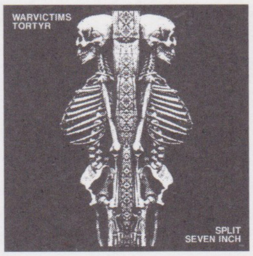


VOL.4 BLACK BREATH

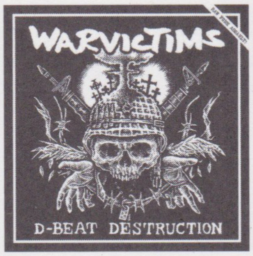
直納しているレコード屋さんetc
ANSWER(名古屋)　BASE(東京・高円寺)　BOY(東京・高円寺)　DISK UNION(関東圏)　G-SIDE(浜松/ライヴハウス)　HARDCORE KITCHEN(神戸)　K-CLUB(高知)　record KNOX(水戸)　MISERY(広島)　NAT(東京・西新宿)　PUNK&DESTROY(大阪)　TIME BOMB(大阪)　WOODY(新潟/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々
FUJIさん(REALIZED/北海道)　SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京)　YUさん(SKIZOPHRENIA/津山)　はっちゃん(BURST HEAD/沖縄)　紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台)　ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京)　YUKIさん(SP RECORDS/東京)　CR JAPAN(東京)

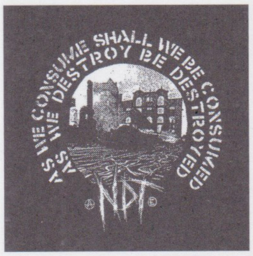


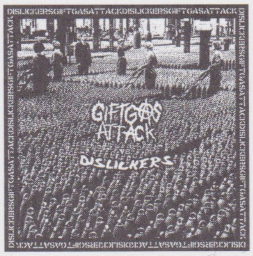




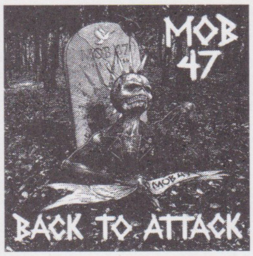


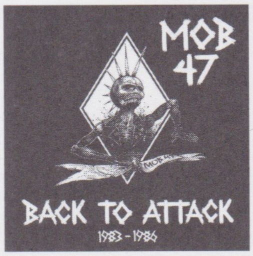


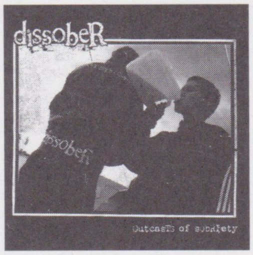




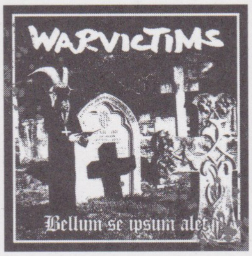




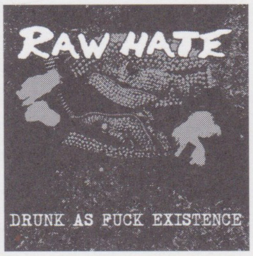








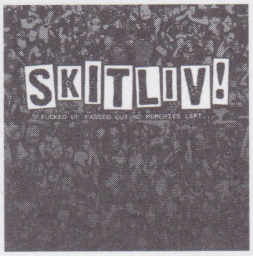




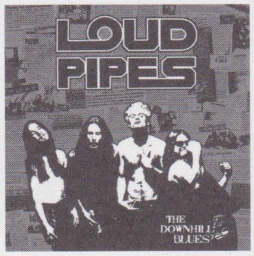






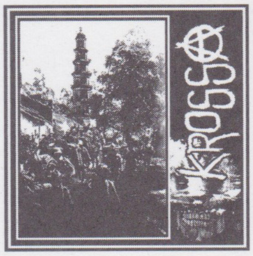




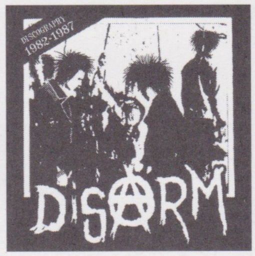


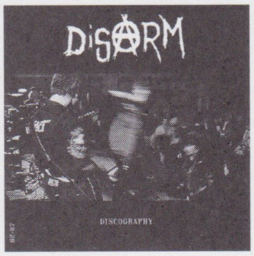












D-TAKT o RÅPUNK

EL ZINE ¥500



RÅPUNK

EL ZINE

DISTANCE BETWEEN OBJECTS VOL.5

EL Z

